東方飴人録

★揚ポテト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方飴人録

【Ｎコード】
Ｎ６４９９Ｖ

【作者名】
★揚ポテト

【あらすじ】
友達と登山をして、身勝手な行動を行い、一人の少年が遭難した。少年の名前は丹波蓮次。そんな彼が八雲紫という女性に出会い、ふとした事から隙間に連れていかてしまう。
辿り着いた先は、紅い霧に覆われた『幻想郷』だった。

第０１話「登山と遭難、隙間」（前書き）

初めましての方、久々の方、★揚ポテトです。

この小説は東方ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作です。原作にオリキャラが介入する部分があります。

原作に関与するオリキャラを嫌う方も多いと思います。出来る限り、世界観を東方らしく進めるようにしていきます。

その点も踏まえて、『東方飴人録』をよろしくお願いします。

第０１話「登山と遭難、隙間」

突然だが、皆さんは神隠しと言うのをご存知でしょうか？

天狗隠しともいい、人間がある日突然姿を消す現象である。

伝承によると当時は神域とも呼ばれていた山や森で人が行方不明になる。もしくは、街や里からなんの前触れも無く失踪することを昔の人は、神の仕業。または、神のいたずらと考えていた。

それが『神隠し』である。

そして、今日まで神隠しについて、述べられる事は数少なく証明すらされていない。

それが人による手段で起きたものなのか、或いは別の何者かによるものなのか……。

山の中のとある一郭。雲が掛かっており、視界が悪い。そんな最中、一人の少年が何やら同じ道を回っている。

少年は、やがて立ち止まると頭をかいて、複雑そうな顔をする。

「いや～、完璧に迷ったな……こりゃ」

男は身長、百七十センチ程で黒髪といかにも普通と言った容姿。服装は上が赤と黒色のチェック、下は誰もが着ていそうな普通のジーンズ。色は青と言うよりは、群青に近い。

何が入っているのかは不明だが、大きなリュックサックを背負っている。本人もそれが苦になっているのか、リュックサックの位置をずらしたり、背負い方を変えたりしている。

「うーん。どうして俺は、こんな事になってしまったんだ？　天気は悪いしあいつ等は山を降りちまうし……」

あいつ等というのは、一緒に山を登っていた友達の事である。

少年が一人で行動している理由。それは、彼がこの山で遭難？する三十分程前の事だ。

彼は、友達数名と保護者を合わせた山登りをしていた。夏休みの特別企画のようなものである。

「おい、山の天気が悪いから、このあたりで降りるぞ」

一人の男が周りの少年少女にそう言い掛ける。

男の背中には中ぐらいのリュックに熊避けの鈴、長袖の服に膝より少し下まで伸びたズボン、長めの靴下、そして登山用の靴、俗にいうトレッキングシューズを履いている。

男の年齢は三十ぐらいで、服装を見た限り、山登りの熟練者のように見える。おそらく保護者という役割で、子供達に付いているのだろう。　子供と言っても年齢は十五から十六程で、電車に乗れば料金は大人同然の微妙な境目の者ばかりである。

「そうやな、山城さんの言う通りだ。なんだか天気も悪くなってき

たし、下山した方が良さそうやぞ……」
「そうね。レインコートを持ってきたにしても、これ以上山にいるのは、危険な気がする。私も降りるに賛成！」
周囲の子供達は、下山するという意見が殆んどだった。ただ一人を除いては……。

「なんだよそれ！　登山は悪天候の中こそ、最高の達成感が得られるって言うじゃないか。俺は嫌だ、ここまで来たのに……」

その言葉に呆れる者も、少なくは無かった。今、無茶な言葉を発した者こそ、のちに遭難する事になる男である。

「丹波君……。そんな事言わずにさ、大人の言うことは、ちゃんと聞かないと……」
同級生であろう少女が、丹波と呼ばれる少年に降りようと説得する。丹波蓮次、それが彼の名前である。
「じゃあ、みんなは降りれば良いさ。俺は頂上を目指して歩くからさ……」
「あ、丹波君！」
少女の説得も虚しく、丹波蓮次は一人、森の道を歩いていってしまった。

そして今の状況に陥ったのである。結果から言えば少年の、自業自得ということである。山道を一人歩きながら、頭の中でこう考えていた。

『なんであの時、一緒に山を降りなかったのだろうか』と。

やがて天気は、曇りから雨に変わり大粒の雨が降りだす。

「やべ……、雨が降ってきた」
蓮次は、雨が降ると同時に駆け足で雨の凌げそうな場所を探す。
その間も、雨は容赦無く降り続く。
季節は八月、本来なら暑いぐらいの季節だが、現在は二千メートル級の山の半分程の場所に蓮次はおり、少し涼しいぐらいの雨ではあったがその反面、激しい雨に晒された。

「お、丁度良いところに洞窟が！」
すると目の前に、人が十分に入れる程の穴がある。雨が降っている中、蓮次にとっては砂漠のオアシスのようなものだろうか？　蓮次は急いでその洞窟に入った。

洞窟は年中一定の温度で保っている為、夏場は涼しい。
蓮次は洞窟内の、雨水が入ってこない場所まで行き、リュックを降ろして、その場に座る。そしてファスナーを引いて中身を開ける。
「タオルは、……あった。ふぅ、まいったな。誰だよ悪天候こそ最高の達成感が得られる。なんて言ったのは！」
蓮次はタオルで、濡れた体を拭きながら一人ぼやいている。だが間違いなく、それを言ったのも、実行してしんどい思いをしているのも、彼本人なのであるが誰一人として突っ込んでくれる物はいない。
理由は言うまでも無いだろう。

雨は止む気配が無く、ただただ降り続く。

蓮次は洞窟内の岩場のような場所で、腰掛けながら雨が止むのを

待っていた。しかし、止む事は無く時間だけが過ぎていった。

「あ、そうだ」

蓮次は何やら、自分のリュックの中を探り始める。中から取り出したのは、パッケージの描かれた飴である。リュック内の殆んどは、飴が入っていましたと言わんばかりの量だ。

「やっぱり俺は、これが無いとな」

この少年、丹波蓮次は自他共に認める、飴好きの甘党である。大阪のおばちゃん達が、いつも飴を持ち歩くのと同じで、彼も飴を常備している。

ちなみにリュックの中には、飴とタオル、携帯以外は持ち合わせていない。と言うのも彼は山に登った経験が、ゼロに等しかった。服装も山登りに適したものでは無い。蓮次はミルクの描かれたパッケージを開けて、その一つを出して転がすように、ゆっくり舐める。

「ふぅ……、やっぱ落ち着くな……」

更に、時間は過ぎてゆき……。

ふと外に出てみた時である。雨は止む気配が無く、ただただ降り続いている。

「これじゃあ、帰る事が出来ないじゃねぇか！　いや、……下手したら帰れなくなるかもな」

軽く心が折れそうになる蓮次。

「…どうしよう」
「大変ですわね、貴方も」
「そうなんだよな。遭難だけに…」

雨は土砂降りに変わった。

「あれ？　なんか俺不味い事言っちゃったかな？　確かに自業自得だよ。でもだからって、勢力増す必要ないじゃん……」
「さぁ？　ただこのままだと、帰れないんじゃないでしょうか？」
「そうだよな。そこをなんとかしないとな」
「なら私に良い考えがありましてよ。貴方が遭難から抜け出す方法」
「おっ、いいね。それで行こう……ん？」

あれ……？　この時、蓮次は疑問に思った。『一体誰と会話をしているんだ』と。蓮次は、突然体が震える。ただ震えるとは別の恐怖からだろうか？　恐る恐る声が聴こえた方を見る。

「なんだこれは……」

目の前にあったもの……、それは人一人が丁度入れそうなぐらいの、小さな隙間である。　今まで怪奇現象に巡りあった事の無い蓮次は、この時初めて、それに近いものに出会した。この時期なら怪談話にもってこいだろう。

更に驚く事に、そこから丸みがついた、小さな棒みたいな物が見える。
それは傘だと言うことに、このあと気がつく事になる。

「…これは夢なのかな？　疲れているんだ俺、きっとそうだ…」

蓮次はそう言って洞窟の外に出ようとする。しかし、大雨が降っている為、直ぐに戻ってきてしまう。

「吹雪いてましてよ」

「わかっるよ！　わかっているけど……。なんか逃げないと危険な感じがしたんだ」

「あら、失礼しちゃうわね」

女性の声が聴こえてくる。勿論、声の主は隙間の方からである。

「えっと……、どなたでしょうか？　出てきて貰えたらな……と」

蓮次は、隙間に向けて、話し掛ける。

すると隙間から傘を片手に持つ金髪の女性が現れる。

「初めまして、遭難者さん」

「ああ…　どうも」

この時、蓮次は素直に、綺麗な人だと思った。肌が透き通っていて、容姿は十人の男女問わず振り向く程の美人だった

「どうなっているんだ？　…て顔をしているわね」

「ああ、正直言ってまだ理解出来ない。あの穴は、どんな作りになってるんだ？」

蓮次は少し頭が混乱しながらも、状況を把握する為、穴を指差す。

「興味深々ね。まぁ貴方にはこれから入ってもらう訳だし……」

女性の言葉に、蓮次は疑問に思った。

「入る？　誰が？」
「もちろん貴方よ」
即答された蓮次は、思わず転けそうになる。
「そんな事、言ってな……」
蓮次は、ふと自分の頭の記憶を確かめる。さっき無意識の会話の中で、それに近いような言葉を言った気がするからである。
「ね？　言ったでしょ？」
「…言ったかな？」
「言ったわよ。俺はこの隙間に入りますって」
「…あれ？」
蓮次が記憶を確かめようとする前に、女性は隙間の近くまで背中を押す。
「やめろ！　押すな！」
「押すなって言うほど、押されたいのが本望なんでしょ？」
「何処の芸人だよ…」
踏ん張ろうとするも、金髪の女性の力に押され、遂に隙間の目の前にまで到達する。
「や、やめ……」
「いってらっしゃい！」
両手で背中を思いっきり押された蓮次は、そのまま穴の中に呑ま

れていった。

隙間の中は、奇妙な光景が広がっている。

「なんだ……、これは」

いくつもの目のようなものが、此方を睨んでいる。蓮次は焦って引き返そうとする。

「嘘だろ。穴が無くなってるじゃねぇか……」

「ほら、ボサッとしてないで、前歩く」

蓮次の隣には、隙間に閉じ込めた張本人がいる。まるで何もなかったかのように、蓮次を引っ張る。

「なぁ……、名前は何て言うんだ？」

蓮次が名前を聞く。女性は蓮次の方を見て、こう言った。

「その前に貴方から名乗って貰おうかしら」

特に断る理由が無かったので、蓮次は名前を女性に言う。

「丹波蓮次。高校生だ」

「そう。私は八雲紫。よろしく、そして……」

八雲紫と名乗る女性は、空虚な前方に、人差し指を向けて上からなぞるように一直線を描く。

すると目の前に、さっき蓮次が入ったのと同じ大きさの穴が出来る。

「いってらっしゃい」

紫は、蓮次の背中を思いっきり押した。

「え…」

そのまま外に弾き出される。そして、穴の先が空中だと言うことに気づくのに、そう時間はかからなかった。

「嘘……」

「それと、これを渡して置くわね。それじゃあ幻想郷へようこそ」

落ちる直前、紫に封筒のような物を渡された蓮次は、そのまま落下していった。「幻想郷って何さー！」と叫びながら……。

「さて、いってらっしゃい。貴方はこの世界でどう動くのかしら？楽しみにしてるわ」

紫は、何やら楽しげにそう言うと、隙間の中に消えていった。

第０２話「紅い霧と暗闇」（前書き）

第二話です。どうぞ

第０２話「紅い霧と暗闇」

森の中にて、一人の少年が落ちてきた。少年は正面から大の字を描き、地面に落ちた。
生憎、落下した距離が短かった為、怪我は掠り傷程度で済んだ。

「危ないな……。落とされた場所が低かったからよかったものの……」

大の字で地面に倒れながら、そう言葉を漏らす少年、蓮次は先程まで遭難者だった。
洞窟で雨宿りをしていた途中に、八雲紫と名乗る女性に出会い、隙間に放り込まれ今現在、情けない格好をしている。

「……立ち上がろう」

蓮次は、両手を地面に置いて立ち上がる。

「……雨は、止んだみたいだな」

蓮次は、雨が降っていないことに、気がつき辺りを見渡した。大雨の時とはうって変わって、そこには別の景色が写し出されていた。

「なんだこれは！」

周りに広がっているのは霧。それも紅の不気味な色をしている。
さっきまで大の字で俯せのまま倒れていた為、彼にとって初めて御目にかかる景色だった。

「一体、俺は何処に連れていかれたんだ？　たしか八雲紫とか言う人が言うには、幻想郷とかなんとか言ってたな」

蓮次は、ふとポケットに手を突っ込んでみる。中から薄茶色の封筒が出てくる。

「なんだこれは？」

封筒の中身を取り出してみると、中から真っ白な御札のような物が出てくる。

「御札？　なんか御札の割には固い気がするな。ポイントカードか？」

蓮次は、それを手にとり右から斜め、更には横まで様々な角度から確かめる。何処からどう見ても、普通のカードにしか見えなかった。何に使うものか、蓮次には検討がつかない。

「しかたない。ここに止まっていても話にならん。とりあえず進んでみますか」

そう言うと蓮次は、紅い霧が広がる森の中を、一人歩いていく。

この時、蓮次はまだ知らなかった。この場所でいま何が起きているのか。そしてここが、どんな世界なのかも……。

「いやー。まぁリュックサックがあるし、どうにかなる……よな？」

蓮次は、ふとリュックから携帯を取り出し、開けてみる。

「げっ、圏外かよ」

携帯の液晶画面の左上には、電池の残高の隣に、圏外と表示されている。そして携帯のデジタル時計には、十九時二十五分と表示されており、この時間であれば日没はとっくに過ぎている。

ＧＰＳの使用も試みた蓮次だったが、圏外である為、勿論機能しなかった。

「仕方無いか……」

蓮次は、道を進むことにした。

辺りは日没により、薄暗くなっており、更には霧により道中の不気味さは更に増す。

「まっずいなぁー…」

蓮次は焦った。このままでは、状況も掴めないまま、野宿という事も有り得るからである。それだけは、蓮次も避けたい。

――その時だった。

「ん？なんだあれは…」

前方から、黒い何かが近づいてきた。

それは、黒い気体を纏った何かだという事に、彼が気付くのには、

そう時間は掛からなかった。

やがて、その黒い気体に覆われていた何かが姿を現した。
纏っていた者の正体は、カッターシャツの上に、黒い服を身に付けた金髪の少女だった。背は、蓮次の胸より下の高さであり、頭には赤くて小さなリボンを飾っている。

少女は、蓮次の方を見る。

「えっと……。初めまして」
少女は頭をペコリと下げる。
「初めまして……」

蓮次も少女に挨拶をする。すると少女は、何やら嬉しそうな表情を浮かべ、蓮次に対して次のような事を述べた。

「あなたは、食べられる人間？」

その言葉を聞いた瞬間、蓮次は周りが凍りくような感覚に襲われる。

「えっと……」

言葉が詰まる。何を話せばいいのか分からなくなった。
これが冗談ならば、蓮次も「ああ、そうだよ。ただし俺が食べる側になるかもな？」と軽いジョークを少女に言っている所だった。
しかし、少女の表情を見る限り、それが冗談では無いということに、蓮次は気づいた。
このままでは危ないと考えた蓮次は、一つの提案を思い付いた。

とにかく、相手の空腹を満たそう。

「俺は食べられる人間では無いんだよ。でも、食べさせることができる人間ではある」

「ん？　どういう事？」

蓮次はさっそくリュックの中から、飴を一袋取り出す。パッケージには、英語で何かが書かれてある。

「この飴は甘くてクリーミィで、こんな飴を持っている俺は、特別な存在。だから食べてはならない」

「そーなのかー？」

「そして、君に渡すのもこの飴で、彼女もまた特別な存在なのです」

意味不明な言葉を発してしまった蓮次ではあったが、少女にその飴を渡すと、喜びながらそれを受け取った。

「ありがとう、それじゃあこの袋を貰っていくわ」

「あ～どうぞどうぞ」

少女の喜ぶ顔を見て、どこか満足そうな表情を浮かべた蓮次は、そのままその場を立ち去ろうとする。

「あ、飴のお兄さん」

立ち去ろうとした蓮次を少女は止める。蓮次は、下手に逃げれば追ってきそうな気がしたので、振り向く事にした。

「私はルーミアって言うの、飴をありがとう。じゃね」

少女は、そう言って手を振る。蓮次も少女に手を振って、ルーミアと呼ばれるその少女が、立ち去るのを眺めていた。

ルーミアと名乗る少女が立ち去った後、蓮次も足を進める事にした。

「しかし、この場所には人食の文化が流行っているのか？　あんな小さい娘でも、人を食べるのかな」

人食。読んで字の如く、人間を食する事である。中国等では、そう言った事が多かったらしく、日本でも応仁の乱の時に、人を食して長らえたと言った記録が残っている。

「だとしたら、やだな……」

そうでない事を願って、蓮次は暗くなった夜道を歩き始める。

「あれ、霧が濃くなってるな？」

進むにつれて、赤い霧はその濃さを増していき、五？以上先は、ほぼ見えない状態に近かった。

蓮次は、この霧が余りにも赤い為、健康状態に影響がないか考えていたが、特にこれといったことも無かった。

だが、別の問題が今の蓮次にはあった。

「うー……、なんだよ。寒くなってないか？　おかしいな、夏場だというのに」

気温の変化である。霧の影響なのか蓮次には分からなかったが、寒さが半端無かった。

蓮次は、体を震わせながら進んでいく。すると湖らしき場所にたどり着く。

そこで蓮次は、驚きの光景を目にする。

「なんだこりゃ……」

北方、それも極寒の地でしか見る事が出来ないであろう風景が、そこには広がっていた。

湖の全土が、氷で覆われていたのである。

「ありえねぇ……、夏場だよな今、すげぇな」

蓮次は少々興奮気味で、湖の上に乗る。彼が乗っても潰れないという事は、相当厚い氷で覆われているということがわかる。

「とりあえず向こう岸まで行ってみるか……」

そう言いながら足を前に踏み出したその時だった。

氷は音を立てて、割れる。足場を失った、蓮次はそのまま冷たい水の中に、落ちた。

どうやら、場所によっては氷が薄い場所もある事がわかった。

しかし、時既に遅く、蓮次の体は冷水に浸かっている。

「冷たい！　冷たい！」

冷たい水の中、必死に体を動かし、厚い氷に捕まろうとするが、背中のリュックが重くて、体が思うように動かない。

「だれか助け……」

リュックを外す前に、限界を迎えた蓮次は、そのまま真冬の水の中に沈んでいった。

一方、その湖の上空では、二人の少女が飛んでいる。

一人は、めでたい紅白衣装を身に付け、頭に大きなリボンを括っている黒髪の巫女。腋を露出させている。

もう一人は、カッターに黒い服。ルーミアに近い服装をしており、箒に股がっている。

金髪で、一部を御下げのように括っており、黒い帽子を身に付けている。格好からすれば、魔女そのものである。

「ねぇ……魔理沙。今人の声がしなかった？」

巫女の少女が魔理沙と呼ばれる、魔女服の少女に声を掛ける。

「え、しなかったような気がするけど？　霊夢の聞き間違いじゃないか？」

霊夢と呼ばれる巫女と、魔理沙と呼ばれる魔女。和と西洋、なんとも不思議な組み合わせをした二人組である。

そんな彼女達にはある目的があった。

紅い霧の正体。それは自然現象ではなく、人的な手が加えられたもの。

これを異変と考えた二人は、解決すべく霧の出所を探っていた。

「ねぇ、魔理沙。あれ…」

「おお、あれか」

霊夢が指差した先には、霧に包まれた中に映る、館が見える。

「匂うわね……」

「ああ、臭いぜ！」

「行ってみましょう。魔理沙」

二人はそう言うと、館の見える場所目掛けて、飛んでいった。

第０３話「異変解決と地下室」

紅魔館。全体が紅く染まった、名前通りの館。湖の島に建っており、島と向こう岸を繋ぐ橋もあるが、誰が作ったのは明らかにされていない。
館の象徴として、もっとも高い場所には時計台がある。
現在、その時計台近くにて巫女服の少女、博麗霊夢が空中戦を繰り広げている。

霊夢と戦っているのは、空中を飛び回る少女。

「流石は、我が館のメイドを殺しただけの事はあるわね……」

メイドとは、ついさっき霊夢が撃退した、メイド長を勤める者の事である。十六夜咲夜が名前で、霊夢はその少女を難なく倒した。

紅い霧の異変にて霊夢と魔理沙の二人は、この館が一番怪しいと考え、入り込んだ。
結果は、黒でありこの館から紅い霧は出されている事が判明する。

なお、姿を見せない魔理沙は、別の場所にて戦闘を繰り広げている。途中で霊夢を先に進ます為、足止め役をかって出た。

淡い桃色の何処か貴族を思わせる服装に、薄い青髪の上にナイトキャップのような物を被っている。
まだ十代にも満たない容姿と背格好。幼女にも見えるが、彼女の

背中には大きな翼のシルエットが映る。
彼女は、人間では無い。今回の霧の異変の犯人である。

「別に殺してなんかいないわよ。それより、今は自分の戦いに集中したら？」
「言ってくれるわね」

レミリア・スカーレット。彼女こそ館の主であり、吸血鬼と呼ばれる生き物の一人である。

「なら、これはどうかしら？」

レミリアは懐から何かを取り出す。
赤色の紙、ただし材質はしっかりしたもので、簡単には折れ曲がらない作りになっている。

「吸血鬼を舐めてもらっちゃ困るわね！　紅符『スカーレットシュート』」

レミリアと呼ばれる少女の言葉と同時に、彼女の足場から陣が出現する。更にそこから、サッカーボールの二倍程の大きさの物から、野球ボール程の物まで、様々な球体を出現させ、霊夢に襲い掛かる。

「楽しい夜は、まだまだ終わらせないわ」
「はやく終わらして、神社に帰りたいんだけどね……蒸し暑いし」
霊夢は、ダルそうにそう言うと、レミリアとはデザインが違った紙を取り出す。カードと言うよりは、厄除けの御札のような形をしている。

「霊符『夢想封印』」

紅魔館の最下層。そこは、湖と繋がった地下水が流れては入り込むを繰り返している。地下水が流れている場所は、トンネルのような作りをしている。

そんな場所に、一人の少年が水に流されながら手摺(てすり)代わりになるようなものを探している。

もし手摺が見つけられなかったら、また湖に流される事を悟り、水の寒さに震えながらも梯子(はしご)のような場所を見つけて、よじ登った。

「さ、寒い……」

氷の湖が割れて、湖に落ちた少年、蓮次は体力が弱まっていながらも、どうにか生きていた。まさか夏の季節に凍え死にそうになるとは、思ってもいなかっただろう。

「ふぅ……、ちょっと休憩するか。もう携帯も使えないだろな」

ポケットに入れておいた携帯は、既に液晶画面が真っ暗になっており、電源部分を押しても反応しない。

「折角、買ってもらったのにな……」

蓮次は、携帯をしまうと壁に凭(もた)れる。
飴が大量に入っていたリュックは、いつの間にか、何処かに流れてしまったのか、蓮次がここに来た時には、既に無くなっていた。
「今日は散々だな。寒いし痛いし壊れるし無くすし……最悪だ」

「…ん？」
その時、あるものを見つける。
赤茶色をしたブロック。煉瓦(れんが)で出来た階段が蓮次の視界には映った。

「……ここって人の家だったのかな？　いや、どう考えてもそれしか考えられないな」

地下水道に梯子。更には煉瓦の階段。何処をどう見ても、人によって施された地形と言えるだろう。
ただし、人が住んでいるかどうかは今の蓮次には断定できない。
地下水道に生活の跡は一つも無い。地下水道には、人が住んでいないという事がわかる。

「ちょっと行ってみるかな」
蓮次はそのまま、階段のある方まで足を運んだ。

館内の図書室。そこでも二人の少女が対峙している。
一方は白黒の魔法使い、魔理沙。ここで戦闘を行い、その隙に霊夢を館の奥に進ませた。
もう一方は紫色の長い髪に、薄い桃色の服とナイトキャップのような帽子を身につけ、その帽子の左側には、月の形を模した飾りがついている。
名前は、パチュリー・ノーレッジ。図書館の管理をしている少女である。

「どうした。随分と辛そうだな？」

箒に乗っている魔理沙は、動きが鈍くなったパチュリーに疑問を感じる。当初は、多くの弾幕で魔理沙を翻弄していたが、比べると威力が落ちている事に、魔理沙は気づく。

「く……、ちょっと疲れただけよ」

パチュリーは、そう言うと魔方陣の書かれたカードを取り出し、唱える。

「へへっ、とっておきの奴を見せてやるぜ」

魔理沙は、ポケットから何かを取り出す。それは八角形になっており、その中心には穴が空いている。
魔理沙はそれを、しっかりと右手で握りしめた。

「水木符『ウォーターエルフ』」

パチュリーが詠唱で魔方陣を展開し、弾幕を魔理沙周辺に放ってくる。

魔理沙は、箒に股がりそれを交わしつつ、パチュリーの方へ向かう。

そしてパチュリーの正面にまで辿り着くと、八角形のそれに力を注ぎ込み、光のようなものを、一点に集中させる。

「しまっ……」

「いくぜ！　とっておきの一撃。恋符『マスタースパーク』」

放たれた極太のレーザーは、パチュリーに直撃した。そのままパチュリーは、落下した。

「危ないな…」

魔理沙は、落下するパチュリーの手を掴み、どうにか衝撃を阻止する。手を掴んだ魔理沙は、握っているパチュリーの顔を見る。

「魔法が得意のようだな。まだ隠し持ってんじゃないのか？」

「…貧血でスペルが唱えきれないだけよ…」

パチュリーは、少し悔しそうにそう答える。それを聞いた魔理沙は、口をにやりとさせる。

「じゃあ、今度はもっと凄いのを見せて貰うぜ」

魔理沙は、パチュリーを壁に凭れさせると、霊夢の方を目指して箒で飛んでいった。

階段を登り終えた蓮次の先には、茶色の扉があった。

「ちょっとは温まるかな……」

扉を開けると、その先には階段があった。階段の先には扉が見えている。蓮次は階段を登り、二枚目の扉を開けた。

「なんだこれは……」

その先にあったもの。それは、三方向に分かれた迷路のような場所だった。灰色の壁はコンクリートのような造りをしており、簡単には壊す事が出来ないようになっている。

とは言え、元々コンクリート自体が生身の人間に壊せるような、生半可な造りはしていない。

「ひょっとして、入ってきたら不味かったのか？」　人様の家なら当然の事であるが、体を温める為の運動だと蓮次は考えた。

「あー、早く行こう……。寒いったらありゃしない」

蓮次はそう言うと、正面に向かって思いっきり足を蹴った。

「あれ？」

蓮次はこの瞬間、何処かで感じたような出来事が脳裏に浮かぶ。

デジャヴ……、いやそれもその筈。この状況は先程、八雲紫の隙間の移動の後に起こった事によく似ていたからである。

「ははは……、またかよ！！」

足場が無くなった蓮次は、四角形のパネルの穴に落ちていった。

再び紅魔館の上空。

「く……、流石は巫女って言ったところかしら？」

レミリアの服は所々破れており、かなりダメージを受けたと思われる。表情にも疲れが見え始めている。

一方の霊夢はというと、戦いの途中にて欠伸をする姿も見られ、表情にも殆どと言っていい程疲れを見せなかった。むしろ余裕すら感じる。

レミリアは、そんな霊夢の反則的な強さに圧倒されつつあった。

この時、初めて博麗の巫女がどれ程恐ろしいものなのか実感した。だが、それと同時に博麗霊夢と言う存在に、レミリアは大きな魅力を感じ取る。

「ねぇ、巫女。私のところに来る気は無い？」

「御断りよ。何で本業棄てて悪魔の元に行かなきゃならないの。こっちは仮にも聖職者だから」

「即答ね……、まぁいいわ。次の一手で決めてあげる」

レミリアは、そう言って最後のカードを手に取った。詠唱により

紫色をした球体が霊夢に向けられる。

「『レッドマジック』」

霊夢の身長よりも大きな弾幕が、次々に展開され、辺りは球体に包まれていく。

さすがの霊夢も、多少それに焦りを見せるが、次々と球体をかわした後、手元にあるカードをレミリアに向ける。

「終わりよ。霊符『無想封印』」

霊夢の詠唱により、様々な色をした光がレミリアに向けて放たれる。

隙をつかれたレミリアは、反応に遅れてしまい、霊夢の技が当たる。

「く……」

レミリアは、衝撃と同時に宙に浮くことが出来なくなったのか、そのまま館の屋根の上に落ちた。

「痛ったぁ！」　霊夢の無想封印よりも、屋根に落ちた衝撃の方が痛かったようだ。

「痛いのは生きている証拠よ。それよりどうするの？」

霊夢の言葉にレミリアは顔を下に向けて、小さな声で「私の……負けよ」と言った。

それを聞いた霊夢は、レミリアに右手を差しのべる。霊夢の行動に驚いて、目を少し大きくしたレミリアだったが、差しのべられた

手を右手でそっと握った。

「温かい手をしてるのね。咲夜みたい……」
「ああ、そう言えばあいつも人間だっけ？」

霊夢は、右手をレミリアが握った事を確認すると、手に力を入れて立ち上がらせる。

「綺麗な景色ね。霧さえなければ最高なんだけど……」「え、そう？　私はこのままの方がいいけど」
「それはあんただけ！　とにかく、霧は消すこと。いい？」
「わかった……」

素直にそう答える。そんなレミリアの顔を見た霊夢は、館の屋根から映る湖の景色の方に、再び視点を移した。
景色を見ている霊夢の顔が、月に照らされており、レミリアはそれをじっと見ている。
それは敵意の眼差しとは違い、尊敬に近い眼差しだった。
レミリアは、さっきの言葉を、再び霊夢に話そうとする。

「ねぇ、私のところに…」
「だから、お断りだって！」
「ケチ……」

レミリアは頬を膨らませた。

「おーい霊夢！　そっちは終わったか！」

会話をしていた二人に、箒に乗った魔理沙が現れる。

「煩いわね。異変は解決したわ」

「なんだよ……、せっかく応援に来たのに」

「そう。まぁお疲れさん」

「ああ、そっちこそな」

互いに顔を見合わせて笑う。レミリアは、そんな二人の姿を見て溜息をつく。

紅魔館には、格闘経験豊富な門番が、館内には多くの妖精、更には優秀な魔法使いにメイド長と、多くの人材が揃っていた。

しかし、今夜それを全て看破された。更に言うと看破したのは、たった二人の少女ときたものである。

「まいったわ……。まさかこれ程までとはね」

二人の少女を見て、レミリアは人間の強さのようなものに、触れた気がした。

これにて、紅い霧の異変は幕を閉じたのだった。

だったのだが……。

「あれ、なんだろ？」

地下のとある一室。一人の少女が、上から落ちてきたそれをじっと見ている。

少女の視線の先には、気を失った人間、丹波蓮次の姿があった。

不思議そうにそれを眺める姿はまるで、新しいものを発見した無垢な少女の表情そのものである。

少女は、乗っていたベッドから降りると、蓮次に近づいた。

第０４話「地下室の少女と能力」

紅魔館の地下室。そこはに、一つの部屋が存在する。構造は貴族を思わせるような、洋式の机や椅子、更にはぬいぐるみがいくつか置いてある。
大きなベットの上に、一人の少女が横になっている。

「あーあ、暇だな……」

日焼けの色がまったく無い白い裸。一本一本綺麗に纏まった金色の髪。
背中には細みのある翼が生えており、宝石を思わせるような八枚の羽根が左右対象にある。

「はぁ、何かおもしろい事は無いかな……」

少女の名前は、フランドール・スカーレット。レミリアの妹であり彼女も当然、吸血鬼である。
フランドールは暇を持て余していた。普段ならばこの部屋に遊び相手になってくれる、妖精か妖怪がいる筈なのだ。
しかし、今日に限って誰一人この部屋には来なかった。その理由は、霊夢と魔理沙が館に入ってきた事により、フランドールの相手をする者が居なくなったからである。

「ひまひま！」

ベットの上でジタバタと足を動かす。
その後、体を仰向けにする。そこに映るのは、いつも通りの天井。
生まれてきてから長い間、同じものを見て育った彼女にとって、そ

れは見慣れたものだった。

「何か、こう面白い事とか無いかな？　天井からいきなり、妖精達が飛び出てくるとか」

フランがそう言った、次の瞬間だった。

突然、ドンと音を立てて何かがカーペットの上に落ちた。一瞬の出来事だったので、フランから見れば残像で黒く映り、姿がよく解らなかった。

「な、なに……？」

突然の出来事に戸惑いながら、カーペットの上に落ちてきた『それ』を見る。

フランは首を傾げた。

「あれ、なんだろ？」

そこに倒れていたのは、一人の少年だった。どうやら気を失っているらしい。

フランは、ベッドから降りると、少年が倒れているカーペットに近づいた。

「えっと、大丈夫かな？」

そっと手を近づけて、少年に触れる。

「冷たい…？　確か周りは暑いはずなんだけど」

触れた瞬間、少年の体温が低くなっている事に気づく。フランは

どうすればいいのか悩んだ。
吸血鬼は、元々体温が下がったりしても、命に関わるような事ではない。しかし、今目の前にいる少年は顔が真っ青であり、このまま放置すれば大変な事になるという事が、フランにはわかった。
しかし、どう対応すればいいのか判らない。そもそもフランは人間に出会った事が無く、血から調理されたものしか見たことが無い。

「どうしよう」

悩んでいたその時だった。

「う、うーん……」

少年の意識が戻ったのである。
声を聞いたフランは、少年の顔を見る。目蓋を開けようとするが、うまく開けないようだ。フランは、少年に話し掛けた。

「大丈夫？　なんだか苦しそうだけど」
「……ちょっと寒いかな」
「服、脱いだ方がいいよ。体が濡れていたから、いくら夏場でも風邪をひいちゃうよ」
「ああ、そうだな」

少年は、そう言うと毛布に潜りながら、上着とジーンズを横に置いて、そのまま少し体を震わせて、毛布の中で丸くなる。

フランは、しばらくその少年の顔を眺めていたあと、ふと疑問に思った事を少年に話した。

「ねぇ、あなたは何処から来たの？」

返事は返ってこなかった。代わりに返ってきたのは、すーすーと息が漏れる声、少年の寝息だけが聞こえてきた。

「あれ、寝ちゃったの。余程疲れたのかな？」

フランは、少年が寝ている事を確認すると、ベッドの方に戻った。

「また明日にでも聞いてみようかな？」

そう言うと、ベッドに上がって横になった。

「うーん……、あれ？」

目が覚めた蓮次に飛び込んできたのは、見慣れないところだった。最初に映ったのは、紅色の天井である。突然それが目に入って、多少抵抗を感じていた蓮次だったが、見ているうちに慣れていた。次に、蓮次の上に被さっているもの、体温により温もりがある布団である。この時、誰かが蓮次の為に毛布を被せてくれた事が、薄々記憶に残っていた。

そして、横たわる蓮次の視線の先には、少女の顔があった。少女は蓮次を覗きこんでいる。

「おはよう。昨日は眠れた？」

その言葉に蓮次は昨日、毛布を被せてくれた少女が、この娘だということがわかった。

「昨日は、ありがとう」

「ううん、別にいいよ。それよりさ……」

フランが蓮次に何かを言おうとした時だった。向こうの扉から、トントンと音が聞こえる。

それを聞いた瞬間、フランは蓮次を起こす。

「ま、まて。どうしたんだ……」

下着しか来ていなかった為、格好はパンツとシャツのみである。

「いいから、説明は後で……、こっちに来て」

フランはそう言って蓮次を引っ張った。

「はいって…」

「おはようございます、妹様」

ノックをしたのは、メイド姿の妖精だった。

「お部屋の掃除に参りました」

「えっと、今日はいいよ。汚れてないし」

「なりません。ちゃんと綺麗にするようにと、お嬢様から言われて

ますので…」

メイド妖精は、そう言うと机をタオルで拭き始める。メイドと言うだけあって、隅々まで綺麗に掃除を行っている。

「昨日は、なんだか騒がしかったね。何かあったの？」

フランはメイド妖精に声を掛ける。

「はい。実は、昨日は館内に侵入者が入ってきたんですよ」

「侵入者？　一体どんな人？」

フランの質問にメイド妖精は、振り返る。手の動きを止めて顔を見合わせるとこう言葉を漏らした。

「人間ですよ」

メイド妖精は、そう言い終えると再び手を動かす。

「それで、侵入者は？　お姉様やパチュリーはどうしたの？」

侵入者に興味が湧くフラン。人間というカテゴリーに惹かれたのだろう。彼女は今まで人間という存在は、調理済みの状態だった。とは言え、別に殺している訳では無い。人を襲って血を少し抜くぐらいの事であり、姉のレミリアもそれが一番だと考えている。

ある意味、『生身の人間』に遭遇した事の無いフランにとっては、全てが新鮮であったに違いない。

「それが……」

何やら口ごもるメイド。そして次の一言がフランの好奇心を駆り立てる。

「お嬢様も、パチュリー様も美鈴様も、侵入者に敗北しまして。…」

…我々メイドも刃が立たなかったのです」

「負けたの？　みんな」

「はい。それもたった二人の人間にです」

あのお姉様が負けた。更には紅魔館の全員でも刃が立たない連中。

それもたった二人の人間。

「紅茶。置いておきますね…」

「ありがとう。もう下がってもいいよ」

「では、失礼しました」

メイド妖精は、そう言うと部屋から出ていく。

その様子を確認したフランは、ベッドの方に近づいて「出てきていいよ」と声を掛けた。

「ふぅ、どうも」

ベッドの下から蓮次が出てくる。右手には丸めた服を、左には大雑把に畳まれたジーンズを握っている。

その姿は、何処かのホラー映画に出てきそうなゾンビのようである。

「ありがとう。何か、色々と悪いな。見ず知らずの俺に、こんな事までさせちゃって……」

「いいのいいの。それより、教えて欲しいことがあるんだけど？」

「教えて欲しいこと？　答えられる範囲なら良いけど…」

フランは、蓮次の言葉に愉しげな表情を浮かべる。そして、彼に対してこんな質問をした。

「貴方は、何処から来たの？　名前は何て言うの？　何しにここへ来たの？」

「ストップ！　一つずつ答えるから」

幾つもの質問をされた蓮次は、最初に言われた質問から順番に答えていった。

山にて遭難して、変な人に出会い気がついたらここにいた事。自分の名前が丹波蓮次である事。そして、夏場なのに湖で氷が張っており、上に乗っかると氷が割れてそのまま沈んだ。

かと思いきや、そのままここの地下水道に流れ着き、階段を登ったかと思いきや罠にはまり、この場所に落ちた事。

今、判る範囲で蓮次はプランに全てを説明した。その説明ついでに、服とジーンズを身につけた。

「だからあの時、体があんなに濡れていたんだ…」

「まぁ、そう言うことになるな。まさか、いきなり氷が割れるなんて、思いもしなかった」

蓮次は、そう言って頭を掻いている。

「それじゃあ、何者？」

「何者、と言うと…」

「えっと、貴方はどんな妖怪なの？」

「……へっ？」

フランの言葉に戸惑う。蓮次は妖怪と言う響きに、いまいち理解が出来なかった。聞き違いかもしれないと思った蓮次は、改めて聞くことにした。

「えっと、今何とおっしゃいましたか？」

「え、だから貴方は何の妖怪なの？　もしかして悪魔」

更に混乱するような言葉が返ってくる。妖怪の次は悪魔という単語が出てきて、一瞬頭をクラッとさせる蓮次。

蓮次の頭の中には、妖怪と言われて出てきたのが、絵巻で出てくる鬼や天狗などが頭に入ってくる。

一方悪魔と言われれば、黒い翼を生やしたＲＰＧなどに登場する生き物。または、昔のヘビメタに出てきた物凄い髪の方々を思い浮かべた。

「う、頭痛が…」
「だ、大丈夫？」

蓮次の姿を見たフランは、メイド妖精が机の上に置いた、紅茶を茶器に注ぐと蓮次に渡す。

「どうぞ。楽になるかも…」
「ああ、ありがとう。一杯いただていくよ」

茶器を手に取り、紅茶を口に運ぶ。

蓮次はそれをを飲んだ時、少し変わった味だと感じた。例えるとそれは、鉄を連想させるような味である。

しかし、昨日から湖の水が無理矢理口の中に入って以来、何も飲んでいなかったので、それを難なく飲み干した。

「まぁ、あれだ。俺は妖怪でも悪魔でもない」
「え、それじゃあ蓮次は何者？」

何者と聞かれた事が、過去に無かった蓮次は、この際言ってしまう事にした。

「人間だ。丹波家の長男、丹波蓮次」

「え……」

蓮次の言葉に耳を疑った。確かに人間という言葉がフランには聞こえた。

さっきメイド妖精に言われた、たった二人の人間が、館内の全員に勝利を納めたという話を思い出す。

メイド妖精の言葉は、今までの想像してた世界とは、また違った世界を垣間見た瞬間だった。

そして、今目の前にいるのが人間であるという事。

「本当に蓮次。人間なの？」
「ああ、正真正銘の人間だ」
「へぇ、そうなんだ…」

フランの心の中にあった好奇心は、頂点に達しようとしていた。

一方の蓮次も、フランの背中に付いてあるものが気になっていた。

「じゃあさ。俺からも一つ聞いてもいいか？」
「うん。いいよ」
「その背中にあるのは、飾りか何かか？」

蓮次はフランの背中の、宝石のようなそれを指さす。

「ああ、これ？　これはね。私が吸血鬼としての象徴の一つかな？」
「……」

今度は完全に黙り込んでしまった蓮次。吸血鬼というキーワードが、頭に入ったからだろう。

会話を止めたら不味いと考えた蓮次は、話題を広げる為に質問を

続ける。

「吸血鬼ってあの？」
「そうだよ、この背中が目印」
「人の血を吸って生きる？」
「そうだよ、さっき蓮次が口にした紅茶にだって、茶葉に血をブレンドしたものだし」

さっき飲み干した紅茶が、妙に鉄の味がした事にようやく気づく。鉄の味がした紅茶の正体は、紅茶の茶葉に少々の血、知りたくも無かった事実が蓮次に突き付けられる。

「私は、フランドール・スカーレット。吸血姉妹、スカーレット家の次女よ。よろしくね、蓮次」
「ははは……、よろしく……」

笑うしか無かった。蓮次にはただそれしかない。

「それでさ蓮次。さっそく何だけど……」
「はい！　何でしょうかフランさん」
「フランでいいよ。それより、人間なんでしょ？　何か能力とか見せて」

それは突然の一言だった。人間だから能力を見せる。その言葉の関連性が掴めない蓮次は、頭を傾げる。

「どういう事だ？」
「え、どうもこうも、持ってるんでしょ？　隠さなくてもフランには判るよ。その証拠に、ポケットから出ているそれ。スペルカード

でしょ？」

そう言われて蓮次は、ジーンズのポケットを見てみる。すると、ポケットの間には、八雲紫から貰った真っ白な紙が入っている。

「てっきり、無くしたかと思っていたんだが」

蓮次は、その紙に触れてみる。

「あれ？」

不思議な事が蓮次の身に起きた。

普通、水に濡れれば大概の紙は、ふやけて駄目になる事が多い。だが今、蓮次が触れた紙は、ふやけていない。

「不思議な紙だな。全然濡れてないし…」

「へぇ、不思議だね。それより能力見せてよ」

フランは、相変わらず能力を見たがっている。蓮次は困っていた。平凡に生きてきた彼にとって、能力と言えば料理ぐらいである。特にずば抜けた身体能力があるわけでも無く、容姿だってカッコいい訳でもなく中の上、まぁ普通に属するだろう。

「はやくはやく！」

「参ったな…」

期待を湧かせるフランと戸惑う蓮次。

悩んだ末に蓮次は、適当にやって能力は無いと公表する事に決めた。

「それじゃあ、やるぞ」

蓮次は、目を瞑り手に力を入れる。その姿を真剣に見るフランの視線が、彼を更に困らせる。

心の中で、何度も少女に「期待外れでごめんなさい」と謝りながら蓮次は、ふとレモン味の飴が食べたくなった。

ザックの中に積めていた飴。無いもの程、欲しがるものである。

そう考えて、手の力を緩めた次の瞬間だった。

「凄い！　蓮次凄いよ」

フランの喜ぶ声が聞こえてくる。何が起こっているのか判らなかった蓮次は、目を開けた。

「これは！」

蓮次が力を込めていた右手の先には、何やら黄色く丸いもの。それをフランが一つ、手に取って嗅いでいる。

「甘い匂いがする」

「へ……、まさか」

蓮次は右手の先にあるそれを、一粒口に入れた。フランもそれに続いて、口に含む。

「嘘だろ。これって…」

「あまーい。なんだか蓮次って魔術師みたい」

フランが口に含んでいるもの。蓮次が口に含んでいるもの。

それはさっき、蓮次が頭の中で舐めたいと考えていた、レモン味

の飴そのものだった。

「どうなっちゃたの？　俺……」

幸せそうに飴を舐めているフラン。

一方で、短時間で、多くの出来事に遭遇して頭がショート寸前の蓮次は、その場で呆然と立つ他無かった。

含んだ飴を、口の中でころがしながら……。

第０５話「地下生活」

博麗神社。幻想郷の最も東に建っており、幻想郷の管理を行っているのも、この場所である。神社の巫女である少女、博麗霊夢は親友である魔理沙と縁側で腰掛け、お茶を飲んでいる。

「しかし、三日前は疲れたわね」
「まぁここじゃあ、あれぐらいザラだから仕方ないと言えば仕方ないな」

三日前の夜、彼女は魔理沙と共に紅魔館と呼ばれる館で、多くの相手と交えた。
紅い霧を起こした犯人、レミリアを倒し異変を解決した霊夢であったが、ある問題を抱えていた。其れ程大きな問題ではなかったのだが……。

「霊夢。お客さんだぜ」

魔理沙は、そう言って指差した先には、そのレミリアと傘を翳（かざ）しているメイド長、咲夜の姿があった。
十六夜咲夜。紅魔館でメイド妖精を指揮する、館唯一の人間である。銀髪が特徴でメイド服に身を包んでおり、あらゆる場所にナイフを隠し持っている。
異変の時に、霊夢と戦闘を二回行うが、その全てに敗北を喫している。

「また来たの？　あなた達……」
「ええ、暑い中来てやったわ霊夢。感謝しなさい」

「相変わらず図々しいな」
「魔理沙とか言ったわね。あなたも人の事を言えるのかしら？　昨日、館の図書館から本を盗んだそうじゃない」
レミリアの言葉に霊夢は呆れた顔をして、魔理沙を見る。
「魔理沙。あんたいきなり何やっちゃってるわけ？」
「盗んでなんていないぜ。ちょっと十冊程借りただけだよ」
「パチェは、盗まれたって言ってたわよ」
レミリアは、いつの間にか霊夢の隣に座っている。従者である咲夜も、レミリアに合わせてその隣に座る。
「魔理沙。本人がそう言ってるんだし、認めなさい」
「……来年になったら返すぜ」
魔理沙は、嫌々そう答えた。

地下室、フランの部屋。
「ごゆっくりどうぞ」
妖精メイドがおやつを机の上に置く。
「ねぇ、メイドさん」
「はい。何でしょうか？」
フランは、妖精メイドに言いたい事があった。

「昨日も、人間が来たって聞いたんだけど」

侵入者が紅魔館に侵入し、館内の者を全員倒したという話を聞いてからというもの、人間に対して多大な関心を持つようになっていた。

「はい、昨日は霧雨魔理沙という人が来られました」
「へぇ、そうなんだ。……ありがとう。下がっていいよ」

フランがそう言うと、メイド妖精は一礼し、部屋を立ち去る。
それを確認するとフランは、部屋の端にあるタンスの位置を横にずらした。
するとそこから、穴が見えるなる。穴からは、三日前にこの部屋に現れた少年、丹波蓮次が出てくる。

「本当によかったのか？　こんな所に穴を開けて」
「大丈夫。私の部屋だし」
「いやだけどな。フランの食事まで分けてもらった上に、匿ってもらえるなんて……」
「問題なし。食事の量を増やしてもらったし」

蓮次はこの三日間、カーペットで夜を過ごし、御飯の時間になればフランから分けてもらい、メイド妖精が現れれば、さっきの穴に匿ってもらっていた。
ちなみに穴というのは、フランの『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』により、作られた穴であり、最初その力を見せられた時に、蓮次は震えが止まらなかったというよりも、硬直して動かなかった。

破壊した時の音により、メイド妖精数名が駆けつけてきたが、フ

ランはどうにか誤魔化した。
そして現在、フランのおやつであるケーキを半分、御呼ばれしている。

「悪いな、いつも」
「いいよ、その代わりあれお願いね」
「了解。……あれ、このケーキ鉄の味がほんのり……」
ケーキの話題について、これ以上は触れないでおこうと蓮次は思った。

「じゃあ、苺味で」

フランにそう言われた蓮次は、手の平を顔に向けて、握るようにして力を入れ、頭の中に苺を思い浮かべる。
そして、握りしめていた手を広げる。

「いただきます」

蓮次が突如として手に入れた力、『飴の形を具現化させる程度の能力』により苺味の飴が出現する。
フランの『あれ』というのは、この飴の事である。

「おいしい。そのビスケットも食べていいよ」
「あ、ああじゃあ頂こうかな…」

そう言われた蓮次は、ケーキの皿の隣に置いてあるビスケットを口に運ぶ。

「やっぱり鉄の味が…」

ふとフランの方を見る。少女は、飴を口の中で転がして、幸せそうな表情をしている。その姿にほっとした蓮次は、頭の中で鉄分豊富なビスケットと思いながら味わうように食べた。

「人間か……」

フランはふと、メイド妖精から聞いた人間について思い浮かべた。それと同時に蓮次の方を見て色々な事を考えている。

今までのフランであれば、人間は食材として以外、どんな生き物であるかなどまったく気がつかなかっただろう。

しかし、侵入者といいこの少年といい、世の中には多くの人々がいると言うことが、フランは理解し始めた。

それはフランにとって、大きな一歩だったのかもしれない。

「もう、日が暮れそうね。また夜が来るわ……」

霊夢は夏の夕暮れ時の空を見ながら、そう言葉を漏らす。

「あら、それは私が帰るのが寂しいから、言っているのかしら？」

そう話しかけてくるのはレミリア。霊夢はレミリアの言葉に溜め息をつく。

「違うわよ。どんだけ幸せな性格をしてるの？　あんたわ……」

「そうだぜ。霊夢は私が帰るのが寂しいだけだから」

「それは無いわ魔理沙」
「否定するのが速いな」

魔理沙の言葉を一括して否定する霊夢。
実際、霊夢が日が暮れるのを嫌っている理由は、他にある。

「日が暮れると真っ暗になるのが、私は少し苦手なだけよ」
「なるほど。吸血鬼の私とは、まったく逆の発送ね」
「お嬢様は、夜型の人間ですから」

それもその筈、レミリア・スカーレットは吸血鬼の為、昼間は寝ている事が多い。昼間外に出る時、咲夜に傘をもってもらっているのは、日が自分に当たらないようにする為である。
吸血鬼が日に弱いのは、有名な話であり、物語でも日に当たると砂になるという描写があったりもする。
最近では、巷で話題の日焼け止めクリームを咲夜に買ってもらい、塗っている。念には念を入れての事だろう。

「それじゃあ、行きましょうか。咲夜」
「はい、お嬢様」
「じゃあね霊夢。また会いましょう」

レミリアはそう言うと咲夜に傘を差してもらいながら、本殿から離れる。

「よく来るな、あいつも…」

魔理沙は、帰っていくレミリアと咲夜の背中を見て呟く。
「ええ、あなたもね」
魔理沙の言葉に霊夢がそう返す。

「それは、今に始まった事じゃないだろ？　悪友様はずっと前から常連だぜ」
「自分で悪友言うな」

二人はそう会話をすると、顔を見合わせて笑う。付き合いの長い二人だからこそ、笑える会話なのだろう。
しばらく、縁側でお茶を飲んだ後、魔理沙も箒を飛ばして家に帰った。

皆が帰った後、縁側に置かれた三人が飲んだ茶碗の片付けを始める。
「レミリアか……」
片付けをしながら、吸血鬼の名を口に出す。
「なんか怪しいのよね。何かを隠してる気がするし」
彼女の勘はよく当たる。今回もレミリアを見て、何かを感じた霊夢だが「まぁ、気のせいでしょ」と言うと茶碗を台所に持っていき、洗い始める。

「フランドールお嬢様。ディナーをお持ちしました」
「そこに置いておいて」
「かしこまりました」

メイド妖精は、夕飯をフランが座る机に置いて、部屋を出ていっ

た。
それを確認したフランは、タンスをずらし、蓮次を穴から出す。
「夕御飯だよ蓮次」
「了解。なんかいつも悪いな…」
「だから気にしちゃ駄目。さ、食べよう」
蓮次は夕飯の置かれた机に、手を引っ張られる。
机の上には、小さい皿の上に、ホウレン草をドレッシングのような物で和えた物を盛りつけて、トマトを添えたもの。一番大きな皿には、ハンバーグが真ん中に置かれており、左側にはポテトと焼いた人参が添えられている。
そして、紅茶の容器とそれを淹れるカップが一つ用意されている。
「はい、蓮次」
フランは机の引出しから別のカップを出し、蓮次に渡す。
そして、ハンバーグを半分に切り、使用していない皿にハンバーグとホウレン草、トマトを半分ずつ置く。
「それじゃあ、食べようか」
フランはフォークを右手に、ナイフを左手に持ちハンバーグを食べようとする。
するとフランは、蓮次のある行動に不思議に思った。
「いただきます」
「ねぇ、蓮次。昨日から思ったんだけどさ。食べる前に、両手を合わせるのって何か意味があるの？」
「え……？」
蓮次は突然フランに言われて疑問に感じた。蓮次を含め多くの日本人は、食べる前に手を合わせるというのが、マナーでもあり文化でもある。
手を合わせるという事に対する質問が来たのは、蓮次にとって今日が初めての事だった。

「うーん。俺のお祖父ちゃんが言うには、手を合わせるのは、生き物に対する感謝の気持ちを意味しているらしい」
「生き物に対する感謝の気持ち？」
「俺も、詳しくは知らないけど、人は命を貰って生きている。小さい頃にそう言われてきたから」
「蓮次のお祖父ちゃんに？」
「うん…」
「へぇ、それじゃあフランも」

そう言うとフランは、手を合わせると「いただきます」と言ってハンバーグを食べ始める。

食事が済むとメイド妖精が、食器の回収に来る。
「お嬢様。お風呂の支度が出来ました」
それと同時に、フランはメイド妖精に風呂に入るように言われる。
風呂に入るとき、体を洗うのはメイドの役目であり、フランの食事を運ぶ係りに、風呂のお世話をする係りに分けられる。
ちなみに風呂場は地下室にあり、フラン専用として作られている。

フランは部屋を出る直前に、一度だけタンスの方を見る。
「お嬢様？」
「あ、今行く」
メイドとフランは、部屋を出る。

一方の蓮次は、タンスの奥の穴で胡座をかいている。

「……はぁ、暇だな」

蓮次は穴でフランを待っている間に、言葉が漏れる。その時、蓮次は地下室で生活を続けている、フランの言葉を思い出した。

それは、昨日の会話の時である。

「なぁ、フランはさ。いつ頃からここで生活しているんだ?」

蓮次は、フランにそれを聞いてみた。

「え、どうしてそんな事を?」

「いや、何となく聞いてみたいなと思ってさ…」

フランは蓮次の言葉に、少し動揺したが、間を置いてから口を開く。

「私はさ……、生まれた時からずっとここに住んでいるの」

フランの言葉に、蓮次は唖然とする。一瞬、この娘は監禁されているのではと考えた蓮次。

それを感じ取ったのか、フランは更に言葉を加える。

「…別に、監禁されてる訳じゃない。私は力を持ち過ぎているから、半分は自分から進んで中に入ったの…」

「そ、そうなのか…」

「うん。全然悲しくないし、苦しくない。慣れてるからね」

そう言っているフランであったが、蓮次から見たフランの表情は、少し悲しく見えた。

蓮次は何となく、話題を変えた方がいいような気がした。

「そう言えばさ。姉が居るとか言ってなかったか？　吸血鬼なんだよな……」
「うん。お姉様はレミリア・スカーレット。この館のトップに立ってる」
「へぇ…」
「でも、お姉様より私の方が強いんだって……。それも私が地下室にいる理由なんだけど」

「姉妹か……」
蓮次は自分が今、暇だと思っている事に恥じた。フランは自分より遥かに昔から、この場所で生活している。
しかも、ここ三日間を見た限りレミリアという人物は、一度もこの部屋に訪れてはいない。

蓮次が考えていると、フランが部屋に戻ってくる音が聞こえる。
そしてタンスを動かし、外からフランの顔が蓮次に映った。

「ねぇ、蓮次。折角だしお風呂に行ってこない？　昨日から蓮次、風呂に入れなくて気持ち悪そうだったし…」
「……入っていいのか？」
「うん。あと三十分ぐらいは、お湯も残っているみたいだし、服は近くの場所で洗えるよ」

蓮次は、借りずにはいられなかった。四日前から風呂に入っていなかった蓮次は、服や体から漂う臭いに困っていた。
フランは、気にしてなかったが、蓮次にとっては相手にも迷惑が

かかると考えて、フランと少し距離を置いていた。

「じゃあ、入らせてもらおうかな？」

「どうぞ。ただし、二十五分経ったら戻ってくる事。メイドが風呂を捨てる為に降りてくるから」

「わかった。ところでフラン、この館はメイドは妖精しかいないのか？」

「うん、私は妖精以外でメイドは見たこと無いし…」

「そうか。じゃあ行ってくる」

メイド長には、人間である十六夜咲夜という人物がいる。しかし、人間を見たことが無いフランは、勿論咲夜とは出会った事が無かった。

その為、フランは咲夜の事については一切、知らなかった。

「はぁ……、風呂に入るなんて、久しぶりだな」

蓮次は服を脱いで、裸になると風呂の扉を開ける。

「うわ、これで一人用か」

蓮次の目に飛び込んで来たのは、入り口から五？程離れた先にあるシャワーと、長方形型の風呂。それも人が五人は、スペースを気にせずに入れるような風呂である。

「おっと、まずは体から洗わなければな…」

蓮次は、フランに感謝をしながら、体をしっかりと洗った。洗えば洗う程、蓮次に溜まっていた垢や汚れが落ちていく事が、彼にも

わかった。

そして体全体を洗い終えた蓮次は、足から少しずつ風呂の中に体を沈めていく。

「あったかい……」

蓮次は、久々の風呂に極楽気分になった。夏風呂でこれ程気持ち良くなったのは、初めてなのだろう。

「普段は、何気なく入っていた風呂だけど……。まさかこれ程までに、有難いものだったなんて」

あまりゆっくりと浸かるわけにはいかなかった為、体を洗うのに五分、風呂に入るのに十分を費やし、洗面所で服とジーンズを洗う。石鹸しか無かったが、蓮次は服とジーンズ、並びにトランクスとシャツを十分近くかけて、丹念に洗った。

風呂場で動かしたものを元に戻し、フランに渡されたバケツに洗った服とジーンズを入れると、フランの部屋に戻ろうとする。

しかし、蓮次には問題があった。

「これで、いいかな……」

近くに置いてあったバスタオルを持つと、自分の体に巻き付けた蓮次。巻き付けたとは言っても、下半身だけであり、上半身は裸同然。

そう、蓮次には替えの服が無かった為、これをする以外方法が無かった。

周りを確認しながら、蓮次はこっそりフランの部屋に戻った。メイド妖精に見つかれば、二つの意味でアウトだったが、どうにか戻る事ができた。

「ただいま…」
「御疲れ……。何その格好」
「いや、ちょっとな。替えの服が」
「あ…」

一分後。メイド妖精二人が、風呂場の栓を抜いて片付けなどを始めるのであるが……。

「あれ？　バスタオルが減ったような気がしませんか？」
二人のうちの一人が、違和感を感じる。
「気のせいでしょ。妹様以外は、ここには住んでないし」
「それもそうね」

結局、バスタオルの件について、バレる事は無く、またひとつの危機が去ったのであった。

ちなみに蓮次の服は、フランの部屋で干すのは不味いので、タンスの奥の部屋、別名『蓮次の穴』にハンガーを使い、引っ掛けられそうな場所を探して干した。

「今日は、この格好で寝るのか…」
「ごめん。私が風呂を勧めたばかりに…」

「いや、フランのお陰で久々に気分が良くなった。何から何まで…
…本当にありがとう」
それは、蓮次の本心だった。本来なら、不審者扱いで、通報され
てもおかしくない。そんな彼をフランは快く受け入れてくれた。

「それじゃあ、おやすみ蓮次」
「おやすみ、フラン」
フランは自分のベッドに戻り、蓮次はカーペットに座る。
蓮次は、ベッドに戻るフランを見て、「なんて良い娘なんだろう」
とまるで、年寄りのような思考が頭の中を過った。

横になった蓮次は、地下から上に小さく映る小さな窓を見ながら、
静かに眠った。

第０６話「脱走と遭遇」（前書き）

まず、東方飴人録を呼んでいただいている皆様に、謝罪を申し上げます。

紅霧異変について、夏場だというのに、冬の季節で物語を進めてしまいました。

本当に申し訳ございませんでした！！

多分、こんなふざけたミスをするのは、俺ぐらいだと思います……。

季節を冬から夏に修正しました。これからも是非、よろしくお願いします。

第０６話「脱走と遭遇」

「朝か……」

カーペットの上で、背伸びをする蓮次。

蓮次が館の地下室のフランの部屋で、ひっそりと生活してから、早一週間が経とうとしていた。

ふと、窓を見上げる。

「なんだ？　今日も雨が降っているのか」

蓮次は、小さな窓から映る景色を見てそう言う。ここ最近、外では雨ばかり降っており、フランも何やら機嫌が悪そうだった。

昨日『蓮次の穴』に隠れている時、こんなやり取りを蓮次は聞いていた。

「パチュリー！　私、外に出たい」

いつものメイド妖精とは違い、この日は別の人物がこの部屋に訪れていた。蓮次は、ギリギリ映りそうな隙間を探して、そのやり取りを確認しようとする。

「駄目よフラン。外は雨が降っているし第一、親友のレミリアから面倒を見るように言われてるのだから……。それにあなたが本気で暴れたら、誰も館で止める者が居なくなる。それはあなたが一番

よく知っている筈よ」
「でも、私も外に行ってみたいし走り回りたい。それに……、人間とも遊びたい」
「フラン……、あなた」

フランと会話をしているのは、パチュリー・ノーレッジ。図書館の管理人。以前、魔理沙と戦闘を繰り広げ、敗北してからは魔理沙に三日連続、本を盗まれるという被害にあっている。
ちなみに蓮次から見ると、紫の服の一部分しか映っていない。

「とにかく、駄目よ。特に人間に会わせるなんて。フラン、あなた人間を見たことが無いのに、どうやって会うつもりなのよ」
「それは……」

フランは一瞬タンスの方を見るが、すぐにパチュリーに視点を戻す。もし、蓮次が部屋にいる事が知れれば、フランに付いた虫扱いにされてしまうと考えたからである。
そうなってしまった場合、食材の一部にされてしまうだろうと思ったフランは、これ以上の言葉は避ける事にした。

「……わかった。一先ず諦める」
「判ったらいいのよ」

パチュリーはこの時、聞き分けのよかったフランに疑問を覚えるが、諦めてくれたのなら、それで良しと考える。

「それじゃ……。良い娘でやってるのよ、フラン」
「わかった…」

「蓮次。どうしたの？　ぼっーとして」
「うん？」
フランの言葉に蓮次は我に帰った。
「なんど声を掛けても、返事しなかったから」
「あ、ごめん……」

話しかけても、返事をしなかった蓮次に心配したフランは、何度も声を掛けていた。

「何か、考え事？」
「いや、ちょっと色々とな。なぁフラン。昨日、パチさんとか言う人とさ…」
「パチュリーの事？　気にしなくて良いよ。あの時は私がどうかしてた……、外に出たいだなんて」

フランは笑顔でそう答えたが、蓮次の頭の中に映るのは、何処か寂しそうな表情をした姿である。
彼女はやはり、外に出てはしゃぎたいのだろうと、蓮次はこの時思った。

「ささ、もうすぐメイドが来るから、いつもの場所に隠れて」
「……わかった」

蓮次は、いつものタンスの裏に身を潜める。

フランは、そんな蓮次を目で追っていた。彼女が最も興味を持っているのは、人の言動である。

彼のような人間もいれば、別の性格をした者だっているに違いない。フランの人に対する好奇心は、この時既に、抑えきれなくなっていたのである。

昨日のフラン言葉に「一先ず諦める」という項目があった。つまりフランは決して外に出ることを諦めた訳では無い。

メイドが部屋に入ってくる。

「失礼しま……」

「ごめんね、メイドさん。一回休み」

フランはメイド妖精を、一瞬で消し去ると一人外に出ていってしまった。

妖精は、消されても暫くすれば復活する。フランはそれを知っており、一瞬で消すことを選択した。

「ごめんね、蓮次。今の私は誰にも止められない。あなたには迷惑かけられないから……」

フランはそう言うと、部屋を飛び出し、一階に通じる階段を探し始める。

一方、それを隙間から見ていた蓮次は、突然の出来事に唖然としていた。

「嘘だろ。たった一撃でメイドを…」

一回休みの機能を知らない蓮次は、フランが本気で殺したと思い込んだ。

その後、外に出ていくフラン姿に、居ても立ってもいられなくなった蓮次は、後を追うためにタンスにタックルをして倒そうとする。

「痛っつー！」

しかし、タンスは微動だにしなかった。逆にタックルをした蓮次が、ぶつかった衝撃に痛みを感じた。

「まだまだ！」

蓮次は再びタンスに向けて、タックルを始めた。

階段を上がったフランは、メイド妖精を倒しながら、前に前にと進んでいる。その表情は、何処と無く楽しんでいる感じがする。それは狂気から来る笑顔などではない。純粋に、外に出て体を動かす事を楽しんでいる。

「さっきからおかしいわね」

「ああ、パチュリーは突然攻撃してくるし」

フランは、その声を聞いて近くの壁に隠れた。壁から声のする方を覗くと、そこには巫女服と魔女服の少女が立っていた。

「いつにも増して、暑いわね」
「門番によると、今はレミリア神社にいる筈だぜ。なんで館の攻撃が激しいんだ？」
「私はただ、この辺りが最近、雨が降りっぱなしだから、様子を見にきただけなのに……」
フランは、二人の姿を見て心踊った。二人の侵入者、魔理沙という泥棒魔女。
姿を見て、フランは興味が湧いてくる。もしかすると、とフランは考えた。
「なんかお呼びかしら」
フランは、壁に隠れながら、二人に聞こえるように声を掛ける。
「呼んでないぜ」
魔理沙が直ぐに言葉を返す。一方の霊夢はフランの方を見てくる。
「おまたせ」
「誰？　前来た時は居なかったような気がするけど……」
「あんた誰？」
フランは、二人の注目の的になっている事に、少し嬉しく思えた。
「人に名前を聞くときは……」
フランは、よく判らないが『道理』というものを使ってみる事にした。

「ああ、私？　そうだな、博麗霊夢、巫女だぜ」
魔理沙はお得意、嘘八百をかました。
「あんた！　よくも本人の前で、そんな嘘がつけるわね」
「はは、看護婦の方がよかったか。じゃあ改めて、私が魔理沙、こっちが霊夢だ」

名前と姿が噂と一致した事で、フランは二人に対する好奇心が更に上昇する。

「で、あなた達は、人間で間違いない？」
「ああ、人間だよ」
「人間だぜ」

ついに、見つけた。フランの心に一つの闘争心が芽生える。館の者をたった二人で落とした人間。是非、戦ってみたいとフランは今まで考えていた。
そして今、その願いが叶うわけである。

「私は、この館の主の妹よ。よろしく」
「主？　ああ、レプリカとかいう悪魔のことね」
「ルーミアじゃなかったっけ？」
ボケにボケをかます二人。
「レミリア！　レミリアお姉様よ」
仕方無くフランは二人に突っ込みをいれた。

「妹君に言いたいけど、お姉様はいつも家の神社に入り浸って迷惑なのよ」
「そーなのかー」
「ぶっ飛ばすわよ魔理沙」
「ごめんだぜ……」

霊夢に怒られて、すぐに謝る魔理沙。いくら親友だとしても、霊夢が本気で起こればひとたまりも無い。

「知ってるわよ。私も行こうとしたら……」
「するな！」
「止められた。お外は豪雨で歩けない」
「何もないぜ、あんな場所」

魔理沙の頭に陰陽玉が落ちる。

「痛いな、もう」
「少し黙ってなさい」

親友の言動に少々ばかり苛立ちを覚える霊夢。一方のフランはそんな二人を見て、こう思った。
何がそんなに面白いのだろうか？
フランは、苛立っている霊夢もからかう魔理沙も、何処と無く笑顔に感じた。フランにもよく判らかったが、二人は楽しんでいるようにも見えた。

「雨が降り続いているのってさ？　もしかして、あなたを外に出さない為かしら」
「多分、パチュリーの仕業だぜ」
「要注意人物なんだね。過去に何かやらかしたの？」

二人の言葉に、フランは戸惑う。心の中に一つの気持ち、孤独に近いものを感じた。
今まで殆ど外に出る必要の無かったフランにとって、もしかすると初めての感情だったのかもしれない。

「何も出来る筈が無いわ。私は四百九十四年間、一度もお外に出てないのよ」

そうだ、戦ってこの気持ちを忘れてしまおう。思いっきり飛び回って……。そう考えたフランは、ポケットからカードを取り出す。

「そこに飛びこむ遊び道具……」
「何して遊ぶ？」
「弾幕ごっこ」
「なら、どちらの相手がいいんだ？」
「両方」
「贅沢な奴だな…」

魔理沙は、そう言いつつもカードを取り出す。どうやらかなり乗り気のようである。

「じゃあ、二対二だな。丁度良い数じゃないか？」

三人とは別の声が聞こえてくる。フランはその声が『知り合い』である事に直ぐに気付いた。

「なんだ？　まだ誰かいたのか」
「どうやら、そうみたいね。妹君の知り合い？」

二人は、そう言ってフランを見てくる。彼女も驚いた。まさか、追ってくるとは思いもよらなかったからである。

そして声の主は、フランの隣にまで歩む寄る。一週間前、彼女の部屋に突如として現れた少年。

「蓮次…」
フランは、大声を出して隣に立つ少年を見る。だが、少年は何故か額から血が出ていた。
「どうしたのそれ？　もしかして、メイド達と一戦交えたの？」
「いや……、まぁそうなんだけど」

実は、タックルをかましている途中に出来た傷でありしかも、散々体当たりをした後、少し力を入れるだけで倒れたとは、恥ずかしくて蓮次は言葉に出せなかった。
そうとも知らず、傷を負いながらも追ってきた蓮次に少し感動するフラン。

「もしかして、あいつ人間か？」
「そのようね。人間は咲夜だけだと思ってたけど」

二人は蓮次の方を見る。するとフランは蓮次の肩に手を軽く置く。

「紹介するわ。私の友達の丹波蓮次」
「え？」
フランは、蓮次の方を向いて笑顔でそう言ってきた。蓮次は友達という響きに、悪い気はしなかったので直ぐ様、二人に話す。

「フランドールの友達。丹波蓮次だ、よろしく」

彼は、二人にそう挨拶した。

その光景を、見ている者がいた。紫の髪色、パチュリーである。

先ほど、二人と対決をして負けたパチュリーは、廊下に伏せていたが、気が付いた時にはすでに二人とフランが遭遇していた。

その中で、何故かフランと親しそうにする少年の姿があった。

「誰なのよ……、あいつは」

見慣れない顔にパチュリーは、そう呟いた。

第07話「ペアゲーム?」（前書き）

第7話です
ゆっくりしていってください

第07話「ペアゲーム?」

紅魔館の廊下は、全体が紅くなっている。ひいている絨毯(じゅうたん)の色も同じく紅色。

その廊下にて、一組の少女と一組の男女が向き合っている。

一組は博麗の巫女の博麗霊夢と魔法使いの霧雨魔理沙。館の雨が、いつまで経っても止まない事が気になり、様子を見に来た。

もう一組はレミリアの妹であり、館の地下室から脱け出してきた吸血鬼の少女、フランドール・スカーレットと、地下室に入り込み結果的に友達的な立ち位置になった少年、丹波蓮次である。

「どうやら、面白くりそうだぜ」

箒を右手で縦に持ち、何やら楽しげに笑う魔理沙。既に戦う準備は万端であると言わんばかりに、持っていた箒を振り回す。「まぁ、彼女が雨に関係しているなら、倒さないわけにはいかないわね。姉の方は、どうやら不在みたいだけど……」

霊夢も御札を巫女服の懐から取り出して、それを手にすると対峙するであろう二人に見せる。

どうやらこちらの二人は、いつ戦いを始めてもいい状態であるようだ。

一方の二人はというと……。

「蓮次。どうして来たの?」

「いや、まぁその……、何となく行った方が良いような気がしたか

ら。駄目か？」
「うーん。駄目って訳じゃないけどさ。館の住人にバレるよ」
心配そうに、そう言うフランに蓮次は言葉を返す。
「大丈夫さ。メイド達は既にフランが倒してたし……」

蓮次はつい先程まで、フランが妖精を消滅させた事に驚愕していた。
しかし、消滅したと思われていた妖精が、少しずつ姿を取り戻していく場面を目撃し、フランがメイドを殺していた訳ではないという事に安心しつつも、体が少しずつ復活していくメイド妖精達に怪談さながらの恐怖を感じながらフランの場所まで走ってきた。
今の蓮次は、走る以外の事で心臓をバクバクさせながら、この場にいる。

「あとさ……蓮次」
「なんだ？」
「パチュリーがあなたを見ている」
「へっ？」

フランがそう言って指差した先には、紫の髪色の少女が立っており、蓮次をじっと睨むように見てくる。

「そのパチュリーさんが、どうかしたのか？」「蓮次の正体を見られてる。つまり、蓮次を地下室で匿えなくなる」
「あ…」

ようやく、事の重大さを理解した蓮次であったが、時既に遅く、パチュリーは「誰よあなたは」とも言いたげな顔をしている。蓮次は、彼女の目を逸らした。

「どうした？　弾幕ごっこはしないのか？」
魔理沙が、なかなか戦おうとしない二人にそう問いかける。
「蓮次、今はこっちに集中して。スペルカードは持ってたでしょ？」
「…ああ、一応持ってはいるが…」

蓮次は、フランに出会った時にスペルカードの使い方を知った。
蓮次の場合、ポケットに入っていた御札のような紙に、技名を書いてそれを弾幕ごっこで使用する。フランにそう聞いて、試しに技を作ろうとしたが、地下室で暴れれば館の者に怪しまれる為、今まで弾幕の件については、保留にしていた。
その為、今まで弾幕ごっこの練習どころか、スペルカードすら使った事がない。彼は、フランドールを追う以外、何も考えていなかったのである。

「仕方無い。蓮次は未経験だし、スペカはあっても技名すらないから……。途中で何かピンと来た技があったら、カードに書き込む事にして」
「え、突然そんな事を言われてもな」
「それしかないよ。スペカは……ちゃんと持ってきてるね」
フランは、蓮次のポケットに白紙の御札があるのを確認する。スペカを持ってきたのは、彼なりの心掛けだろう。
何はともあれ、二対二の弾幕ごっこが始まろうとしていた。

「それじゃあ、いくよ蓮次。私はあの巫女選択で」
「あ、そんじゃあ俺は魔法使いの方か……」
フランは巫女を蓮次は魔法使いと戦う事になった。
「なんか、勝手に決められちゃったぞ…」
「別に良いんじゃ無い？　どちらにしても、弾幕ごっこに変わりは無いんだし」
霊夢はそう言ってフランの正面に立つ。

「そうだな。そんじゃあ、私はあの男の相手をさせてもらうよ」
魔理沙はそう言うと蓮次の正面に立ち、箒に股がった。

「蓮次。頑張ってね」
「ああ、やるだけの事はやってみるよ……」
フランと蓮次の二人は、それぞれスペルカードを手に持つ。次の瞬間、蓮次を除く三人が飛ぶ。

「……みんな飛べるのか？」

蓮次が三人の行動に戸惑っていると、箒に股がって飛んでいる魔理沙が、声を掛ける。
「どうした？　かかってこないのか？」
「あ、いや……。なんでみんな飛べるんだ？」
蓮次がそう言うと、魔理沙は少し考え事をしてから「魔法かなんかじゃない？」と少々ばかり適当な答え方をしてきた。

「マジで？」
「ああ、マジで。とにかくさっさと始めようぜ」

蓮次は魔理沙にそう言われて、フランに言われた通り戦いながら技と名前を考えようと思っていた。
しかし、勝負が動いたのは、開始した直後の事だった。

魔理沙は、手元に八角形で中心に穴の空いた道具を出してくる。
蓮次がそれに疑問に思ったのと同時に、魔理沙のそれに光のようなものが集まっていく。

「私のとっておきを見せてあげるぜ。恋符『マスタースパーク』」
直後、魔理沙は蓮次に向けてレーザーのようなものを放つ。

マスタースパーク。彼女の十八番のスペルカードであり、現時点の彼女のスペルカードの中で最大の威力を誇る。
「やばっ！」
蓮次は、魔理沙が放ってきたマスタースパークを見て、一瞬避けようと試みるが、避ける動作を止めた。
そして一言こう話した。
「避けられねぇな。これ」
そう言葉に残して、蓮次はマスタースパークの光に包まれていった。

「あれ？　終わりか？」　一瞬で勝負が着いてしまい、少々物足りなさを感じた魔理沙だったが、目の前に倒れている蓮次を見ると、勝利した事を実感する。

「なんか……、呆気なかったな」

魔理沙は帽子を取ると、頭をかいた。

「蓮次！」
魔理沙の攻撃に倒れた蓮次の姿を見て、そう声を出すフラン。
「余所見は禁物よ！　妹君」
フランが視線を霊夢に戻すと、弾幕をばら蒔く霊夢の姿が映る。
「やばっ…」
余所見をしていたフランは、その攻撃を空中で避けつつ当たりそうな弾幕を、相殺していく。

「へぇ、なかなかセンスがあるわね」
「こう見えても、お姉様より強くてよ？」

「それは、また厄介な事になった」
霊夢はそう言いつつも表情には余裕があった。霊夢は自信家ではあるが、慢心したりはしない。この余裕は、常に冷静を保つ手段の一つなのだろう。

「それじゃあ、いくよ」
フランは、先端がトランプのスペードのような形をした棒を、何処からともなく出した。その棒は、やがて炎に包まれる。

「禁忌『レーヴァテイン』」
次の瞬間、その棒から炎のレーザーが霊夢に向けて放たれる。
「くっ、暑いわね。勘弁してよ、こんな時期に……」
霊夢はその攻撃をかわしながら、フランに向けて少しずつ弾幕をあてていった。

「うん……？」
魔理沙の攻撃で、気絶していた蓮次が目を覚ます。
「よう。目が覚めたか？」
その声に振り向くと、そこにはつい先程、マスタースパークで蓮次を気絶させた魔理沙がいる。
「痛った。……そうだフランは？」
「あそこにいるぜ」
魔理沙が指差す先には、霊夢とフランが弾幕を撃ちあっている。
どうやら、両者に少し疲れが出ているようだ。

「まさか、ここまで苦戦するなんて……、流石はお姉様を倒しただけの事はあるね」

廊下には、所々焦げ付いた部分があり、壁には弾幕により崩れた場所もある。更には、天井にまでもその跡が残っており、蓮次が気絶している間に余程、激しい戦闘を繰り広げていた事がわかる。

「なら、私も更に本気で行くよ。禁弾『過去を刻む時計』」

フランが詠唱すると、霊夢の左右に大きな球体が出現する。次の瞬間、左右の球体から四方にレーザーが反時計回りに回転し、霊夢とその周辺に放たれる。

「くっ、どれだけ技を持ってるのよ…」

霊夢は、少し焦りつつレーザーをかわしていくが、フランの攻撃は止まらず、ついに被弾して墜落する。

「霊夢！」

墜落した霊夢に、魔理沙は急いで駆けつける。魔理沙も、ここまで霊夢が苦戦するとは思ってもいなかっただろう。

だが、駆けつけた魔理沙に霊夢は「大丈夫よ。私はまだまだやれるわ」と言って再びフランの方に向かって飛んでいく。

「どう？　降参する？」

「馬鹿言わないで。私はまだピンピンしてるわよ」

「うふふ。そうでなくちゃ」

フランは嬉しそうに笑い、霊夢に向けて再び同じ技を繰り出す。

すると、霊夢はそれを見事にかわしていき、フランに向けて弾幕を放った。

「痛った！　やったわね。……こうなったら私のとっておきを、見せてあげるんだから」

そう言うとフランは、スペルを発動する。すると次の瞬間、蓮次を含めた三人の目を疑う現象が起きる。

「消えた……？」

霊夢は一度、目を擦ってもう一度目の前を見る。やはりフランの姿が見当たらない。

「蓮次とか言ったな？　フランは何処に言ったんだ？」

「いや、知らない。俺だってフランの技なんか見たことない」

魔理沙に聞かれて、そう答える蓮次。フランに出会って一週間程しか経っていない為、知らないのは当然だろう。

「そして誰もいなくなるか？」

どこからともなく、その声が三人に聞こえる。次の瞬間だった。霊夢の周りが、数えきれない程の弾幕で埋め尽くされた。それは不規則に散り、廊下をランダムに攻撃する。

「くっ、遠隔操作か何かかしら？」

「やべっ、私の所にも攻撃がくる」

弾幕は、霊夢に限らず周りにいる者まで攻撃してくる。魔理沙は急いで箒に乗り弾幕をかわす。

フランの暴走とも言えるような攻撃だが、彼女は少々、霊夢の強さに対してムキになっているのかもしれない。

「危ないな……もぅ。もうちょっと抑えてくれたらいいのに」

魔理沙が文句を垂れながら下を見る。

「あれ？　なにやってるんだあいつ」

そこには俯せになって倒れている蓮次の姿があった。体をピクピクとさせながら、震えている姿を見た限り、フランの弾幕に巻き込まれたのだろう。

「どう？　私の技は」

「そこね」

霊夢は、声のする方に向けて御札を投げた。するとそこからフランの姿が見える。

「しまった…」

「しめた！　『夢想封印』」

霊夢は十八番の夢想封印でフランを攻撃する。打撃を受けたフランはそのまま落下した。

「ごはっ！」

「あ、ごめん蓮次……」

着地したとき、たまたまその下に俯せになっていた蓮次がいたため、フランは誤って踏んでしまう。普通なら死ぬかもしれない衝撃だが、どうにかキープして踏んだのだか、定かでは無いが蓮次に息はあるようだ。

「だ、大丈夫？　すごく痛そうだけど」
「な、なに。心配す、するな……。この通り元気だ……」
俯せになりながら、足を動かす蓮次。どうやら内出血程度で済んだようだ。
「頑張って。俺、何も出来なかったけど」
「うん。行ってくるね」
フランは、足に力をいれると霊夢が浮いている場所まで飛ぶ。
「霊夢。私の最後の攻撃、見せてあげる」
「ええ、望むところよ」
両者はそう言って、詠唱を始める。詠唱はほぼ同時に完了し、おそらく最後であろうスペルを発動する。
「ＱＥＤ『４９５年の波紋』」
「霊符『夢想封印』」
スペルカードを発動した直後、弾幕の衝突により、カッと音がなり大きな爆発を起こした。
その爆発は、まるで石を水の中に投げた時に広がっていく波のようである。

爆発により、煙が立ち込めている。廊下は全体的に崩れた部分が多く、損害も激しい。
「おーい！　大丈夫か？」
魔理沙は立ち上がり、辺りを見渡しながら大声で話す。
「私は、大丈夫よ」
魔理沙の近くにいた霊夢が、立ち上がり巫女服についた汚れをはらう。
「フランはどうした？」
「向こうで倒れてる」
霊夢が指差した先には、仰向けに倒れるフランの姿がある。
「霊夢の勝ちで良いんだよな？」
「多分。そうなんじゃない？」
「フランに、手を貸した方が良いんじゃないか？」
「その必要は無いわ。どうやらサポーターが付いてるみたいだし」
「……だな。それじゃあ、館の中で涼ませてもらっておくか」
二人は、そう話をすると廊下の奥の方に歩いていく。

仰向けになったフランは、一人天井を見上げている。今まで気が済むまで暴れまわったのは、彼女も初めての事だった。
「はぁ、疲れちゃった」
「御疲れさん」
蓮次は、フランに労いの言葉を掛けると、右手から飴を出して、フランの手に置く。

「ありがとう。それにしても、全然駄目じゃない蓮次。戦いにすらなってなかったし…」
「いや、戦いかたとか知らなかったし…」
「言い訳は男らしくないよ」
「む……」

痛いところを突かれた、と言わんばかりの顔を蓮次はする。

「冗談よ。そんな嫌そうな顔しない。でも、ちょっと期待はずれだったかな？」
「……努力はしてみるよ」
苦い顔をしながら、蓮次はフランに聞こえる程の声で答えた。

「それで？　あなたは誰なの？」
「えっと……」
その会話の直後、パチュリーによる尋問が行われた。

第０８話「紅魔館の挑戦」（前書き）

パチュリーからの尋問は割愛させていただきます……
第八話、ごゆっくりどうぞ

第０８話「紅魔館の挑戦」

紅魔館の一室。その場所では現在、館の主とその親友が集まっている。

扉の先には長テーブルがあり、その一番奥の椅子『主の席』にレミリアが、その少し手前の右の席にパチュリーが座っている。

ちなみに、先程までは霊夢と魔理沙が別の椅子に座っていたが、時間の都合上、自分の家に帰った。

「咲夜。あなたには、私に妹が居たのは知っていて？」

「いいえ、私は知りませんでした」

レミリアの言葉に隣に立っているメイド長、咲夜は首を左右に振る。

「そうね。あなたには話してなかったからね」

その会話にパチュリーは静かに頷いている。

咲夜が知らないのも無理はない。レミリアは、妹であるフランに今まで一度たりとも人に会わせた事は無かった。

勿論、十数年に渡り仕えさせてきた咲夜であっても、会わせた事が無ければ、話した事すら無い。

「それじゃあパチュリー。フランには人間の友達が居たのは、知っ

てた？」
今度は近くに座っているパチュリーの方に顔を向ける。
「いいえ、まったくしらなかった」
「そう。私も知らなかった」
そう言って会話を終えると三人は、座っている席の対の椅子に腰かけている少年の方を見る。
「蓮次とか言ったかしら」
「ああ、そうだ……十六歳だ」
「歳はどうでもいいわ。あなたの事は、パチュリーから聞いている。フランの友達だそうね？」
「誰からそんな事を」
「フランとパチュリーから」
違うと言えば、あの時フランに言い返した友達だ発言が嘘になる。
「まぁ、尋問通りだ」
「そう。わかった」
レミリアがパチュリーから聞いた事は以下のとおりである。
蓮次という少年は、幻想郷の外から来たという事。
湖で溺れて、館の地下水道に辿り着き中に入ってきた事。
地下室に住んでいるフランが、見たことの無かった人間の姿を見て、興味を持ち匿っていた事。
これらをパチュリーから聞いたレミリアは、一つ蓮次に質問したい事があった。

「あなた、フランに手を出してないでしょうね？」

フランを傷物にはしていないか。それが一番気掛かりな部分であった。　もし、手を出したのならば、即からだの全てを食材に変えてしまいたいところだった。

「手を出す？　えっと……、手を握った事か？」

気が抜けるような答えが返ってくる。

「何にも無いわ……」

レミリアは、蓮次の反応を見たところ、特に間違いは起きなかったと見て安堵する。

蓮次に関しては、レミリアの言葉に疑問を浮かべているようだ。

「あ、でも……」

「はい？」

「御飯を半分貰う代わりに、飴を幾つか渡してた」

「飴？」

「ええ、彼の能力よ」

パチュリーがレミリアの疑問に答える。

「なるほどね…」

能力についても、パチュリーは蓮次から聞き出していた。

少年に飴を精製する能力があるだという事を、聞いたレミリアは、館で起きた出来事を思い出す。

ほんの数時間前のフラン脱走騒動の事。レミリアが館に帰ってきた時は、惨状を見て恐れていた事が起きたと感じ取った。

近くで倒れていたメイド妖精に話を聞くと、案の定フランドール

が外に出てきたと聞いた。
　他にも神社に行っても姿を現さなかった霊夢と魔理沙も、館に来ている事も知り、「あの二人ならどうにかなる」と考えた。
　ところが、別の妖精に話を聞くと、知らない無い男が地下室から現れた事を耳にする。
　疑問に思ったレミリアだったが、その男について後からパチュリーに聞くと、フランと共に地下室に住んでいた、という情報が飛び込んできた。
　少なくとも、フランの相手をしている人物であり、微かな期待感がレミリアにはあった。

　しかしフランに加担した時に、魔理沙と弾幕ごっこをして一瞬で敗北したという話しも聞いた。

「早速だけど、あなたの強さについて、色々と調べておきたいのだけど、経歴とかある？」

　レミリアは、一度蓮次について調べておく必要があると考えた。

「経歴？　まぁあれだ。丹波家の長男で高校一年で趣味は…」
「自己紹介と勘違いしてない？　まぁいいわ。一度あなたをテストしてみたいのだけど」
「テスト？」
「そう。あなたはフランの友達なんでしょ」
「……まぁ、そうなのかな」
「だったら、私のテストを受けなさい」

「へっ…？」

蓮次は展開についていけなくる。

いきなり部屋に呼び出されたと思いきや、次は個人情報について聞かれて、更にはテストをするとまで言われたからだ。

テストという響きに蓮次は、あまりいい気がしなかった。

「あれだ……。何のテストだ？」

「決まってるでしょ？　フランの元で働く為の試験。まさか丹波蓮次はここから先ずっと、我が妹の食事を分けてもらうつもりじゃないでしょうね？」

「いや、そんな事は……」

「だったら、テストを受けて館に仕えれるような力を、私に見せてみなさい」

「……」

この時、蓮次は考えていた。どのようなテストの内容になるのか。

「一体、どんなテストなんですか？」

レミリアは、蓮次の言葉を聞いて、椅子から立ち上がり、高い場所に貼られた窓を見上げる。窓の先には、真っ暗な夜空と星が映しだされている。

「弾幕ごっこは御存じ？」

「えっ……、まぁフランを通じて少しぐらいは聞いてる……」

「そう。なら話が早いわね。ついてきて頂戴」

レミリアはそう言うと、扉の方に向かう。蓮次は言われた通り、レミリアの後ろについていく。

館の入り口の庭。いかにも金持ちが住んでいそうな、大きな庭の道を蓮次が歩いている。蓮次の前方には、レミリアと咲夜がいる。
「どう？　ここの庭は」
「凄いな……。こんな場所見たことないぞ」
「紅魔館が誇る庭だから、当然よ」
何処が当然なのか、蓮次には検討もつかなかったが、とにかくレミリアの後ろについていった。
庭は、テーマパーク並みのガーデニングが施されている。庭の彼方此方に妖精達の庭を手入れをしている姿が、蓮次の目には映った。

草で出来たトンネルを抜けて、更に進むとそこには鉄で出来た檻のような門がある。
「でかい門だな。周りの壁もでかいし…」
洋画や本に出てきそうな城の雰囲気漂う紅魔館に蓮次は、何処かの豪邸にお客として呼ばれた気分になった。
「こっちよ」
門の隣の壁に、小さな扉があり、その扉の外からレミリアが手招く。どうやらそこは、職員の出口か非常口のようなものなのだろう。そう考えた蓮次は、その扉から外に出た。

扉の先には、湖と橋が見えており、館の周りを樹木が囲んでいる。この館が島の中にある事に蓮次が気づくのは、もっと後の事になるだろう。

「起きなさい美鈴！」

レミリアの声が聞こえる。蓮次がその声に振り向くと、そこには

壁に凭れかかっている女性がいた。
紅色の髪は腰近くにまで伸びていて、オリーブグリーンの服と帽子。帽子には星の紋章が付いており、龍と書かれた文字がある。
中華風の下のスカートからは、綺麗な白い足が露出されている。
いくら今が夕方とは言え、日焼けの跡が全く無いその足に蓮次は、何度も目がいく。

「また寝てるわね。美鈴」
「うわっ！」
突然聞こえた声に蓮次は驚く。隣にはいつの間にか、メイドの咲夜がいた。
「どうしたの。いきなり大きな声を出して？」
「いや……、突然声が聞こえたから。えーと」
「十六夜咲夜。お嬢様のメイド長をしている者よ」
「これはご丁寧に……」
蓮次は咲夜にペコリと頭を下げる。
「ええ、よろしく」
「……」
笑顔でそう言ってくる咲夜に、蓮次は顔が少し紅くなる。営業スマイルとは言えその笑顔に蓮次は戸惑っている。
「お嬢様。ここは、私にお任せを」
「ええ、お願い咲夜」
すると咲夜は、美鈴と呼ばれる少女の前に立つと、太股あたりから何かを抜き取る。
「え、嘘だろ……」
蓮次はその行動に目を疑った。咲夜の手には刃渡り五センチ程のナイフが握られている。
そして、そのナイフは美鈴に向けて投げられた。

「痛いじゃないですか。咲夜さん」
ナイフが刺さった美鈴は目を覚ます。ナイフは彼女の頭に当たっている。
「痛くないんですか？」
蓮次は美鈴に声を掛ける。
「え、いやまぁ……、少しは痛いですが、ナイフ一つならまだ大丈夫です」
「血が出てますけど……」
蓮次の視線の先には、頭から血を流しながら笑顔で話す美鈴の姿がある。蓮次にとってこの光景は、はっきり言って怖かった。

「あ、ところで……」
「うん？」
「あなたは誰ですか？」
美鈴は蓮次の顔をじっと見てくる。

「彼は、我が館の採用試験を受けに来た者よ」
「採用試験ってなんですか？」
レミリアの言葉に、美鈴は頭をポカンとさせる。そんな美鈴を無視してレミリアは話を続ける。

「それじゃあ、採用試験について、色々と……」
「待ってくれ」
話を始めたレミリアに、蓮次は待ったをかける。
「どうかした？」
「俺はただの侵入者だ。いいのか？　そんな奴を迎え入れてしまって……」
蓮次は話が進む前に、自分の言い分をレミリアに話した。レミリ

アは、一度目蓋を閉じるて開けると蓮次に話をする。

「だからこそよ」

「へ……？」

「侵入者であるあなたを、フランは少し気にかけていた。でもこの館に仕えさせるとなると話が違う。弱い者は求めていない。だからこそテストして実力を測る……」

「……」

蓮次は声を詰まらせる。レミリアの目は先程とは違い、じっと蓮次を睨むような目であった。

その瞳からは、レミリアの本気が蓮次に伝わる。

「それじゃあ、続けさせてもらうわ。試験の内容は簡単よ。我が館の門番である美鈴に対して一撃を当てる事よ」

「え、私ですか？」

美鈴自身も、その言葉に戸惑っている。どうやら美鈴自身も状況を理解していないようだ。

そんな美鈴にレミリアは声を出す。

「美鈴、あれをしなさい」

そう言うとレミリアは近くの樹木を指差す。

「わ、わかりました」　美鈴はレミリアの言葉に頷くと、その樹木の前に立つ。

「何を始めるんだ…」

蓮次が呟いた次の瞬間だった。

美鈴は左足をバネにして右足に勢いをつけると、「はぁぁ！！」と声を出し、その樹木に蹴りを一発かました。

蹴りをいれた樹木は、メキメキと音を立てると、大きな音を立てて倒れる。
その姿に蓮次は動きを止める。いや、目の前の出来事からの恐怖で体がすくんでいるのだろうか。
体からは若干の震えが見られた。

レミリアは、紅魔館の方を向き、蓮次の後ろまで歩くと動きを止める。
「採用試験は三日後。三日分の食糧はこちらが負担するわ。ただし、住む家は自分で探しなさい」

レミリアは、そう言うと後ろからついてくる咲夜と共、に館の中に戻っていいった。
蓮次は、倒れた木をじっと見たまま、しばらく動かなかった。

「え、えっと……。みんなどうしたんですか？」
三人の行動に、ただただ慌てる美鈴の姿も今の蓮次には映らなかった。

「ふぅ、駄目駄目ね……。あれじゃあ、少年は役に立たないわ」
館に入り、廊下を歩くレミリアは愚痴を溢す。
「まぁ、相手は人間ですから……」
「でも、あなたや霊夢達のような強さは無い。メイドの者に、三日分の食糧を用意させなさい」

「かしこまりました。……しかし、もうじき夜が来ます。大丈夫な

のでしょうか？　あの者を一人にしておいて」
咲夜の言葉に一度足を止めるレミリア。

「それで少年の身に何かが起これば…」
レミリアは咲夜の方に顔を向けると、言いかけた話を続ける。
「…その時は彼の実力がその程度だったという事よ」

レミリアの言葉に迷いは無い。咲夜にはその姿から気迫のようなものを感じとった。
「……了解しました」
そう答えると、咲夜は黙ってそれに従った。

第０８話「紅魔館の挑戦」（後書き）

おかしな部分がありましたら、是非ご報告お願いします

第０９話「再会と入門？」（前書き）

第９話
最初のうちは、少し蓮次が暗いかな？
ごゆっくり……

第０９話「再会と入門？」

湖に島に浮かぶ紅魔館と向こう岸を結ぶ一つの橋。その橋の中枢で蓮次は夕日に黄昏ながら、水に映る自分の姿をじっと見ている。
「はぁ、なんて顔してるんだ、俺は……」
橋の上から映るのは、気落ちして少し暗い顔の、蓮次自身が映っているだけである。

紅魔館の使用人採用試験は、三日後にとり行われる。レミリアから、ショルダーバッグのような物を渡されており、中には三日分の食糧が入っている。中には乾パンやペットボトル水、、更にはコンビーフ缶など加工食品が入っている。
夏の暑さで食べ物が腐らないようにと、向こうからの気配りなのだろう。
他には、懐中電灯と護身用にと、メイドの咲夜からナイフを受け取っていた。

「咲夜さんか……。綺麗な人だったな」

蓮次はその名を口にすると、ショルダーバッグから長方形のケースを出す。
その中から、安全の為に固定されているナイフを取り出す。

ナイフの刃の部分が鏡のような働きをして、ショボくれた蓮次自身の顔が映しだされてる。
蓮次はつくづく自分が情けなくなった。そう思いながら、ナイフをケースに仕舞い、ショルダーバッグに入れた。

「はぁ、どうしようかな。スペルカードなんて、使い方判らないし

な……」

蓮次はポケットに入っているスペルカードを出す。

蓮次が湖に溺れた時も、全く影響を受けなかった不思議な紙である。その証拠に、紙を乾かした時に残る凹凸が一切無い。

「不思議な紙だよな」

蓮次は紙を半分に折って、それを再び戻してみる。すると折れた跡が無く、新品の紙のようになる。

「折れる時の跡すら残らないのか……。魔法みたいだな」

蓮次はそのスペルカードを見ているうちに、不思議な気持ちが湧き出てきそうだった。

「ちょっと、走ってみようかな」

何をすれば良いのか判らない蓮次は、とにかく走ってみることにした。「何とかして自分を鍛えなければ。」これが蓮次の気持ちだった。

ただし、気持ちだけではどうにもならない事がある。

それは蓮次の屋根、つまりは宿である。今までは、フランの地下室部屋で住ませてもらっていた蓮次であったが、今度ばかりはそうはいかない。

この三日間蓮次は、紅魔館側の島に上陸する事を禁じられている。その為に三日分の食糧とナイフを渡されたのである。

まず宿か住み処を探すのが先のはずなのだが、何を考えたのか蓮次は、突然走りだしたのである。

そして走っている間に、日没を過ぎてしまったのだった。

「はぁ、はぁ、……疲れた。一キロ程走っただけなのに……、足がパンパンだ」

日頃の運動不足が今回表に出たのだろう。ただでさえ、一週間フランの地下部屋で暮らしていたのだから、動きが制限されていた。

「完璧に体、鈍ってるな……。あれ？」

気がつけば蓮次は、知らない森の中にいた。辺りは薄暗く吹く風が森を騒がせ、なんとも不気味な道だった。

以前の紅い霧程、蓮次は不気味には思っていなかったが、道に迷ったと考えると恐怖はそちらの方にいってしまう。

「あれだな。ちょっとした好奇心がこうなったわけだな。大丈夫だ大丈夫。きっと疲れてるんだ俺」

恐怖を和らげる為にも、声を出して、まぎらわせようと考えているのだろうか。言葉数が急に増える蓮次。

「……あ、その前に住むところを探さなければ。疲れも癒せないな」

そう言うと蓮次は、少しでも休めそうな場所を探す。

「あれ？　何か落ちてるぞ」

蓮次の目の前には、白くてフワフワとした、綿のようなものが落ちてある。蓮次はそれを見るなり近づいた。

「これは、枕代わりに使えそうだな」

嬉しそうにそう言うと、白い綿を手で鷲掴みにして持ち上げた。すると突然、その綿が生き物のように蠢く。

「あれ？　もしかして変なスイッチでも押したか？」

蓮次はこの綿が玩具であると考えて、起動する為のスイッチか何かを押したものだと思っていた。

しかし次の瞬間、玩具かと思っていた綿が顔を蓮次に向けた。綿が生き物である事に今頃気がついた蓮次であったが、綿の生き物、『毛玉』は既にご立腹である。

「あれ、もしかして怒らせてしまったか？」

「キィー！」

毛玉は奇声を発する。すると何処からともなく、似たような毛玉が次々と現れる。

「え、何？　宴会芸の集まり？」

あっという間に毛玉の群れに包囲される。不味い状況であると察知して、すかさずショルダーバッグからナイフを取り出す。

「くそっ、ナイフなんか振り回した事ねぇけど……」

蓮次はそう言ってナイフを構えて、毛玉を撃退しようとする。しかし、毛玉の群れに一騎討ちなどという法則は無い。毛玉は全員で押し圧せてきた。

「くそ！　卑怯も……がばば……」

蓮次は、一斉に攻撃してきた毛玉に為す術もなく覆われてしまい、姿が見えなくなる。

森の中にある小さな小屋。何処にあるかは、わからないが、そこに建っている。高床式になっており、四本の柱によって支えられている。

そしてその小屋の中で、蓮次は眠っている。

「う、うーん……」

「こきげんよう」

声が聞こえて、蓮次は目をあける。それは女性の声であった。

蓮次が起き上がると、そこには以前に出会った事がある人物が座っている。

「八雲紫……？」

「お久しぶり。元気にしてた？」

「元気にしてたじゃねぇよ。……あれ？　さっきの毛玉は？」

「撃退したわよ。一撃で」

「そうですか……」

当たり前のようにそう言ってくる紫に、蓮次は力がどっと抜けた。

「あ、そうそう。これ落ちてたわよ」

そう言って紫は蓮次に投げる。それは以前、湖に落ちたときに、無くなったと思われていたリュックサックだった。

「あ、ありがとう」

蓮次は礼を言うと、リュックサックのファスナーを引っ張り、中身を開ける。

「あれ？」

リュックサックの中には、着替えのシャツにパンツと長い靴下のみが入っている。

「その……、あれだ。紫さん？　俺のザックに飴が入っていたと思うんだが……」

「美味しく頂きました」

「やっぱりか……」

「あなたにはもういらないでしょ？　自分の能力で、どうにかなるんだし」

紫の言葉に蓮次は驚いた。どうやら紫は蓮次の身に起きた事を、知っているようだ。

「どうして、その事を？」

念の為に、蓮次は紫に質問してみる。

「簡単よ。ここ数日間、様子を見させてもらった。それで、あなた

の能力についても把握済みと言うわけ」
「そうかよ……」

少し無理があるような気がしなくもないが、この人ならやりかねないと蓮次は思った。

「それで？　どうするの」
「え、何がだ……」
「採用試験よ。紅魔館の」

そう言われて蓮次は、三日後にあの場所で、採用試験が執り行われると言うことを思い出す。
蓮次はこうしてはいられないと、立ち上がり小屋の扉に向かおうとする。
しかし、目の前の扉は隙間に姿を変える。八雲紫の能力である。

「何するんだ！　ここから出してくれ」
「落ち着きなさい」
「は、はやくしないと三日間が過ぎてしまう……」
「だから、落ち着きなさいて言ってるでしょ。三日ある時間をあなたは何に費やそうとお考えで？」
「え……」

蓮次は紫に言われて、三日間を何に使うのか、具体的には考えていない事がわかる。
蓮次はとにかく、走りまくって鍛えようとしていたが、それでは間に合わないだろう。

「何も考えていないようね。それじゃあ三日の期限も無駄ね」
「……」

蓮次は言い返す事が出来なかった。今の彼には門番に対する攻略法がなければ、弾幕ごっこで戦う術も持っていない。
言ってしまえば『無知』と何の変わりもなかった。

「どうしたら、いいんだろうな……」
「簡単よ。何も知らないなら、知らないなりに術を身につけるだけ」
「いやいや、言葉ではそう言っても実行するのは、なかなかなぁ……」
「あら、なら修行すればいいんじゃない？　目の前に優秀な師匠がいましてよ」
「はい？」

蓮次は気の抜けた言葉で紫の方を見る。目の前にいるのは、隙間の能力を持っている女性ただ一人。

「えっと……」
「どうする？　あまり時間が無いわよ」

八雲紫。蓮次をこの場所に連れてきた人物であり、謎の隙間移動の力を持つ、未知数の女性。
胡散臭さはあるものの、鍛えてもらえれば、強くなれる気がしない事も無かった。

「さぁ、受ける？　受けない？」
「是非受けさせていただきます」　蓮次は、はっきりと紫にそう言った。気合いの方は十分と言ったところだろう。
紫は蓮次の言葉を聞いて「わかった。あなたを少しでも強くできるようにするから、覚悟はしておきなさい」と言った。

「よし、それじゃあ早速……」
「止めておきなさい」
外に出ようと立ち上がった蓮次に、紫は待ったをかけ、扉の前に隙間を張る。
「どうかしたのか？」
「外を見なさい。あれでは真っ暗で何も見えないわ」
窓から外を見ると、先程まで薄暗かった景色が、いつの間にか数センチ以上先が見えない状態になっていた。
「明日からはキツくなるから、それまでゆっくりと休んでなさい」
「わ、わかった……」
紫の言葉に蓮次は素直にそう答えた。
「素直でよろしい。それじゃあ私は外に散歩してくる」
「え、でも外は暗いんじゃ？」
「あなたとは違って、私は暗闇でも普通に歩ける」
「そ、そうなのか」
紫はその後、外に出ていき蓮次は小屋の中で一人になる。小屋の中は独特の木の香りがしており、蓮次は心を落ち着かせる。
「明日からか。なんだか緊張してきたな……」
蓮次の緊張は、興奮に近いものがあった。今までには無かった能力と呼ばれるものを、初めて具体的に強化する事ができる。

「今まで、特殊能力とか魔法なんて、ファンタジーや御伽話でしか見たことが無かった……」

自分に特殊な力がある。そう考えただけで蓮次は心踊った。

「これは、今日は眠れる気がしないな」

その三十分後、紫は小屋に戻ってきて、中の様子を見に来た。

「どう？　眠れそうかしら……あら」

そこには、寝息を立てながら眠る蓮次の姿があった。どうやら興奮よりも、眠さの方が勝ったようだ。

「よく眠っているわね。まぁ、その方が修行も励みやすいかも……」

紫はそう言うと、隙間をつくり。そして隙間に入る前に蓮次の方を見て、「それじゃあ、明日」と言うとその場から姿を消した。

第０９話「再会と入門？」（後書き）

……と言うわけで隙間の紫さんに蓮次は、ばしばし鍛えてもらう事になります。

第１０話「特訓と逃走」（前書き）

★揚ポテトです
四日ぶりの更新かな？

ゆっくり……していってください

第１０話「特訓と逃走」

紅魔館、レミリア・スカーレットの部屋。その奥にある如何にも貴族が愛用しそうな、紅色のソファーにレミリアは座り、夜の景色を見ている。

彼女の昼間というのは、眠るか夜の吸血に備える為の休憩でしか無かった。しかし、霊夢に出会ってからは、昼間も行動をするし、夜に睡眠を取ったりもする。

「お嬢様、紅茶をお持ちしました」

コンコンと扉をノックする音が聞こえる。

「入りなさい」

レミリアが言うと、メイドの咲夜が台を押して入ってくる。台の上には紅茶とカップが置いてある。

「今、紅茶をお容れしますね」

「ありがとう」

咲夜は、紅茶をテーブルに乗せ、カップに注ぐとレミリアの前に置く。レミリアはその紅茶を持ち、飲んだ。

「美味しい。流石は咲夜ね。また注ぎ方が上手くなったんじゃない？」

「いえ、私などまだまだでございます」

咲夜は申し訳無さそうに、そう言う。

レミリアにとって咲夜に淹れてもらう紅茶が、何よりの楽しみである。月の光に照らされた湖の景色を、楽しみながら紅茶を飲む。

これこそ……彼女の至高の時間、なのかもしれない。

「ねぇ、咲夜。フランの調子は？」

「フランドールお嬢様ですか？　私が見た限りでは、食事は普通に取られていたそうです」

「そう……」

レミリアはそれを聞くと、紅茶を再び口に注ぐ。

フランドールは基本的に、自分から進んで地下室に住んでいた。今回のように、地下から出てきて暴れだしたのには、幾つか理由がある。

一つはやはり、レミリアが霊夢と魔理沙に接触した時以降、人間に興味を持ち始めたという事だろう。レミリアも大きな点に関しては、そう考えていた。

そして、もう一つ考えられるのは……

「あの男、今はどうしてるのかしら……。私たちの土地に入ってくるなとは言ったけど、夜は民家に泊めてもらわない限り、生活していくのは、厳しいでしょうね」

昨日、紅美鈴と三日後に試験をすると言って、弱々しくもそれを引き受けた少年。体格も普通で容姿も普通。髪色は如何にも日本人らしい黒の少年である。

「丹波蓮次……、だったわね？」

「あの少年の事ですか」

「ええ、少々無理難題を押し付けた気がしなくも無いわね……」

無理難題。……美鈴との試合は、並大抵の素人に相手が出来る程のものでは無い。彼女が館の門番を任されている理由は、やはり門番としての能力が備わっているからだろう。例え一撃を与えるであっても、あの少年がそれをこなすのには、難易度が高いように見え

る。
　難題は相手によって違いがあるのである。もし、彼が霊夢のような力があるのならば、話は変わってくるかもしれない……。

「では、やはりあの少年に、今回の試験は無理があると……」
「いえ、そうとも限らないわ。三日の有余で人は変わるかもしれない。今回に関しては、私は運命には触れないようにしてるから」
　その言葉に咲夜は、少し驚いた表情をする。
「では、結果は判らない……と」
「ええ、勝負は最後まで判らない。これを霊夢との戦いで知ったから……」
「そう……ですか」
　この時、咲夜は霊夢という存在を少し羨ましく思った。そして、二日後の試合に咲夜は楽しみにしようと考えた。

「二日後が待ち遠しいわね」
「……はい」

＊＊＊＊

　その頃――

「ほら、ちゃんと避けなさい」
「うっ…」

蓮次は現在、紫が放つ球体を避ける特訓を続けていた。朝から夕方まで、この練習を続けており、その間の休憩は水分補給と食事のみである。

「少しは、様になってきたんじゃないかしら？」

最初のうちは、紫が放つ弾幕に被弾が多かった蓮次だが、朝早くからの特訓あってか今になって、弾幕を避ける事が出来るようになっていた。

紫も弾幕の速度をかなり緩めてはいるが、成果はあった。

「まだまだ、……次は速度を……上げてください」

「大丈夫？　疲れが出てるわよ」

蓮次は息を切らしており、また足もガクガクと震えているのがわかる。一日中、特訓を続けるとなるとその代償は、やはり大きなものだった。

紫は今回の練習で、動きやすい服として、動きやすい服を用意していた。

かの有名なアクションスターも撮影に使用していた、黄色の左右に縦線の入ったジャージである。

だが、そのジャージも土や汗の汚れ、擦り傷により流血した痕などにより、所々変色している。場所によっては穴が空いていて、紐が縺れている部分も見られる。

また蓮次の顔にも、汚れと血がついていた。

この特訓はほぼ、自主的なものであるが、蓮次自身が止めると言わない為、紫もそれに協力している。

「それじゃあ、さっきより速度を上げるから、気を引き締めなさい」

紫はそう言うと、先ほどより速めの弾幕を蓮次に向けて放った。

＊＊＊＊

「さて、今日はこれくらいにしましょう。明日の修行に差し支えるわよ」

一時間程の時間が経ち、紫が蓮次にそう言う。その言葉を聞いた瞬間、蓮次は動くのを止めて、その場に座りこんでしまう。どうやら既に、体にガタが来ていたようだ。

「そんなのじゃ明日が持たないわよ。体を壊したいのかしら？」

蓮次に近づいて紫はそう言う。蓮次は紫の方を見ると、口を開く。

「さぁ……、どうなんだろうな？　逆に聞くけど、何で俺をここに連れて来たんだ？」

「ノリよ」

即答だった。あまりに素っ気なかったので、蓮次もガクッと頭を降ろす。怒りたくもなったが、今の蓮次にそれほどの体力は残っていない。

「でも、少々の興味があったわ。外の世界の人間に……」

「……」

「まぁ、こうしてみると、あまり違いが無いものね」

違いが無いと言う紫だが、ここに来て一週間の蓮次には、そう思う事が出来ない。僅か一週間程度ではあったが、良くも悪くも多く

の不思議に出くわしてきたからだろう。

「なぁ……、幻想郷ってさ。どんな世界なんだ？」

ふと、蓮次はここについて多くを知りたいという気持ちになっていた。

「教えてほしい？　まぁ簡単に説明してあげる」

紫はそう言って幻想郷について、話をしていった。

「まぁ、言えばここは貴方の住んでいた世界とは違い、隔離された場所なの」

「隔離？　閉ざされてるのか」

「そう。この世界には博麗大結界というものが、張られている。貴方の世界はその結界の外にある。理解できるかしら？」

「ああ、何となく分かる……」

蓮次は結界については、本や漫画程度の理解力の為、完全に理解する事が出来ないのである。ただ、何かの壁で外には出れない事が蓮次には理解できていた。

「あれ？　じゃあどうやってここに連れて来たんだ？」

「結界は、私の隙間を使えば自由に行き来する事が可能よ」

紫はそう言うと、その場で以前蓮次が潜ってきたと思われる、隙間を出現させる。

「これを使えば、今すぐにでも帰る事が出来るのか？」

「……まぁ、可能よ。どうする、帰りたい？」

紫は、特に嫌がるような顔もせず、蓮次にそう言う。多分ここで蓮次が、『帰る』と答えても引き止める気は無いのだろう。

「……いや、今は止めておく。採用試験に合格できなかったら、連

れて帰ってくれ」

蓮次はそう言った意味でも、簡単に帰るわけにはいかなかった。

「了解。それじゃあ、近くに川があるから、洗ってきなさい。また後で来るから、何かあったらその時に聞くわ」

そう言うと紫は、隙間の中から新しい赤色の上下のジャージを出して、「着替えよ」と蓮次に言って投げると、隙間の中へ消えていった。

残された蓮次は、受け止めたジャージを抱いて川がある場所にまで向かう事にした。

＊＊＊＊

川の場所にまでついた蓮次は、誰もいない事を確認すると、上下のジャージと下着を脱ぐと川の中に浸かる。蓮次は、昼間もこの川を訪れており、その時に見た印象は『綺麗な川』であるという事である。

「あー、染みるなこれ」

どうやら、傷痕が染みているようだ。今日の特訓だけでも蓮次の体は傷だらけであった。明日も修行があると考えると、多少嫌になる気持ちもあるだろう。

「頑張るしかないか……、明日はもっとキツくなりそうだしな」

今日が過ぎれば、明後日には美鈴との戦いである。

もし、一撃を加える事が出来なくても、外に返してもらえる。最初から、逃げるを選択しても良かったのかもしれない。だがそれには、彼なりのプライドがあるのだろうか。

「よし、明日も頑張るか」

蓮次は立ち上がり、川を出た。すると先程とはどうも、様子が違う気がした。何やら寒気のようなものを蓮次は感じたのか、身震いをする。

「夏場に寒気がするなんて、なんかヤバイんじゃないのか？」

蓮次はこう見えても霊感が強い方だった。その為か、最近まで人を見分ける事が蓮次には難があった。

寒さも少しずつ増していき、蓮次の震えも一層強くなってきた。

「これは、不味いかな……」

蓮次がそう言った次の瞬間だった。

「何してるの、あんた？　全裸であたいの前に立つなんて、見上げた根性ね」

「……」

目の前には、青い髪をしてその髪を水色の髪で括っており、背中には輝く羽根のようなものが付いた少女が立っている。月に照され

ていた為、その姿は蓮次によく映った。

「何よ。あたいの顔に何かついてるの？」

少女の体からは、煙のようなものが出ている。それが冷気であるという事に蓮次が気づくのには、そう時間が掛からなかった。

「ははは……、良い夢見ろよ！！」

「あ、待て」

謎の捨て台詞を吐いた蓮次は、着替えと着用していたジャージを手に持ち、一目散に逃げていった。だが、少女は後ろから追ってきている。

「……あいつも飛べるのかよ」

蓮次はとにかく必死に逃げる事にした。理由は単に、少女が放っている冷気が寒いからである。

現在の蓮次が身に付けているのは靴のみであり、何処ぞのＲＰＧより酷い装備をしている。もし外の世界にいれば今頃蓮次は、青い服の方々から赤く輝く白黒の車に、歓迎されていただろう。

「あの娘以外に、誰かに見られてたら最悪だな……」

蓮次は少女を撒くと、小屋の中に吸い込まれるように入っていった。

ちなみに次の日に、誰かが惨状を見ていたのだろう。あの森には原住民が住んでいるという噂が、近くにある村全体に広がったそうだ。

第１０話「特訓と逃走」（後書き）

青い服の方々には、自分はお世話になった事が無いですただ、事情聴取を簡単に受けたことはあります

次回は美鈴戦でございます

第１１話「紅魔館採用試験」（前書き）

美鈴戦です。

一撃を当てるのが目的なので、弾幕ごっことは言わないかも……

１１話です、ゆっくりしていってください

第１１話「紅魔館採用試験」

約束の日。

早朝、巫女の博麗霊夢がまだ目を覚まさぬ頃、神社へと続く長い階段を走りながら、登っていく少年の姿があった。

今日、紅魔館にて執行される採用試験を受ける、丹波蓮次その者である。

蓮次は紫に、祈願をするにあたって、丁度良い場所があると言われ勧められたのが、この神社だった。

階段を登りきった蓮次の前には、神社まで真っ直ぐ延びた道、また周りには木々が囲うようになっている。

蓮次は、神社の本殿まで周りを見渡しながら進む。自然に溢れたこの神社が、都会育ちである彼にとっては新鮮な光景だった。蓮次は一度大きく深呼吸をすると、本殿の石で構成された階段を登り、賽銭の前にまで近づくとポケットの中から、正方形の財布を取り出す。

財布の中に手を入れて、半分に曲がった跡が残る夏目漱石を手に取ると、賽銭の中そっと近づけて手を離した。

「やるだけの事は、やったんだ……。後は成果を発揮するだけだな」

蓮次は、何度も言葉を発して手を神社に向けて合わせた。端から見れば念仏を唱えているように、見えなくも無い。

「よし、いくか！」

蓮次は顔を両手で叩いて気合いを入れると、階段を疾走していった。

試験の内容は、美鈴との『弾幕ごっこ』で蓮次が一撃でも入れれば、正式に採用を認めてもらう事が出来る。
相手は樹木を一蹴で抉り倒した女性である。蓮次もそれを見た瞬間、弱腰になっていた。その時に蓮次をこの場所に連れてきた、八雲紫が現れて、三日間……いや、正確には二日間の朝昼晩と彼を基本から鍛えさせた。
今の蓮次には、三日前には無かったもの、『自信』が滲み出ている。

「よっしゃあ、紅魔館までとばすぞ！！」

蓮次はそう言いながら、紅魔館への道を全力で走った。

＊＊＊＊

紅魔館の門。
朝早くから、その門の前には大勢のメイドが集まり、その中心にはレミリアが、咲夜に日傘を差してもらい椅子に座っている。
今回の採用試験に試験官役として、蓮次の相手となる美鈴は、体をいつでも動かせるように、準備運動をしている。

「美鈴、ちょっと良いかしら？」
レミリアが、美鈴を呼ぶと体を動かすのを止めた美鈴は、彼女の近くにまで寄った。

「なんでしょうか？　お嬢様」
「丹波蓮次との試合、手加減無しで掛かりなさい」
その言葉に、咲夜やメイド妖精、更には美鈴自身も驚愕する。
美鈴は館随一の武道を持ち、その力は館の全ての者が認めている。
しかし、今回相手をする少年は、武道どころか主体である『弾幕ごっこ』すら素人の領域である。

「もしかして、蓮次さんと言う方はお強いのでしょうか？」
「いいえ、余り強くない。人間並みの力しか感じなかった」

レミリアが感じた、蓮次から発せられる霊力のようなものは、微々たるものだった。人間誰しもそう言う力が多少有ったりもするそうだが、蓮次はそれと同じ、つまりは一般人と何ら変わりない。

「では、手加減した方が宜しいのでは？」
「だからこそよ。手加減なんてすれば、かえって相手を傷つける場合がある。この際圧倒した方が、相手の為よ」
「……わかりました」

美鈴はレミリアの言葉に納得したのか、先ほど居た位置まで戻り再び運動を始めた。

「さて、そろそろ来る頃かしら」
レミリアは館に向こう岸を繋ぐ橋を見る。するとそこから、紅魔館を目指して走ってくる少年の姿があった。

「来たわね……」

その姿が挑戦者の蓮次であるという事が、レミリアだけでなく、この場の全ての者が気づいた。ただし、その姿を見た限りであれば、

別人に思えるかもしれない。

「何かあったのかしら？　あの人なんだか張り切ってない？」
「美鈴様を相手にすると言う事で、自棄（やけ）になられてるのかしら……」

妖精メイドが、その姿を見てマイナス思考で言う。
そうした間にも、蓮次は橋を渡りきって、紅魔館側の岸まで辿り着く。そして「はぁはぁ……」と息を切らせながら、レミリアの正面で走るのを止める。
何故か背中には、三日前まで無かったリュックサックを背負っていた。

「あなた、そんな物を背負っていたっけ？」
「いや、以前に無くしたのを親切な人が、拾ってくれた」
「そう……、とにかく逃げずに来たことだけは、褒めてあげる」
「そりゃどうも……」
「それじゃあ美鈴！　出番よ」
レミリアの言葉で、美鈴が蓮次の前に立つ。彼女の表情はやる気で溢れている。気合いは十分だ。

「蓮次さんでしたよね。改めて、今日貴方の試験の相手を勤めさせていただきます、紅美鈴です」
「ああ、どうも。丹波蓮次だ……よろしく」

互いに握手をかわす。
蓮次も握手をした瞬間、美鈴にどれ程の強さがあるのかが分かる。
把握はしきれていないだろうが、強いというのは確かだろう。
弾幕ごっこであれば、大怪我はあまり無いと、紫から聞いていた蓮次ではあるが、不安が募る。

「どうかしましたか？」
「いや、結構力あるなと思って……」
「鍛えてますから」
「そ、そうか」

二人はそう言うと、握手を解いた。

「それじゃあ、私がルールについて、説明するからよく聞きなさい。
今回、試験を受ける、丹波蓮次が紅美鈴に対して、とにかく一撃を決めれば採用。
ただし、美鈴側はその間、蓮次から一撃を受けないように、撃墜、または戦闘不能にする事も許す」

レミリアがそう言って瞬間、周りがざわつき始める。
要は蓮次が美鈴に攻撃できなくする為に、彼自身を一時的に立てなくするのも有り、という事である。

「制限時間は十分間。
時間は咲夜が時計で計る。もし、十分間で一撃を蓮次が加えられなかったり、彼が自主的に敗北を認めた場合、不採用となる」

レミリアの説明が終わると対になるように、右側に蓮次、左側に美鈴が立つ。

「それでは、始めましょうか」

レミリアの声と同時に、試験は開始された。

＊＊＊＊

採用試験は開始された。最初に動いたのは、蓮次の方だった。
始まりの合図で蓮次は走り、美鈴との距離を縮めて、飴を放つ。

「どうやら、基礎は学ばれたようですね。ですが、良いんですか？
私に近づいて」

美鈴はそう言うと、弾幕を出現させ、蓮次の飴を撃ち落とすと残りの弾幕を蓮次に向けて放った。

「うわっ！」

美鈴の弾幕を蓮次は、かわそうと体を反らす。しかし、美鈴は弾幕を更に増やし、隙をついたとばかり、蓮次に向けて放った。

「痛った……、やっぱり効くなこれ」

蓮次は弾幕を受けて、二メートル程後ろに下がる。美鈴は、休む間も無く蓮次に次なる攻撃を繰り出した。

「うおっ！」

蓮次は、弾幕をすれすれでかわす。

「やりますね。少し手段を変えます」

その様子を確認すると、美鈴は蓮次に向けて弾幕を一斉に展開させる。
蓮次はそれを見て「不味い」と声に出して美鈴から更に距離をとった。

「華符『芳華絢爛』」

スペルカードの宣言。蓮次も以前のフランドールや、魔理沙を見て経験している。紫との特訓でも、弾幕ごっこにて必需と聞いていた。
美鈴の弾幕は、見とれる程綺麗なものであり、蓮次もその光に魅了される。

「……しまった！」

避ける事を忘れかけていた蓮次は、弾幕が近づいている事に、ようやく気付き慌てて回避を試みる。

「いたた……、またかよ」

そのうちの何発かは、蓮次に被弾した。受ける度に、蓮次と美鈴の距離が離れていく。
蓮次には大きな弱点がある。それは弾幕の飛距離である。
蓮次が放てる弾幕は、飴と小さな球体のみである。小さな球体というのは、弾幕ごっこにて殆どの者が撃てる球であり、紫からこっそりと教わった。
しかし、教わって間もない蓮次にとっての大きな問題が、威力が低い事と、放った所で距離が及ばない事である。こればかりは二日で拾得する事は出来なかった。

「くそっ、ここからじゃ届かないな……」

蓮次はそう言うと、美鈴との距離を縮める為に走る。

「勇ましさは、ありますね。ならこれで……」

美鈴が懐から何かを取り出し、それを蓮次に向けて投げる。すると光の線が出来るが如く、それは蓮次の顔を横切る。

「……」

蓮次の顔をそれが掠ると、汗のようなものが、流れてくるのが分かる。蓮次はそこを手で擦るようにする。

「……血が出てるな」

掠り傷の為、血は微々たるものであるが、刃物で切った小さな傷ほど痛いものは無いだろう。だが、特訓中に受けた傷が多かったからだろうか？　蓮次は気にも止めず、再び体勢を立て直す。

「それ、まだまだいきますよ」

美鈴は再びそれを幾つも投げてくる。

避けた蓮次がそれの落ちた先を見ると、忍者の愛用品である武器、クナイが落ちている。

美鈴が投げていたのは、クナイだったのである。

「くっ、どれだけ投げれるんだよ……」

「こう見えても、時を操れない咲夜さん以上は投げられますよ」

時を操るという言葉に、疑問を覚える蓮次であったが、考える時間は無い。

今は、容赦無く飛んでくるクナイをひたすら避けるのみである。

「どんだけ飛ばすんや！　ええ加減に止めてくれ」

蓮次は、口調が変化してしまうほど必死だった。

例えクナイであれど、刺されば怪我をする。蓮次はギリギリでかわし続けていた。

「それでは、次の手でいきます」

一瞬、美鈴が攻撃を止めた為、チャンスと考えた蓮次は彼女の元へ走る。

「あなたが近づかなくても、私から近づいてあげますよ。虹符『彩虹の風鈴』」

美鈴は大きな光を発すると、光を渦のようにして広げていく。

蓮次はその場で動きを止めて、再び避けようと試みた。

しかし、美鈴は距離を少しずつ蓮次に近づけており、回避をするもの儘（まま）ならなくなる。

「くそ……」

ついに、弾幕に蓮次は呑まれるかの如く、巻き込まれる。

「どうします？　まだ続けますか？」
「……はぁ、はぁ」
蓮次は地面に伏せている。弾幕による怪我はあまり見られないが、息を切らしている。
彼の大きな弱点の一つとして、スタミナ不足であるという事だ。
確かに動きはましになったのだが、体力面に関して言えば美鈴に遥かに劣る。
「……まだまだ」
蓮次は地面に両手をつくと、再び立ち上がった。
＊＊＊＊
「うむ……。咲夜、あと何分の時間がある？」
二人の様子を見物しているレミリアが、時間を計る咲夜に聞く。
「残り時間は、三分でございます」
「……そう。美鈴は相変わらずの調子だけど、蓮次の方にはかなりの疲れが見える。さて、どうでるかしら」

「失礼ながら、この試験はもうついたと思います。挑戦者には、あれだけの疲れが出てます。美鈴には体力もありますし……」

蓮次が疲れている事は、美鈴含め、観戦している者全てに判っている事であった。たまに体をフラつかせる場面すら見せるぐらいだ。

「確かに、あれではそろそろ限界があるわね。でも、まだ三分ある。最後まで観なきゃ損でしょ？」

「ですが……」

「彼はまだ何かを仕掛けてくる。何となくそんな気がする」

レミリアの言葉で咲夜は、蓮次の方を見る。少年が疲れを見せるシーンはいくつも見られた。

だが、彼にはまだ使われていないものがある。

「スペルカードですか？」

「ええ、もし拾得しているなら、必ず使うはずよ。

間違いなくね……」

＊＊＊＊

前日の事である。

短い時間の間に、紫は基本と要点を蓮次に教えていた。その中において、最後の特訓にあったのが、スペルカードの宣言についてである。

「いい。あなた手に持っているそれは、スペルカードと言うものよ。最近になって、ここで出来た弾幕ごっこのルールには、それを使用するわ」

蓮次はそう言われると、以前、紫に貰ったそれを眺める。

「どうやって使うんだ？　御札に力があったり」
「無い」
「無いの！？」
「ええ、それはただの紙よ。一応あなたのには、素材に拘(こだわ)ってみた。そのカードは、完全燃焼をする以外は、元に戻る力を備えている。でも、それ以外何の能力も無い」

それだけでも、十分凄いのでは？　と思った蓮次だったが、改めてカードには戦闘の効力が無いことを知る。

「スペルカードは、自分自身の技を書くだけの紙に過ぎない」
「そーなのか？」
「……チッ」
「すいません、ちゃんと聞きます…」

紫の舌打ちに蓮次は恐怖を覚えた。

「だから、要はどんな技を思い浮かべるか……という事。スペルカードを使用する者の多くが、以前からある技を宛てたり、由緒ある名前をつけたりする。

ただし、技を繰り出す時に描くための想像力と創造力、どちらも大切よ」

「……同じじゃん」

「声に出せばね。字は全くの別物。でもある意味では似たような事。どちらも作る為には必要なものよ……」

「どうしました？　手が止まってますよ」

「……あ、いや、続けてくれ」

蓮次は動きを止めて、修行の時の事を考えていた。

「ボケてたら、怪我しますよ」

美鈴は、そのまま次々と弾幕を蓮次に放った。

直撃を受けた蓮次は、倒れる寸前に力を入れて止める。

「……こりゃあれだな。口の中を切っちまったか」

「スペルカードは使わないんですか？」

「いや、まぁ一枚しか完成してないからさ。使うべきか迷ってるんだよな」

蓮次は一応一枚だけ習得させた技がある。ただし、これといった策も無しに、使ったとしても弾き返されるのは、目に見えていた。

「……出し惜しみでは、無いようですね」

「まぁな……」

蓮次にはあまり余裕が無かった。最初のうちは、スペルカードを奥の手と考えていたが、美鈴が隙を見せずして使用を躊躇（ちゅうちょ）していた。結論として、今の技では美鈴に一撃を加えるのが難しいと考えた。

蓮次は頭の中で妙案が無いか、考えている。何かで美鈴に一撃を与える方法が無いだろうか。そう考えた時である。

「……待てよ」

蓮次は、唾を飲み込む。内側が切れている為、鉄の味がするだろう。

だが、蓮次は何かを感付いたようだ。

「……試すか」

そう言うと蓮次は、美鈴に向けて、弾幕を放ちながら前進する。

「甘いです」

美鈴は、蓮次の放つ弾幕を軽々と落とす。距離があり、蓮次の球威もほとんど無い。

「く……」

「時間は残り一分」

咲夜からそう声が聞こえる。

声が聞こえると同時に、蓮次は懐から御札を出す。

「この場になって、使うことを決めましたか。なら、私もいかせていただきます」

美鈴もスペルカードを手に取ると、互いに発動を宣言する。

「魔符『キャンディセルフス』」

先に宣言していた蓮次のスペルカードにより、八つの弾幕が、同時に出現し美鈴に向けて放たれた。

美鈴との距離は六メートル程で、速度は今までの蓮次の弾幕で一番速い。

「……彩符『極彩颱風』」

しかし、美鈴の弾幕によりその全ては、簡単に撃墜される。それどころか、弾幕の残りは蓮次に向けられる。

「今だ！」

だが、それと同時に、蓮次は美鈴に向かっていく。向けられる弾幕は、避けれるものは避け、それ以外は体で受けながらも前進する。

「いっけぇ！！」

そして、美鈴の目の前にまで詰め寄り、飴を一つ、美鈴の顔に向けて投げた。

「時間切れです」

それと同時に、試験終了の時間となる。

蓮次が最後に投げた飴は、美鈴の顔には当たらず、口でキャッチしていた。

「……この試験、丹波蓮次を不合格とする」

レミリアが、そう声にしたその時である。

「か……か……」

「美鈴？」

美鈴が何やら顔を赤くしている事に咲夜が気づく。

そして次の瞬間、美鈴は大きな声を発する。

「辛いぃ！」

その声に、観戦していた全員が美鈴の方を見る。美鈴は「辛い辛い」と言いながらグルグルと走り回っている。

「何をしているの？　あのこ」

「辛いと言ってます。誰か水を美鈴に」

咲夜の言葉でメイド達が動き、近くに置いてあった水とコップを持っていき、美鈴に渡す。

美鈴は慌ててそれを飲む。

「はぁ、はぁ……やられました……」

「どうしたの？」

咲夜に日傘をさしてもらいながら、レミリアは美鈴に近づいて、話し掛ける。

「……まさか、最後に唐辛子の飴を食わされるとは、思ってもいませんでした」
「唐辛子の飴？　なにそれ」
「彼が、最後に投げてきた飴です。私は口でそれを受け止めてしまい、そのまま中に運んでしまいました。辛いものが得意な私でも、唐辛子味の飴はちょっと……」

美鈴の言葉にレミリアは、一つの確信を得る。

「美鈴。つまりはあなたが彼に、一撃を加えられたと判断して良いのかしら？」
「……はい」

美鈴は静かに頷きそう言った。

「わかった。判定は変更よ」
「お嬢様？　それはつまり……」
「ええ、そうよ」

レミリアは一度間を置いて、再び口を開く。

「丹波蓮次、紅美鈴に一撃を加えた事により、合格とする」

それは、蓮次を紅魔館の採用を告げる言葉であった。

「痛たた……」

レミリアは声がした方を見る。そこには地面に倒れて仰向けになった、蓮次の姿がある。

「あー、もう駄目、疲れた……動きたくない」

何やら愚痴を溢し始めていた蓮次を見て、一度クスッと笑うと「それじゃあ、戻りましょう咲夜」と言って館の方へ歩きだした。

「美鈴、お疲れ様。中に入って休みなさい。残りの者は、彼を館の中に運ぶ事、いいね？」

まわりのメイド達は「はい」と返事をすると倒れている蓮次を運ぶ。

「さて、彼はどれだけ使えるのかしら……、すこしばかり期待させてもらうわ」

もう一度姿を確認し、レミリアはそう呟くと、咲夜と共に館の中に戻っていった。

それを少し高い位置から、見物する者がいる。

「ふぅ、何やら上手くいったみたいね」

三日間、蓮次を鍛えていた八雲紫である。

彼女は、隙間からその戦いを観戦していた。
その途中で、何度かレミリアが見てきたが、傘を差していた為、最後まで紫の姿は知られなかった。

「しばらくは、会うことも無いでしょう。まぁ、頑張りなさい」

紫はそう言うと隙間の中に姿を消した。

こうして、蓮次にとっての一つの重石は取り除かれたのであった。

だが、館の仕事は山積み。
これから蓮次は、更なる苦労を経験する事になる。蓮次がそれを知るのは、また後の話である。

第１１話「紅魔館採用試験」（後書き）

少し粗っぽくはなりましたが、これにて蓮次は紅魔入りです。

ここから、雑用伝説が始まるのかな？

第１２話「仕事は難航」（前書き）

一週間ぶりの更新です。
ゆったりしていってください

第１２話「仕事は難航」

博麗神社の縁側にて、二人の少女が腰掛けている。毎度お馴染みの仲良し？　コンビの霊夢と魔理沙である。右側に霊夢、左側に魔理沙が座っている。

「熱いわね……」
「ああ、そうだな」

霊夢は竹製の茶色の扇を、魔理沙は紙で出来た内輪を扇いでいる。

幻想郷にも勿論、夏が来る。
さんさんと照りつける日差しと、うっとおしい程の蒸し暑さに、二人のやる気は削がれている。ただ、普段とやっている事が同じであるといえば、その通りである。

「こんにちは、相変わらずね二人とも……」

声の聞こえた方に、二人は嫌そうな表情をしながら、見る。

「なんだ、レミリアか」
「なんだとは何よ。二人ともだらしないわね」

霊夢の反応に不満を漏らすレミリア。すると魔理沙は彼女の周りを見て、ある事に気がつく。

「なんだ？　いつものメイド殿は、いないのか」
「まぁね。そう毎日も、咲夜を連れてくるわけにもいかない。忙し

いし……」

いつもなら、となりに咲夜がいる。普段、外で行動するとき、レミリアが日に当たらないよう、日傘を咲夜が翳しているのだが、今日はレミリア自身が日傘を持っている。

咲夜は御供したいと言ってきたのだが、「そう毎日も、あなたを使うわけにはいかない。たまにはゆっくりしてなさい」とレミリアが言った為、咲夜もそれに従った。

「よいしょ」　霊夢が座っている隣に、レミリアも傘を持ちながら「隣、座るよ」と言って腰かける。

そんなレミリアにじっと視線を魔理沙が贈る。レミリアもそんな魔理沙に気がつき、声をかける。

「な、なに？　私の顔に何かついてるの」

「いや……なんかさ、レミリアだけ涼しそうだなと思って……」

魔理沙は、暑さをまったく表情に出さないレミリアを、疑問に思う。

「私は、吸血鬼だから、暑さには強いわよ」

「体、弱いんじゃなかったっけ？」

「それは……」

霊夢に言われて何やら慌てるレミリア。

異変の時、レミリアが紅魔館の奥にまで入ってきた霊夢と戦う前、「体が弱い」と霊夢に話していた事があった。

それを霊夢は覚えていたらしい。

「そうなのか？　それじゃあ…」

魔理沙はレミリア近づいて、服に手のひらを上から当てていく。

そのまま、胸元あたりで手を止める。

「なんか、ここだけ冷たい気が……」
「う……、わかったわよ。今見せるから」
レミリアは、そう言って自分の服を探り、何かを取り出した。

「なにそれ……？」
「保冷剤。これがあると、涼しいから、つけている」
「なに、本当か！？」

魔理沙がそれに反応するや否や、レミリアの保冷剤目掛けて手を突っ込む。

「こらっ、離しなさい」
「離さない。何があっても離さないぜ」
「何をやってるのよ、もう……」　そんな魔理沙を、霊夢は呆れるように見ていた。暑さは人を狂わせるとは、まさにこの事である。別に狂っているとまでは、いわないが例え話である。

「あ、そうそう。今日はあなた達に言いたい事があって来たのよ」
レミリアは、魔理沙の頭を叩いた後、そう言い始める。
「言いたい事？」
「ええ、実はつい最近、新しい使用人を雇ったんだけど……」

＊＊＊＊

あの日、紅魔館の採用試験以降、蓮次は館で使用人として働く事になった。

内容は、館で働いている者の手伝い、つまりは与えられた仕事をこなす事が、彼の職務である。

良くいえば便利屋。悪く言えば館の雑用である。

また彼は、館の地下に一室をレミリアから貰い受けており、蓮次は精進して仕事を取り組むことを、レミリアに宣言した。

色々とあって、蓮次が紅魔館に来てから三日が過ぎていた。

「……っくしゅん！」

「風邪でもひいたの？」

「いや、ただのクシャミだと思う……」

「……まぁ気を付けなさい。季節の変わり目は、風邪を引きやすいというから」

図書館にて蓮次はパチュリーの指示のもと、本棚の整備をしている。

紅魔館の図書は、そこらにある図書館より遥かに多くの本が並べ

られており、メイド妖精の力だけでは、限界があった。
その為、丁度紅魔館で働く事になった蓮次に、整理を手伝うよう呼び出したのである。

「それじゃあ、早速だけどこの本を向こうの本棚に仕舞ってくれるかしら？」

パチュリーが指差した本は、十冊程の分厚い本が、重ねられている。見た目からしてもかなりの重さがある事が分かる。

「……あれを持つのか？」
「ええ、そうよ。男でしょ？　力仕事ならあなたに任せるようにって、レミリアが言ってたわ」
「……なんでだよ」

蓮次は、レミリアの言葉という事で、渋々積まれた本を持ち上げて、言われた場所まで持っていく。その間、本の重量に右へ左へとバランスを取りながら、本棚へと運んだ。

「まるでピサの斜塔ね。あんまり傾かせたら、本が傷付くかもしれないから、しっかり運んで」
「……ぐぬぬ」

パチュリーの言葉は、今の蓮次にはまったく聞こえていないようだ。

「ふぅ……、どうにか持ってこれた」

本を棚まで運びきった時の蓮次は、山登りで山頂に到達するような達成感を得ていた。これだけの本を、自分にも持つことが出来たという事に関して、自分を褒めたいまでと思っていた。

「あなた、器用じゃないわね」
「へ？」
「上から少しずつ持っていけば、良かったのに……。届くでしょ？あなたの身長なら」
「あ……」

蓮次の頭の中で、何かが崩れさっていく感じがした。確かに、言ってしまえばその通りなのだろうが、あっさり不器用だと言われ、蓮次はパチュリーが心の何処かで、小さな悪魔で飼っているような気がした。
「どうしたんですか？　ポカンとして」
考えていると、誰かに声を掛けられる。
「うおっ！！」

蓮次の目の前には、何処からともなく赤毛の少女が現れた。突然の出来事に蓮次は体が反り返る。

「だ、大丈夫ですか？」

突然、驚いた姿に赤毛の少女は急いで蓮次に近づいて、声を掛ける。

「あ、ああ……大丈夫だ。君はここの人か？」

「はい。パチュリー様の使いの者です。名前は……、小悪魔とでも呼んで貰いましょう」

「……小悪魔？」

蓮次は少女の姿をもう一度見る。すると小悪魔の背中にレミリアと同じ、黒い羽根が生えている事に気がつく。

「まさか、他にも悪魔が居たなんてな……」

蓮次は、紅魔館の勢揃いとも言うべきメンバーに、感心する。

「あ、この本をあちらにしまってもらえますか？」

「了解……」

早速、実質先輩である小悪魔から蓮次は指示を受ける。上から物を言うような口調では無い為、蓮次は不満を一切持たずに動けた。とは言え館で働いて三日間、蓮次は一度たりとも不満に思った事は無い。

飯が三食、部屋の完備、これだけあれば蓮次は既に充実していた。ただ、一つ気がかりなのは、外の世界の事であった。

自分は今、外の世界ではどうなっているのだろうかと、考えるも仕事をする度に、それが薄れる。

「よろしくお願いします」

小悪魔に頼まれ、蓮次は積まれた五冊の本を持ち、言われた場所まで持っていった。

その後も、蓮次は本の整理の為にひぃひぃと言いながらも、行ったり来たりを繰り返していた。蓮次は仕事というものが、どれ程難しいかを改めて実感した。

そして、すべての本の整備が済んだ頃には、窓からオレンジの光が入り図書館の一部が照らされていた。

「お疲れさま。私の仕事はここまで」
パチュリーに言われて、ようやく今日の仕事が終わったという事に、蓮次はへとへとになりながら、安堵する。
「何かあったら、また声を掛けるから、それまで寛いでなさい」
「はい、わかりました」

力強く返事をしつつも、心の中では今日は、何もありませんようにと、蓮次は心の中で思っていた。

「お疲れさまでした」

小悪魔がそう言い、蓮次も頭を下げる。

図書館を出て、廊下を歩いていると、メイド妖精に遭遇する事が多い。窓ふきをする者から料理を運ぶ者もいる。

蓮次が廊下を歩いていると、値が付きそうな壺を持つメイド妖精に遭遇する。蓮次の体は自然と後退した。

「どうかしましたか？　蓮次さん」
「……重くないのですか。それ……」

蓮次はおそるおそる、そのメイド妖精に聞く。だが、メイド妖精は苦の表情を一切感じない笑顔で、こう答えた。

「鍛えてますから」
「そ、そうか……」

会話を終えて、メイド妖精と別れた蓮次は、「紅魔館の方々は凄

いな」と呟き、自分の部屋がある地下室の階段を降りる。
地下へと続く階段は、かなり薄暗く、ランプのみが置かれた道となっている。元々、紅魔館全体の窓が、吸血鬼であるレミリアが日に晒されないように作られており、夕方になれば薄暗くなる。
地下でもまた、階段と同様に、ランプのみが辺りを照らす。しかし、視界はそれほど悪いというわけではない。蓮次にも地下の廊下の隅々までがある程度は映った。

「ははは、あれだな……。正直、不気味だこれ」

三日前からこの地下に住んでいるとは言え、不気味である事には変わりなかった。
以前にフランの部屋でこっそり住まわせてもらっていた時、蓮次は地下にある風呂を借りる時や、フランが地下を抜け出した時に、この辺りを通った記憶がある。
しかし、風呂を借りるときは、誰かに自分の姿が見つからないようにとしか、考えていなかった為、不気味だと思うまでには至らなかった。また地下を抜け出した時についても、走ることに必死だった為、殆ど周りを意識していなかった。

「ここって、こんなに暗かったっけ？　まぁいいや、部屋に入ろう……」

扉にＲＥＮＪＩと書かれた部屋があり、そこが蓮次の一人用の部屋である。蓮次は扉を開けて中に入った。

「結構広い部屋だね」

「うぉ！！　……なんだフランか」

部屋の端にある木造のベットの上に、フランドールが腰掛けていた。

「お疲れ蓮次。初めて入ってみたんだけど、中々広いねこの部屋」

「まぁな。俺も初めて見た時は驚いた」

蓮次が三日前に貰い受けた部屋は、十畳程の広さがあり、一番奥の右端にベット、左端には一冊も立てられてない本棚がある。中心には縦五十センチ、横百センチ程の木造の机と背凭れの付いた椅子が置いてある。　また、昼間は光が当たる為に窓も存在し、そこにハンガーに服を吊るし、干している。服を洗うのはもちろん、自分の仕事である。

「ところで、何か用でもあるのか？」

「うん。早速だけど、これ読んで」

フランは蓮次に本を渡す。それは、『桃太郎』と書かれた蓮次でも手頃に読めそうな絵本だった。

「懐かしいな……」

「読んだ事があるの？　今日、パチュリーが蓮次に読んで貰いなさいって渡されたんだけど……」

「パチュリーさん。騙したな！！」

とは言いつつも、久しぶりに見た絵本というものを、フランに読み聞かせた。蓮次はその本を読みながら、自分の小さかった頃を思い出していた。

「……めでたしめでたし」

蓮次は、絵本を読み終えるとフランに返す。するとフランはそれとは別に、絵本を取り出して、蓮次に渡す。

「それじゃあ、次はこれを読んで」

「はい？」

タイトルには、これまた誰もが一度は読んだ事があるだろう、『かぐや姫』と書かれた絵本であった。

「えっと、今日はこれぐらいに……」

「読んで、読んで」

天使のような笑顔で、蓮次にそう言ってくる。

「わかった。これで最後な？」

蓮次はフランの『押し』に負けて、二冊目の本を読み始めた。

このあと、十冊もの本をフランに読み聞かせる事になるとは、この時の蓮次は考えてもいなかっただろう。

朝を迎えて皆が目を覚まし、仕事をする中、欠伸をしながら働く蓮次の姿が、メイド妖精の間で見られたそうだ。

第１３話「神社にて」（前書き）

更新しました

ささっ、ゆったりと寛いでください

第１３話「神社にて」

蓮次が館で働き始めて五日が経っていた。

そんな時、レミリアに呼び出された蓮次は、館の一番奥にある、レミリアの部屋へと足を運んだ。

部屋の奥には、高級そうな紅い机と椅子に座るレミリアがいた。

「来たわね、蓮次」

「はい。何か御用ですか？」

口調は丁寧語を使うよう心がけている蓮次であるが、なんせ館の主人は見た目が、十歳程の少女である為、少しばかり違和感を感じていた。

しかし、相手は天下の吸血鬼。そこらにいそうな妖怪とは訳が違い、下手に行動すれば、ただでは済まないだろう。

「早速で悪いけど、これから私と一緒についてきて欲しい場所があるの。あなたには、どうしても来てもらいたいから、準備をしてちょうだい」

「へ？　なんでまた……」

「来たら判るわ。ついてきなさい」

レミリアは、そう言って机から立ち上がると、部屋の扉を開ける。

扉の外にはいつの間にか、メイド長の咲夜が日傘を持っている。

「お出掛けになられますか？」

「ええ、同行をお願いするわ咲夜」
「かしこまりました」

咲夜は一礼すると、レミリアの隣に着き廊下を歩き始める。その姿を見た蓮次は、咲夜という存在が仕事人そのものであるように感じた。

「はやくしなさい、蓮次」
「あ、すいません」

二人との距離が遠ざかっている事に気がついた蓮次は、急いで二人の後を追った。

＊＊＊＊

紅魔館を出た三人は、湖の橋を渡り森の中に入った。森に入るまでの間、咲夜はレミリアに日傘を差すことを止めなかった。蓮次が試しに、「疲れないんですか」と咲夜に聞くと、「何度も同じ事をすれば、自然と慣れてくるものよ」と答えた。

更に歩き続けると森を抜けた為、咲夜は再び日傘をレミリアに日傘を当てて歩き始める。この時の姿が、蓮次は何処と無く二人が親子に見えた。

「さぁ、もう少しで到着するわ」
「あれ？　ここって……」

森を抜けて、少し大きな道に出た時、周りの風景に蓮次は見覚えがあった。更に進み、鳥居の前で三人は動きを止める。
薄い赤色の鳥居には木製の板が付けられていて、『博麗神社』とそこには記入されている。

「俺、この場所に来た事ある気がする」
「そう？　こんな神社に訪れるのは、私達か白黒の魔法使いぐらいかと思ってたけど……」
「白黒の魔法使い……、あまり良い記憶がないな」

神社を初めて訪れたのは、館の試験を受けたその日の朝である。八雲紫に祈願するのに良い場所があると言われ、勧められたのがこの神社だった。

レミリアと咲夜の二人が階段を登り始めた為、蓮次もついてゆく。

階段の途中にあるものは、左右に並んだ森のみである。綺麗に並んだ木に、蓮次は道を譲っているような錯覚を感じた。

「しかし、煩いわね。耳が痛くなる」
「仕方ありません。この時期は、蝉が活動しますから」

周りに多くの木が立ち並んでいる為、蝉の住み家には持ってこいである。ジィジィと鳴く者からミーンミーンと鳴く者まで、種類は様々である。

「まぁ、仕方無いか……。咲夜、蓮次。神社まで走るわよ」

蝉の鳴き声に痺れを切らしたのか、レミリアは一人走り出してし

まう。

「あ、お嬢様！　蓮次。急ぐわよ」
「は、はい」

幸い、周りが木に囲まれているとは言え、日に必ずしも晒されない訳では無い。勿論、吸血鬼にとって太陽の光は致命傷である。にも関わらず、一人先に進んだレミリアに咲夜は少し困った顔をしながらも

「あ、咲夜さんが消えた……」

姿を消して、いつの間にかレミリアの隣に着いていた。

「蓮次！　遅いわよ」

ポカンとしていた蓮次に、レミリアが大声を出す。納得がいかないまま、蓮次は急いで階段をかけ上がった。

＊＊＊＊

「来たわね、レミリア」

階段を登った先には、紅白衣装を身に纏った巫女が箒を持って立っている。頭の赤色のリボンが大きな特徴とも言えるだろう。

「ええ、今日はよろしくお願いするわ」
「一体、何が始まるんです？」

レミリアの言葉に蓮次が質問する。それを聞いたレミリアが答える。

「これからあなたは、霊夢に修行を受けてもらうわ」
「え、何故に？」

突然言われて、蓮次は驚く。霊夢というのは、目の前にいる巫女の事である。その人から突然修行を受ける事になるなど、蓮次は一度足りとも考えた事が無い。
それどころか、今日ここに来た理由すら、今初めて聞いたのである。

「……えっと、何でまた俺が？」
「館の中で、あなたが一番弱いから」

グサッと何かが蓮次の心を突き刺した。
レミリアの言った事は間違いではなく、力ではメイド妖精数名を含んだ、ほぼ全員に劣り、仕事量では咲夜に圧倒的に劣る。また図書館の整備にしても、小悪魔の俊敏さには劣っている。

「えっと……、つまりどうしろと……」
「さっきの通りよ。霊夢に特訓を積んで貰いなさい」
「でも、本人の許可が……」
「取ってあるから連れてきたのよ」
「そうですか……」

蓮次は弱冠、目を潤わせながら、渋々修行に応じる事となった。

「それじゃあ、来なさい。えっと、蓮次だったかしら？」
「ええ、そうよ。彼をビシバシ鍛えて頂戴」
「……わかった。とりあえず奥に来て貰えるかしら」

霊夢に言われて三人は、神社の奥の本殿へと進む。またしても納得がいかず、モヤモヤとしている蓮次だが、『館最弱』という不名誉な称号をどうにかする為には、やはりこれしかないだろう。
蓮次はとにかく、流れに沿ってみる事にした。

「それじゃあ始めるわよ。準備は出来ているかしら？」

＊＊＊＊

階段と本殿の石の道の、丁度真ん中あたりに霊夢と蓮次が立っている。
蓮次は流れに沿っていこうと考えていたが、途中でレミリアが「内容をハードにして頂戴」と言い、霊夢がそれに応じた。
結果、最もキツい修行の内容になったのである。

「じゃあ、始めましょう。修行は簡単、私のスペカを避けながら、貴方は新しい技を身に付ける。ただそれだけよ……」
「何処が簡単なんだ……」

はっきり言えば、以前蓮次が紫に受けた修行の更に上級である。

紫の時は、ただ避けるだけの話だった為、今回は技を身に付けるが項目に加わる分、難しさが増している。

ちなみにレミリアと咲夜は、本殿の方から蓮次を見物している。

「霊符『夢想封印―散―』」

霊夢のスペル宣言により、修行は開始された。

宣言により、生み出された光の球体は分散されて、蓮次に向かって放たれる。

「うわっ！」

突如放たれた数多くの球体に、戸惑いながら蓮次は避けようとする。しかし、反応が遅れ、その球体は被弾する。

だが、被弾した蓮次はある事に気付いた。

「威力が低いのか……？」

あまり痛みを感じなかった蓮次は、そう口にする。どうやら、霊夢が宣言したスペルは威力が低かったようだ。

「さぁ、ガンガンいくわよ」

解析している間にも、霊夢は御札のようなものを、次々と投げる。流石に何度も当てられれば、不味いと考えた蓮次は急いでそれをかわしていく。

「流石に避けるか。なら、次はこれ」

「うぇ……」

今度は陰陽玉をいくつも散らせて、蓮次に向けて放ってくる。囲むように投げられた陰陽玉は、蓮次に襲いかかった。

「魔符『キャンディセルフス』」

蓮次はスペル宣言をして、飴を周りに放出させて、かろうじで陰陽玉を撃ち落とした。

「がっ……！」

かのように見えた。

だが、全て撃ち落とせた訳でなく、残されたうちの一つが蓮次の顔面に直撃して、そのまま地面に伏せた。

「痛った……」

「どうしたの？　もしかして降参？」

「……いや、続けてくれ」

蓮次はそう言って立ち上がり、再び修行は開始された。

修行は二時間以上続き、そのまま昼間の時間帯を迎えてしまう。霊夢自体、動き続けていた為、自然と空腹になる。一旦修行を止めて、縁側がある裏庭に移動する。そこで四人は、昼食を取る事になったのだが……。

「……」

「随分とボロボロになったわね」

レミリアにそう言われた時の蓮次の姿は、服が所々破れていて顔には無数の痣、そして何故か頭には大量の草が付着している。

「蓮次。あなた、何処かにぶつかったの？」

咲夜が、傷薬を塗りながら蓮次に聞く。ちなみに、傷薬は館から持参したもので、蓮次がこうなるだろうと想定されて持ってきている。

「……いや、何度か転けたらこうなってしまいました」

蓮次は苦笑いをして、薬が染みるのを必死に堪えている。

「まぁ、最初からキツめにいったけど、大丈夫？」

霊夢が蓮次に少し心配そうに言ってくる。

既に、二時間以上の修行を受けている訳だが、未だに技を一つも身に付けてはいなかった。

「いや、大丈夫じゃ…」

「彼はまだいけるて言ってるから、この後もバリバリ鍛えて頂戴」

「……」

蓮次が言う前に、レミリアが勝手に答えてしまう。霊夢も「それじゃあ昼が過ぎたら、また始めましょう」と言ってお茶を啜った。

その後、紅魔館から持参した弁当を四人で食べて、再び修行が開始されたのだが、続けること計五時間、ようやく蓮次は技を身に付ける事が出来た。

「ようやく身に付いたわね」
「はぁ、はぁ……。疲れた」

蓮次はそのまま、仰向けに倒れる。黄昏時に照らされた橙の顔は、蓮次の流す汗がよく映っている。

ようやく新たな技を手にした訳だが、修行内容が、避けながら技を発案するのでは無く、とにかく頭で考えて、自力で技を見出だすという方針に変わった。

理由は、霊夢が途中で飽きてきたのと、蓮次があまりにも動きに不甲斐なさがあったので、レミリアが変更した。
結果的に、蓮次が新しい技を手にしたので、一応目標達成という事だろう。

「はい。霊夢」
「報酬は、確かに頂きました」

霊夢は普段口にしない丁寧な口調を使い、渡された封筒を巫女服の懐に入れた。

「今日はありがとうございました」

蓮次は、霊夢に感謝の言葉を述べる。

「まぁ、あんたも頑張りなさい」
「それじゃあ、また後日会いましょう」

そのまま三人は霊夢と別れて、長い階段を降り、神社を後にした。

＊＊＊＊

森を潜り館の道を進むレミリアと従者の三名。日が沈み、日傘を差す必要が無くなったレミリアは、鼻唄を歌いながら、嬉しそうにスキップしている。夜が近い為か機嫌が良い。

咲夜はそんなレミリアを微笑ましく思いながら、右隣を歩く。右手には日傘を持っている。

そして蓮次は足を少しふらつかせながら、歩いている。手元には今回作りあげた三枚のスペルカードがあり、それを何度か見つめていた。

「明日からはまた館で一日働いてもらうから、覚悟して寝なさい」

「……うっぷす」

レミリアに言われて、蓮次は満腹とも言わんばかりに、吐きそうになる。明日からまた働くという事になると、急に蓮次は顔を真っ青にしていた。

……だが、次の瞬間である。三人の周りを何かが囲む。

「あら、何かしら？」

「こいつ達は、毛玉ですね」

三人を囲んだのは、未だに生体がよく判らない毛玉だった。数は

レミリア達の二倍程である。それを見たレミリアは小さく微笑み、蓮次の顔を見る。

「蓮次。あなた一人で退治しなさい」

「え、俺がか！？」

レミリアはそう言うも、蓮次は毛玉に対して、少しばかりトラウマがある。とは言っても、ここで断れば主直々の命令に背く事になる為、それだけは避けたいと思い蓮次は前に出た。

「折角だから、新技いくか……」

蓮次はスペル宣言をして、技を発動した。

「甘符『シュガーレイン』」

発動した瞬間、無数の飴が空に舞い上がり、そのまま毛玉の群れに落下した。

毛玉の群れは攻撃を受けて、そのまま撤退する。それを確認すると、蓮次はスペルカードをポケットに仕舞った。

「さて、御苦労様。それじゃあ帰りましょう」

レミリアはそう言うと、咲夜と館へと続く道を再び歩き始める。

「……うわっ、素っ気ないな」

蓮次は少々不満を漏らすと、二人の元まで走った。

しかし、ここに来てようやく成長の兆しが見えてきた事に蓮次は、

一度嬉しそうな表情を浮かべて、元に戻すと再びレミリアの後ろについた。

あと、余談ではあるが、次の日、筋肉痛で足をガクガクさせながら、蓮次は館の仕事を行っていた。

第１４話「秋の旬」（前書き）

秋です

夜が涼しくなってまいりました……

十日ぶりの更新です、ごゆるりと読んでいってください

第１４話「秋の旬」

幻想郷は秋の季節を迎え、山々は赤々と燃える紅葉へと姿を代える。自然をそのまま残すこの里でこそ味わえるその景色は、その場を通る人々を魅了する。

運動の秋、読書の秋、芸術の秋、そして食欲の秋。誰が付けたか判らないこのキャッチフレーズは、数多くの人々の間で浸透している。

食欲の秋と呼ばれている理由については、おそらく収穫の時期が秋なだけあって、付いたのだろう。

＊＊＊＊

秋の博麗神社は辺りが紅葉で染まり、世にも幻想的な姿を映し出す。

その神社の中で、博麗の巫女である霊夢が、囲炉裏に向かい何かをしている。

「今年も良い松茸が取れたわね。魔理沙もたまには気が利くわ」

囲炉裏には、串が立てられており、その先端部には茸の大御所、松茸が突き刺されている。その松茸を霊夢は火を使って炙るようにして、食べようとしていた。ただし、その近くの笊には、松茸がまだ残されており、魔理沙はかなりの量の松茸を霊夢に渡したという事がわかる。

「霊夢、遊びに来たよ」

突然、声が聞こえたと思いきや、引き戸を開けて、一人の少女が現れる。黒い翼を背中に生やした紅魔館の城主、レミリアである。異変を霊夢に解決されてからは、三日に一回程のペースで神社に現れている。

「なんで、こんなタイミングに……」
「なんでとは何よ。あれ？　何かしらこれ」

霊夢は、松茸を一人で食べようと考えていたが、こういう時に限って、誰かが来るものである。それも、自称運命操作の吸血鬼と来たものだ。

「……はぁ、まぁいいわ。どうする？　食べる？」
「いただきます」

霊夢が聞いた時には、既に一本の串に刺さった松茸が、レミリアの口の中に入っていた。

「こら！　まだ何も」
「こ、これは……」

レミリアは松茸を口にした瞬間、体の動きが止まる。そのまま口だけを動かして、松茸を噛み続けて呑み込む。

「お、美味しい……。霊夢、これは何？」

レミリアは、まるで世紀の大発見をして衝撃を受けたかのような表情をしている。それほど、松茸の風味が良かったという事なのだろう。

「それは、松茸って言って、キノコの一種。さっき魔理沙から貰ったの」
「へぇ……。松茸ね」
レミリアは囲炉裏に炙られた松茸をじっと見つめて呟くと、立ち上がる。
「霊夢。今日は帰らせてもらうわ」
レミリアは、そう言い終えると再び引き戸を開けて、近くに置かれた日傘を差すと、少し駆け足気味で帰っていった。
「何しに来たのよ……」
霊夢は唖然としながらレミリアの帰りを確認すると、炙られた残りの松茸に手を延ばして、口に運び幸せそうな表情をしていた。
＊＊＊＊
「……と言うわけ」
「はぁ、なるほど」
自宅に戻ったレミリアは、早速霊夢の神社で食べた松茸の話を、蓮次に話した。ちなみに現在、蓮次は花瓶を持って移動中である。
「松茸はとても美味だった」「そうですか。それじゃあ俺はこれで……」

蓮次がそのまま立ち去ろうとした時、レミリアが突然、蓮次が身に付けている黒いスーツの後ろを引っ張る。

「ぐぉっ！　ごほごほ……何するんですか！！」

「蓮次。松茸は食べたくないかしら？」

レミリアはそう言いながら、今度は蓮次の首近くのカッターシャツを引っ張る。蓮次は、首を絞められて苦しそうな表情を浮かべる。

「な、何するんだ……」

「松茸を食べたく無いかしら？」

「今は別に……ぐぇ、首を締めないでくれ。く、苦しい……」

レミリアが松茸に強く反応している事に、気がついた蓮次は、殺されそうな勢いだったので「食べたい」と答えた。するとレミリアはニッコリと微笑み、蓮次に向かってこう言った。

「じゃあ、松茸を取ってきて頂戴」

レミリアの言葉に、蓮次は一瞬沈黙し、次の瞬間「はい？」と気の抜けた声が漏れた。

「えっと、つまり……」

「貴方にはこれから、山に登って松茸を採集して来て欲しいの」

レミリアが突然、蓮次に下した命令は松茸を取ってこいという内容だった。元々、その手に関して蓮次は素人だった為、戸惑った。そもそも蓮次は一度も松茸どころか、キノコ自体採取した事が無かった。

「松茸の取り方がわからんぞ」
「なら、図書館で調べなさい」
「それぐらい、レミリア嬢が調べれば……」

蓮次の言葉に、レミリアは一度目を瞑り、沈黙する。そして再び目蓋を開くとこう答えた。

「だって、面倒じゃない。調べるの……」
「うわっ……本気で言ってるんですか」
「ええ」

レミリアの言葉に少し呆れた顔をする蓮次だったが、結局その後、松茸を採集する為の情報を集めるべく、図書館に向かった。

「はぁ……、困ったものだ」

蓮次は溜め息をついて、松茸について載せられている本を探す。館の図書館は広いため、管理をしている小悪魔にも手伝ってもらっている。

「蓮次さん。こっちです」

小悪魔の呼ぶ声が聞こえ、蓮次は声のする方に向かう。そこには、頭に付いた羽をパタパタとさせながら、本棚を指差す小悪魔がいる。

「あれです」
「うん？　何もないじゃないか」

小悪魔が指差す本棚には、キノコについて書かれた本はおろか、

その一段には本が一冊も置かれていない状態だった。

「これが、どうかしたのか？　もしかして、まだ本の整理が出来てないとか？」

「いえ、この一段は全部持っていかれたものです」

「え、誰に？」

「魔理沙さん……」

それを聞いた瞬間、蓮次は頭を抱えた。今の所、蓮次と魔理沙はこれと言った親交が無いが、館に入り込んでは本を盗む事で有名であり、メイドの間でも噂されていた。また、魔理沙と聞くだけで蓮次は穏やかな気分では無かった。

「それで……、キノコの本は？」

「ここにあったのが、全部そうです」

蓮次は唖然とした。普通に考えて、図書館で本を借りるとしても、五冊程が最大だろう。だが、少なくとも魔理沙は、五十冊以上は借りていっているだろう。本棚の横幅が狭い為、見た目以上に被害は大きくない。

これに関して小悪魔は勿論、管理人のパチュリーも頭を悩ませていた。

「もしかして、この空間に置かれていた本って……」

「……はい。キノコ系を中心とした本を並べてました」

「……本末転倒だな」

これでは、松茸を取りにいく事は出来なかった。勿論、蓮次は松茸の取り方を知らない。

「まいったな……。仕方無い、お嬢様には諦めてもらおう」

口ではそう言っているが、蓮次にとっては都合の良い話であった。なんせ、松茸を取りに山に向かわなくて済む理由が出来たからである。

ほっとしていたその時である。

「まぁ、待ちなさい」

「はい？」

声が聞こえると同時に、図書館の奥から、紫色の髪をした少女、パチュリーが現れる。隣にいた小悪魔はパチュリーにお辞儀をして、

「お疲れさまです、パチュリー様」と言った。

片手には一冊の本を持っており、そこには『キノコ大百科』と書かれている。

「これを、持っていきなさい。役に立つから」

「……ありがとうございます」

パチュリーはそう言うと、再び図書館の奥へと戻っていった。

蓮次は気落ちする。パチュリーが図鑑を持ってきた事により、情報が手に入り結果的に蓮次は松茸を探しに行かなければならなくなったからである。

「はぁ、仕方無い……」

蓮次は苦い表情を浮かべながらも、受け取った本を開ける。

＊＊＊＊

松茸はキシメジ科、キシメジ属、キシメジ亜属のマツタケ節のキノコの一種です。
養分の少ない乾燥した場所を、主に好みます。秋の季節にアカマツなどといった松の木の地上に生えています。成長は遅いです。
また梅雨時に生える季節外れの松茸もあり、早松（さまつ）と呼んでいます。
他にも松茸とよく似たキノコもありますので、もし購入する機会がありましたら、注意してください。

＊＊＊＊

マニュアルに書かれていた事を一通り読み終えた蓮次は、早速準備をする為に着替えに入った。
私服に着替えた後、館の外に出て庭を潜り門の近くにまで蓮次は足を進める。少し苦い表情を浮かべながら、門の外に出た。
服装は山登りの時に使った、赤と白のチェックが入った上着に、群青色のジーンズを身に付けている。靴は、動きやすいランニングシューズを履いている。
背中には松茸を持って帰る為に、網目状のカゴを背負っている。

「あれ、蓮次さん。お出掛けですか？」

そんな蓮次に、館の門番をしている少女、美鈴が声を掛ける。美鈴は背伸びをして、欠伸をかいていた。

「お嬢様の命令で、松茸を取りに行く事になりまして……」

蓮次は苦笑いをして、美鈴に理由を話した。美鈴はそれを聞いて、ははは と笑い再び話を続けた。

「お嬢様は気まぐれな人ですからね。頑張ってください」

美鈴は手を振り見送ると、蓮次はそのまま館と向こう岸が繋がっている橋を通過すると、マニュアルに書かれた通り、松の木を探しに森の道に入る。

「あ、そう言えば、松の木の形を聞くの忘れてた……」

館に戻るのが、面倒だと思った蓮次はそのまま森の奥へと進んでいく。

森の中は、以前蓮次が来たときと変わらず、薄暗くあまり日差しを通さない。ただし昼間という事もあって、十分に辺りを見渡せる状態である。

「ここは、相変わらずだな……。とにかく、村にでも行けば別の情報が手に入るだろう」

どれか松の木か判らなかった蓮次は、近くに村があると、以前聞いていた為、その方へと向かった。

＊＊＊＊

森の更に奥へと突き進むとそこは、高い山がある。

そこは妖怪の山と呼ばれる場所であり、古参の妖怪から妖精、その他にも多くの種族が住みかとしている場所だ。

その山にも多くの森があり、この時期になれば紅葉や銀杏の木が鮮やかに秋の山を、演出する。

その山の低い位置。登山者と見物人の境界ギリギリの場所に、一人の少年が行ったり来たりを繰り返している。

「あれ……。村の方角はどっちだ？　と言うか村なんてあったのか？」

蓮次には、村に向かう上で一つの難点があった。それは、村を一度も訪れて無いという事である。はっきり言って、蓮次が村に辿り着ける筈が無かった。

「あれ、こっちの方角だったかな？」

蓮次が辺りをさ迷い続けている間にも、太陽は少しずつ西の方へと傾いていた。

第１５話「白狼天狗の仕事」（前書き）

今回はかなり短いです
よかったら、読んでいってください

タイトル通り、あの子が出ます

第１５話「白狼天狗の仕事」

幻想郷には、大きな山が存在する。

その名も妖怪山。数多くの妖怪がその山には住み着き、幻想郷で最も過酷な場所とまで呼ばれている。また名前なら、誰もが一度は聞いた事があるであろう『天狗』と呼ばれる種類の妖怪も生息しており、山の中枢には天狗の里がある。

そして、その里から更に離れた場所には白狼天狗と呼ばれる哨戒の天狗達が、山の特に里への侵入を防ぐ為に、日夜交代で見張りを行っている。

そして、ここにもまた一人の白狼天狗が見張りを行っている。

「はぁ……、暇です」

大きく口を開き欠伸をして、手を大きく背伸びさせて、ダルそうな顔をする白狼天狗。

白い髪に赤い烏帽子（えぼし）のようなものを乗せ、犬のような耳が頭に付いており、ピクピクと動いている。

その白狼天狗の少女には、犬走椛という名前がある。現在、交代で勤務をして、特定の場所で見張りの仕事をしている。

「……しかし、こんな山なんかに、わざわざ侵入してくる人なんているんでしょうかね……」

椛は辺りを見渡し、そう呟く。周りには木々が立っているのみで

あり、これと言って怪しい者を見ない為、椛にとって更に暇な時間が続く。

「最近は日が沈むのも早いし……。もうすぐ、冬が来るのか……あー嫌だ嫌だ」

あの寒い季節が来ると考えただけで、椛は身震いさせる。彼女はどうやら、冬があまり好きでは無いのだろう。

「あ、でもその前に、秋の山菜取りがしたいな。この季節は松茸に限ります」

松茸を頬張る自分の姿が、頭の中で描かれたのだろうか。椛の口から自然と涎が垂れてくる。はっと気づいた椛は急いで、袖で涎を拭いた。

「私とした事が、はしたない。しかし、松茸はおいしいです。今度誰かを誘って山菜でも取りにいきたいな……」

「おや、私は誘ってくれないの？」

一人呟いていた椛の背中から突然聞こえた声に、一瞬驚く椛だったが、聞き覚えのある声に、すぐに声のする方に体を向ける。

そこに立っているのは、真っ黒な髪色をした少女。椛と同じ赤い烏帽子のようなものを、頭に乗せている。ただしズボンを履く椛に対して、その少女はスカートを履いており、少しでも大きな風が吹けば、中が見えてしまうのではないか、と思える程に丈が短い。

「あ、文さん」

「どうも、仕事捗ってますか？」

射命丸文。椛と同じ天狗ではあるが、位が高い烏天狗の部類である。また彼女は幻想郷の新聞記者でもあり、文々。（ぶんぶんまる）新聞と呼ばれており、かなりの人気を泊している。

「はぁ……。まったく、あなたは仕事をしているんですか？　働いている姿をあまり見ませんが……」

椛は文に、毒ついたような声で話す。実は椛は、射命丸文の自由奔放にそうな姿があまり好きでなかった。特に毎日見張りを続けている椛にとっては、少々ばかり忌まわしき存在なのかもしれない。

「失礼ですね。ネタ探しに私は勤しんでます。あなたこそ、もう少し気合いを入れて仕事をしたらどうですか？　そんなんじゃ、いつまでたっても昇格は夢のまた夢よ」

「ほ、ほっといてください！　私は見張りが仕事なんです」

文の言葉に苦い表情を浮かべて話す椛。長時間の見張りに退屈していた椛だが、まさか上司との口論が退屈しのぎになっているとは、思わなかっただろう。しかし、文との口論でその辺りの思考は、頭の中から抜けているようだった。

「じゃあ、私はこれで……とにかく見張り頑張ってね」

椛に手を振った後、文は風を起こして次の瞬間、その姿は空高く舞い上がり、椛の視界からすぐに消えてしまった。

「はぁ……」

上司と部下の口論は、文と椛の間ではよくある事だった。馬が合わないのだろう、特に椛は、文を妬む気持ちが心の何処かにあるのかもしれない。

「はぁ……、気を取り直しましょう……」

文との件で、萎れたかのように垂れてしまった耳を再びピンと立たせると、両手で頬っぺたを叩いて、椛は今一度気合いを入れ直そうとした。

＊＊＊＊

三十分後。椛の目は先ほどより細くなっていた。どうやら秋の暑すぎず寒すぎない気候と、暇な見張りの仕事で睡魔が彼女を襲っているのだろう。

「……本当に誰も来ません。平和なのは良いことですが……」

改めて左右を確認する椛。特にこれといった人影も見当たらず、ただただ時間だけが過ぎている。この状況下に置かれれば、誰もが眠たくなるだろう。

「あーあ……、もうすぐ日が暮れちゃうな……」

少しずつ薄暗くなり始めた空を仰ぎ、椛は名残惜しそうに呟く。その表情からは哀愁のようなものが漂っている。一日の終わりを少し悔やんでいるようだった。

その後、約一時間程、見張りの仕事を行っていた椛だったが、これといった以上は見られなかった。

山を登っていく同僚の白狼天狗や山に住み着く妖怪達が、挨拶をして来たり、籠を背負っておどおどした青年が走って駆けていく姿を確認したり、位の高い妖怪が通り、お辞儀をしたぐらいだ。

椛にとって、いつもと何ら変わり無い一日である事に変わりなかった。妖怪の山とはいっても人が通る事は、対して珍しい訳でもなく、たまに不法侵入で一時的に捕まる人間もいる。

「もうすぐ交代の時間かな？」

後は、交代する白狼天狗が来るのを待つばかりであった。『仕事は最後まで気を緩めるな』とは言うが、既に長時間の見張りで疲れきっている椛にとって、無意味な事だった。

「この仕事が終わったら、ゆっくり休みましょう……」

見張りの天狗は、その後直ぐに現れて交代をすると、椛の暇な午後の見張りは終わりを迎えた。ただじっとしているだけの仕事というのも、ある意味疲れが大きかったりもするというものだ。

「明日は休みですし、にとりと将棋でもやりますか……」

だが明日は休みと考えるだけで、椛の疲れは抜けているようだった。表情からは自然と笑みが溢れていた。何はともあれ、椛の暇な一日は終了した。

＊＊＊＊

「……人里は何処にあるんだ」

夕日が沈みかけた時間帯。蓮次は未だに山の中をさ迷っていた。未だに見えない人里、それどころか遭難しているのでは無いかと思わせるような蓮次の状況。

「そう言えば、ここは何処だ？」

事実、遭難していた。蓮次にとっての一日は、まだ終わっていなかった。

だが、そんな蓮次を置いていくかのようにして、太陽は沈んでいった。

第１６話「豊穣の神と芋」（前書き）

十六話目です

涼しいですね
本格的な秋が到来なのか？
是非とも読んでいってください

第１６話「豊穣の神と芋」

蓮次は放浪していた。
当初の目的は、人里探しと松茸探しだったのだが、日もすっかり沈み夜の世界へと変化している。その為、視界も悪く松茸探しどころではなくなり、土地勘の無い蓮次にとって、紅魔館に帰る方法すら皆無な状態であった。

蓮次は夜道をただひたすら歩き、疲れが溜まってきては、地面に座り込み体を休めた。

「完全に夜になってしまったな……」

背中に背負っていた籠を降ろして、地面に座ると蓮次は本日三度目の休憩を取った。夜になれば人里の灯りが目立つと考えていた蓮次だったが、結局これと言った成果は得られなかった。

「あ、そうだ……」　蓮次はチェック服のポケットから、懐中電灯を取り出した。幻想郷に来る前に山登りをしていた時、蓮次は念の為に懐中電灯をザックカバンの奥に入れていた。
湖に沈んだカバンを、紫が持ってきてくれた時、流石にもう使用不可だと思っていた蓮次だったが、幸い使う事が出来た。今回も念の為にと懐中電灯を持っていた。

「おー、明るくなったな」

視界を見易くする為、スイッチをオンにする。勿論、懐中電灯はポケットに収まる程の小さな物であるが、豆電球側と蛍光灯側の二種のスイッチがあり、蓮次は蛍光灯側を押す事により、明るさはよ

り一層増す。

「最近買ったばかりの懐中電灯だからな……。まさかこんな場面で使う事になるとは思わなかったけど……」

懐中電灯の光によって、蓮次の顔が照らされる。その光に蓮次の表情も和らぐ。やはり光が有るのと無いのとでは、全然違うという事だろう。

懐中電灯の灯りをしばらくじっと見ていた蓮次は、今日の出来事について振り返っていた。

「あ、そういえば夕方に、白い髪をした人がいたな……」

夕刻、蓮次が道を散策していると、一人の少女がじっとその場で立っている事を思い出した。声を掛けようとしていた蓮次であったが、その少女が何処か上の空だったのと、頭に耳が生えていた為、何処と無く声を掛けにくかった。

少しの間、その場で声を掛けようか悩み、近くを彷徨(うろつ)いていた蓮次だったが、時間が勿体無いという結論に達したのか、その少女を横切った。

「あー、あの時声を掛けていれば、こんな事にならなくて済んだのかもな……」

蓮次は素直に、それに関して後悔した。だが今からその場所に向かうには、一時間は掛かるだろう。第一元来た道を覚えていない蓮次にとって、それは自殺行為ともいえる。

しかし、今の蓮次にはそれよりも大事な問題があった。

「何処で、夜を過ごせばいいんだ……」

今の蓮次には帰る場所も無ければ、泊まれるような場所もない。野宿をするにしても、屋根も建物も無く何が起こるか判ったものではない。

「まいったな。ここで寝るわけにはいかないからな……」

出来れば屋根のある場所が好ましい。そう考えた蓮次は、籠を背負い懐中電灯のスイッチを豆電球側にすると、それを手にとり再び歩き始めた。

＊＊＊＊

蓮次が歩きだしてから一刻程過ぎたあたり、ようやく休めそうな場所に辿り着いた。

「洞窟か。ここなら休めそうだな」

この際、屋根のような場所があれば、何処でもよいと考えていたのだろう。蓮次は飛びつくようにして、洞窟の中へ駆けていった。

「ふぅ……やはり、洞窟の中ってのは涼しいもんだな」

洞窟は年中気温が殆ど変化する事は無く、少し寒いぐらいの温度ではあるが、今の蓮次にとっては丁度良いぐらいである。

洞窟内部の岩場を見つけて、そこに腰かけて隣にあった平らな場所に懐中電灯を置いて、蛍光灯に切り替えた。そして蛍光灯により明るくなった洞窟で、左右を見渡し何かを調べている。

「どうやら、横になれる場所は無いみたいだな。ごつごつした岩ばかりだ……。この際贅沢は言ってられないけど……」

そう言うと蓮次は、岩の壁に体を凭れさせて、電気を消す。長時間電気を使えば、電池の消費が早くなる事と夜に獣か何かが光に気づき、襲ってくる可能性を視野に入れてだろうか。電気は切る状態にした。「おやすみ……」

山奥で一人で寝るという事が、若干心細かったのか、一言口に出して眠りについた。蓮次の一日は、こうして終わりを迎えた。

＊＊＊＊

「蓮次さん。帰ってきませんね」

紅魔館の門番としての仕事を終えて、館内に入ろうとする美鈴は、松茸を取りに行ったまま帰ってこない蓮次を思い出したのか、一度外の方を見る。

「まぁ、そのうち帰ってくるでしょう。意外とタフそうですし……」

美鈴はそう言って館の中へと入っていった。

紅魔館はとくにこれと言った問題は無く、メイド達はいつも通りの仕事をこなし、小悪魔はいつも通りパチュリーの隣に付いていて、レミリアは紅茶を飲みながら、咲夜と会話をしていた。

「ねぇ、咲夜」
「はい。お嬢様」

レミリアは窓を見て咲夜に話し掛ける。何やら心配そうな表情が、そこにはあった。ただしこの表情は、従者の一人が帰って来ないからという理由では無い。

「松茸。まだ届かないの？」

「今、蓮次が取りに行ってますから、もう少し待ってください」

心配しているのは、松茸が中々届かない事についてであって、蓮次に対するものでは無い。紅魔館は今日も何時もと同じ、生活を送っていた。

ちなみにフランドールは既に就寝しており、蓮次が帰ってきていない事など、知るよしもなかった。

＊＊＊＊

妖怪の山に朝が来た。朝日に照らされたその山々は、何とも神秘的な風景になっており、紅葉で赤と黄色が輝いて映る。

山に住む小鳥の囀りにより、数多くの生命は目を覚まし、始まりを迎えた一日に背伸びをして、活動を始める。

ただし、全ての生き物が同じ朝を迎える訳では無く、勿論、例外もある。

「うぉん！！」

一匹の灰色の犬が山を駆けて行く。ただし、その犬はただの『犬』では無い。種類はとっくの昔に絶滅したとされる生き物、ニホンオオカミの姿がそこにはあった。その狼の口には、薄い黄色のブロッ

ク状の何かがくわえられていた。

「ま、待ちやがれ犬コロ！」

その後ろには狼を追っている一人の少年、蓮次がいた。声を掛けるも狼は軽快な走りを止めずに、そのまま奥に奥にと姿を消した。

「……はぁはぁ。俺のカ□リーメイトが……」

狼が口にくわえていたのは、蓮次が持ち寄っていた非常食だった。朝、食べようとしていた時に、先ほどの狼に奪われて結果持っていかれたのである。

「……腹減ったな」

昨日から何も食べていなかった事と、朝の無駄な消費により空腹はピークに達していた。その音は近くに人がいれば気がつく程の大きな音である。

一先ず蓮次は能力を使い、手先に飴を生み出すとそれを口に含み、空腹をまぎらわせようとする。

「駄目だ。腹の虫が泣き止まん」

やはり飴では空腹を満たす事は出来ないのだろう。不満そうな顔をした蓮次は、何か食べられそうな物を探しに、足を進める。

「まぁ、こういった山だから、なんか食べられそうな物が見つかるかもしれないからな……」

今の蓮次には、遭難や松茸よりも腹を膨れさせる事が優先だった。

『腹が減っては戦は出来ぬ』この言葉がまさに蓮次を駆り立てられながら、左手で腹を押さえながら蓮次は前に進み続けていた。

すると、蓮次の目に、ある物が飛び込んでくる。それは木の剥き出しになった根元の部分、そこには茸が生えていた。

「なんだか、変わった形してるな。赤だし白い斑点がある」

それは、まるで何処ぞの某配管工に出てきそうな姿形をした茸であった。蓮次はそれに近づきじっと見つめる。

「食べたら大きくなったりしてな……」

茸は斑点が付いており、普通に考えれば誰もが危険ではないか。と判断するだろう。だが、何を思ったのか蓮次は、その茸に手を伸ばそうとしていた。

おそらく、空腹で思考能力も少々やられてしまったのだろう。

蓮次が茸を握ろうとしたその時だった。

「待った！　それ食べちゃ駄目だよ」

「うわっ！！」

突然聞こえた声に蓮次は驚き、茸に触れる前に腰を地面についた。蓮次は首を声がした方に向ける。

「ふぅ、危なかった」

そこには、黄色い髪の上に乗せられた赤い帽子、赤いエプロンと

その下に着ている白いカッターシャツ、そして茶色のスカートを履いた、何処と無く秋を感じさせる風格を持った少女が心配そうに、蓮次を見ている。

「何故止めたんだ。折角の食事にありつけると思ったのに……」

「いや、だってさ。それ毒茸だし」

少女は、毒茸に触れさせないように、声を掛けたのであるが、蓮次はまだか納得がいかないようだった。

「これの何処か毒茸なんだ。綺麗な赤色をしてるじゃないか！」

「いや、普通そんな色の茸は食べないでしょ」

必死に注意をしてくれる少女。しかし尚も蓮次の不満は解消されていないようで、目線は再び茸の方に向けられる。

「でも、白い斑点がついていて、実に美味そうだ」

「いやいや。寧ろ危ないとは思わなかったの？　斑点とかついてる時点でアウトでしょ」

蓮次はまるで少女の言うことを聞かない。これを見た少女は、この少年、蓮次が空腹であるという事に気がついた。

「ちょっとついてきて」

「な、何をする。茸が、茸がぁ！！」

蓮次は斑点のついた茸に必死に手を伸ばそうとする。その姿は、マインドコントロールでも掛けられたのではないかとも思える程、茸に対する思いが強く感じられた。

だが、空腹で力が出ないのか、少女の力が強いのかは定かではな

いが、服の首元部分を捕まれて、すんなりと少女に引き摺られていった。

＊＊＊＊

首元を捕まれた蓮次は、まるで猫のように大人しくなっており、少女に連れていかれていた。

「なぁ、俺自分で歩けるからさ。離してくれないか……」

「まぁまぁ、もうそろそろ目的の場所に着くから」

少女に引っ張られて、左右に立つ木々の間を潜り抜けていくと、紅葉の木が周りに出来ている、一つの空間に辿り着いた。

「おお……これは」

そこは、小さな穴場のような場所である。普通に歩いていては、気がつかないような場所に、その空間はあった。

「こんな場所もあるんだな……」

蓮次が感心していると、少女が奥から何かをエプロンに乗せて運んでくる。それは紫色の先端から中心にいく程、膨らんでいく食べ物、サツマイモである。

「火はいつでも用意できるから、紅葉を集めてくれる？」

どうやら、サツマイモを蒸かして食べようと考えているらしい。蓮次はとにかく食べ物にありつけるという事で、あたりに落ちている紅葉を拾い集めて、一ヶ所に纏める。

一方の黄色の髪の少女は、どうやって着火させたのかは不明だが、集めた紅葉に火を着けていた。しかし、その理由など空腹の蓮次には関係の無い事であった。

その後、サツマイモを大きな銀杏の落ち葉で、何度も被うとそれを着火していた葉っぱの中に放り込んだ。

「少々、お待ちください」

「ああ……。あれ？　何かすでに芋の香りがしないか？」

芋は今、焼いている途中であり、もちろん直ぐに匂いがする筈は無い。だが、確かにその匂いを蓮次は鼻で感じ取っていた。

「なんか、甘いスイートポテトのような、匂いがする」

「あ、それは多分、私の匂いだと思います」

「え、君のか？　ちょっと失礼」

蓮次は、少し少女に近づいて、空気をすくうようにして、自分の方に引き寄せ匂いを嗅いだ。

「本当だ……。甘い匂いがする」

「これは、私の香水の匂いなんです。甘い香りも悪くないでしょ？」

「ま、まぁな……」

芋の香りがする香水に、蓮次は若干苦い表情を浮かべたが、食事を分けてくれる恩人という事もあり、表情を直ぐに元に戻した。

そして、時間が十分程経過して芋が焼けたのを確認すると、二人はあちちと言いながら手にとって、口にサツマイモを運んだ。

「……熱！！」

「でも、美味しいでしょ。この時期はサツマイモが美味しい季節だ

から、甘くて美味しい」
「へぇ、なんかすごいな」

蓮次は芋を口一杯に放り込み、あっという間にそれを平らげた。蓮次は余程、腹が空いていたのか、芋を口に運ぶ動作を止めなかった。その為か芋を喉に詰まらせるというハプニングも見られた。

腹が満たされて余裕が出来たのか、冷静を取り戻した蓮次は、少女の方を見て申し訳なさそうに頭を下げた。

「ありがとうございます。大変見苦しい姿を見せてしまいました」

蓮次は自分の頭の中で、先程のとち狂った行動を思い出したのか、顔を真っ赤にさせる。

そんな蓮次を見て、少女は笑顔を見せてこう蓮次に話し掛けた。

「お腹が空くのは誰でも一緒。空腹で苦しむ人を、私はよく知ってるから……」

蓮次は、そう語ってくる少女の姿を見て、一つの思いを頭に連想させる。

まるで、神様のようだ、と。

「あの……、名前を教えていただきませんか？　俺は丹波蓮次。ずっと向こうの方に建つ紅魔館で働いている者です」
「よろしく、蓮次さん。私の名前は秋穣子（みのり）。豊穣の神様として、この地域では親しまれてる」
「豊穣の神……？」

蓮次は思わず聞き返した。それは、彼女が突然神様を名乗ってきたからである。冗談なのでは無いかと考えた蓮次だが、どうみてもふざけた事を言うようには、思えなかった。

一方の少女、穣子に関しては蓮次の反応を見て、頭を傾げている。

「あの、私何かおかしな事でも言いましたか？」

「いや、そのあれだ……。穣子さんだったか。神様とはどういう事ですか？」

蓮次は再度それを確認する。聞き漏らしたのでは無いか。その点を視野にいれながら、耳を澄ました。

「信仰を得て長く生きるのが、私達神様です。私は豊穣の神であり、この季節は、私の力でより多くの食材が収穫されます」

「……凄いな」

つい先程まで、普通の少女だと蓮次は思っていた。しかし、少女の正体は神様であり、この季節には欠かせない人物であるという、突然のカミングアウトに蓮次は衝撃を受けた。それは、カルチャーショックに似た衝撃だった。

＊＊＊＊

あの後、蓮次は穣子に松茸の収穫を手伝ってもらっていた。蓮次は流石に遠慮気味だったのだが、穣子は「松茸の場所は把握してる」と言った為、「是非ともお願いします」と蓮次は答えた。

既に正午を過ぎて、あと少しでも時間が過ぎれば、夕陽に染まる時間帯である。

蓮次の籠の中には収穫した松茸が、籠の要領の半分程入れられている。だとしても、相当な松茸が手に入った訳であり、蓮次はそれを穣子と山分けした。

「ここを降りれば、麓にまで行けます」

「すまないな。何から何まで……」

蓮次はもう一度、穣子に深く礼をした。穣子は照れ臭いのか、少し顔を紅くすした。

「それでは、私はこれで……あ、そうだ。あなたにこれをプレゼントします。手を出して」

穣子はそう言って何かを取り出して、蓮次の掌（てのひら）の上に置いた。それは先程、言っていた芋の甘い匂いがする香水だった。

「い、いいのか？　こんな物までいただいて」

「はい。これも何かの縁です。取っておいてください」

「ありがとう。それじゃあ俺からも……。こんな物しか無いが、受け取ってくれ」

蓮次はそう言い一粒一粒を、透明な袋で包んだ飴を渡した。透明な袋は、蓮次が常に持ち歩いている物で、相手に渡すときに何時でも包める為に用意している。

「ありがとうございます」

「こんな物しか出せませんが……」

話を終えて、二人は互いに頭を下げて、穣子は蓮次の姿が見えなくなるまで、それを見送った。
蓮次が見えなくなったのを確認すると、掌に置かれた飴を見る。
「なんだか、不思議な力ね。これ……」
そう穣子は呟き、飴を口にくわえて、「おいしい」と一言呟いた。
そのまま、秋風に舞う少し寂しい紅葉の道を歩いていった。

＊＊＊＊

「よっしゃー！　もう少しで帰れる」
蓮次は満面の笑みを浮かべながら、山を全速で降っていく。丸一日ぶりに、山を降りれる事に気持ちが昂っているのだろう。何度か転けた事もあったが、気にすら止めずに走り続けていた。
だが次の瞬間、今まで以上に急な下り坂が蓮次に立ちはだかった。
「うぉっ！！　うわぁぁぁ」
踏ん張りきれなかった蓮次は、体勢を崩し無惨にもその坂から、下へと転げ落ちてしまった。

「し、死ぬかと思った」
下まで転げ落ちて蓮次は、大した外傷もなく小さな傷跡が残る程度で済んだ。籠は流石に全体的に傷む場所が多く見られたが、使用できなくなる程では無かった。
蓮次は、辺りに散らばった松茸を籠に戻すと、辺りを見渡した。

「うーん……？」

蓮次の前方にある物が目に入った。それは、瓦の屋根に木で出来た建造物である。それを見た蓮次は驚いた。その建造物というのは、神社だったからである。

「あれ、あなたは……」

「あら、蓮次。今まで何をしてたの？」

転げ落ちた時の音を聞いて、駆け付けてきたのだろう。蓮次の目の前には、紅白衣装の少女、霊夢と紅魔館の主でどうみても五百歳とは思えない少女、レミリアが立っていた。

「な、何であなた達がいるんだ！」

「いや、何でってここ、私の神社だし」

そう霊夢に言われ、改めて正面の方に行き神社を見る。そこには、見覚えのある光景がある。

木製の階段の上に本殿があり、その手前に置いてある賽銭。周りには神社を囲うように並んだ木々、蓮次はようやくここが、博麗神社だという事に気がついた。

「博麗神社……。山と繋がっていたのか」

それを知った蓮次は、足の力がどっと抜けて、萎んだ風船のように地面に両膝をついていた。

そんな蓮次には目も暮れず、レミリアは籠の中に入っている松茸を覗き込み、胸を高鳴らせていた。

その夜は、松茸の調理法を霊夢に教わっていた為、それをメイドに頼んで松茸の料理が出された。
とは言っても、松茸御飯を作るだけで精一杯だった為、松茸料理は一品のみだった。

館の住人からは好評価であり、「また食べたい」「今度は別の松茸料理が食べたい」などの声が多く出た。そんな環境の中、蓮次は憂鬱な気持ちで松茸御飯を口にした。

第17話「読書の秋」（前書き）

秋です。夜が涼しく過ぎて、風邪をひきかけました。
皆様もご注意を、それと最新話をよければどうぞ

第17話「読書の秋」

パチュリー・ノーレッジ。紅魔の図書館に住む魔法使いである。
彼女は、魔法や錬成といった類いが得意であり、主のレミリアにも一目置かれている。またレミリアとは親しき仲でもあり、互いに愛嬌のある名で呼びあったりもする。

そんな彼女の趣味は勿論、読書である。目の前に本があれば手当たり次第、読み漁っていき気がつけば、本の山に囲まれていると事が多々ある。その為か館一の知識人でもあり、情報関連は彼女に聞けば大抵は解決する。

そして、今日も彼女は本を読み続けている。

「パチュリー様」

朝の図書館にて、一人の少女が頭に付いた羽をパタパタとさせて、紫色の髪の少女がパチュリーに声を掛けている。声を掛ける少女、小悪魔の話など一切耳に届いていないのだろう。彼女の目は、両手に持ちながら読んでいる本に釘付けだった。

「パチュリー様！」
「……」

何度か声を掛けても反応の無いパチュリーに、小悪魔は何度も声を掛ける。やはり言葉を返しては来ない。
仕方無く、小悪魔は彼女の体を揺らして気づかせる事にした。

「あら、小悪魔。どうかしたの？」
「やっと気づいてくれましたか。何度声を掛けても反応がありませんでしたから……」
「あら、ごめんなさい。本に夢中だった」

ようやく気づいたパチュリーであったが、小悪魔に十回以上揺らされて、ようやく反応した所を見ると相当、夢中だったという事がわかる。彼女にとっての読書は、それほど大切ということなのだろう。

「それで、どうかしたの小悪魔」
「はい。実は……」

小悪魔は言いにくそうな表情をしていて、おそるおそるパチュリーに話し掛けているような感じで重そうな口を動かした。

「また、魔理沙さんに本を持っていかれました」
「……そう。道理で管理する本の数が合わないと思った」

パチュリーは、本の管理を小悪魔と共に行っており、本の数やタイトルを常にチェックし、記録をしている。その為、点検時に数が一致しない場合、すぐに有る無いがはっきりする。

「はぁ……、レミィが異変を起こしてから、紅魔館（ここ）も色々と変わった。
レミィは博麗神社に出かける事が多くなり、図書館では本を持っていかれる事がしばし、おまけに変な奴まで館に住むようになった」

何やら不満そうに語るパチュリーと、それを黙って聞く小悪魔。
だが、話を聞いているのは小悪魔だけでは無い。

「パチュリーさん。変な奴とは俺の事か？」

そこには、積み上がった本が言葉を発しながら移動している。のでは無く、そのしたに黒いスーツのズボンが見える。

「へぇ、最近の本は喋るのかしら」

「いやいや、そんな訳無いだろ……第一、俺を呼んだのパチュリーさんだろ？」

本を持ち、積み上げている者の正体は変な奴こと丹波蓮次だった。使用人と言う名の雑用的な存在の蓮次は、呼ばれた仕事の手伝いをする事が、この館での役割であった。

今回は、パチュリーに呼び出されて、本棚の整備を手伝っている。

「まぁ、細かい事は気にしない。さぁ、その本は彼方に持っていって」

「強情な人だな……」

「何か言った？」

「いえ、何も言っておりません」

蓮次はそう言って、指を指された方に積んだ本を持ちながら、移動した。パチュリーはそれを確認すると、先ほどまで読んでいた本をもう一度手に取り、栞代わりにしていた紙の部分からページを開く。

「小悪魔。あとはよろしくお願いしていい？」

「はい、お任せください」

そう言葉を残してパチュリーは、再び本に没頭した。

＊＊＊＊

パチュリーが読む本には、様々なジャンルに分かれている。哲学、物語、料理、エッセイ、魔導書など多くの本を読書する。またこの季節になれば、その機会も増えて一日三冊以上は読んだりもしている。

別に料理の本を読んだからとしても、料理を作る訳では無く、見て楽しむ、又は咲夜か近くのメイドにその料理をリクエストする事も目的の一つである。

魔導書は、彼女の懐に常に携帯されていて、普段は殆ど使用しない。また図書館の奥には、その類いの本が数多く存在している。

そして、その数多くある本の中から、パチュリーが現在、没頭する本はある種の物語、ただしファンタジーでは無くもっと人間味がある話である。

内容は四人の少年が、ある事を切っ掛けに汽車の線路や沼地を越えて、旅をするという話であった。

冒険と友情をテーマにした内容は、パチュリーの心を釘付けにしている。

「パチュリーさん、一歩も動かないな」

「しっ、駄目ですよ。今のパチュリー様は真剣そのものなんですから……」

小悪魔は、常にパチュリーの補佐を十分にこなしている。長い間連れ添っているのか、使い魔としての気配りも申し分無い。

そのお陰で、パチュリーは静かに本を読めるという事だ。

「ふぅ……」

どうやらパチュリーは、本を読み終えたらしく、ページを閉じて机に置くと、軽く背伸びをする。

長時間、本に没頭していた為、窓からは昼の白い光では無く、黄昏時の朱色の斜光が図書館の紅い地べたを照らしている。

秋の季節になるにつれて、日が沈む時間が尚更早く感じるのは、仕方が無いとしても、朝から一冊の本を読んでいたパチュリーにとって、充実した一日だったのかもしれない。

「お疲れ様です。紅茶をどうぞ」

「ありがとう。……やっぱり貴方は気が利くわね」

「いえいえ」

パチュリーはそう小悪魔を褒めると、カップから少し湯気が立っている紅茶を、口に運ぶ。

「小悪魔。今日一日で館の中で何か変化はあった？」

「変化、ですか？　特にこれと言った事は無いと思います。メイド妖精が廊下の壺を割ったり、妹様がそのメイド妖精と弾幕ごっこを始めたり、図書館に魔理沙さんが入ってきたり、それを防ごうとした蓮次さんが、マスタースパークで返り討ちにあったり……」

「……もう結構よ。それで、今日の本の被害は？」

本を読んでいる間に、色々と館が騒ぎになっていた事に、今気づいたパチュリーだったが、それよりも魔理沙の本の被害について、聞くのが優先だった。

「今日は、どうにか魔理沙さんも引き返してくれました。本の被害も無しです」

「そう、珍しい事もあるわね」「蓮次さんが交渉して、どうにかなりました」

交渉など必要なのかと思うかもしれないが、魔理沙を相手とすると、解決する際に条件を持ち込まれる事がある。

勝負に勝てなかった蓮次は、本を貸す代わりにお気に入りの懐中電灯のスペアを渡すと、大層喜び跳びはねながら帰っていったと小悪魔は話した。

「お疲れさまです」

魔理沙の件もあり、を夕方まで片付けを行っていた蓮次が、本棚の仕事を終えて、本棚と本棚の間の通路から現れる。

「あら、ちょうど良いところに、ちょっと来てくれる?」
「はい?」

出てきた蓮次を、手招きして呼び出す。それを見て蓮次はパチュリーと少し、距離を置く位置に立つ。

「別に怒らないから、もう少し近くにきて頂戴」
「は、はぁ……」

パチュリーの目の前にまで、蓮次は近づいてくる。するとパチュリーは先程読み終えた本を、蓮次に渡す。

「貴方は、本を読むのは好きかしら?」
「へ……、まぁ普通かな。ただあまり進んでは読まない」
「なら、これを貸してあげるから読みなさい」
「あ、ありがとうございます」

突然、本を渡されて戸惑った顔をする蓮次だったが、折角の借り物という事で受け取った本を片手に持ち、「今日の仕事はここまで。あとはゆっくりしてていいわ」と言われ、蓮次は「失礼しました」と言い図書館から出ていった。

＊＊＊＊

「俺、本を読むのは苦手なんだよな……」

地下の自分の部屋に戻り、借りた本を机の上に置くと、そう呟く蓮次。だがパチュリーが貸してくれた本だけあって、読まない訳にはいかなかった。

「もし、感想とか聞かれたら嫌だしな。綴(つづ)りだけ読むか……」

蓮次はそう言って、机に置いていた本を手にで持ち、椅子に座ると最初のページを開いた。

「蓮次。居る？」

それからしばらく時間が経ち、同じ地下の別の部屋に住むレミリアの妹、フランが蓮次と書かれた板のぶら下がった扉をノックする。

いつもなら、蓮次が扉から顔を出して「あんまり夜、行動してたらお嬢様に怒られるぞ」等の声が返ってくる。

しかし今日は、何度かノックするも、蓮次は姿を現さず、それどころか反応が一切無い。

「寝ちゃったのかな？」

不思議に思ったフランは、手すりの部分を握り、回してみる。すると扉は開き、部屋の中に机に懐中電灯を置き、スイッチを蛍光灯にして辺りを照らし、椅子に座る蓮次の姿がある。

「蓮次。どうしたの？」

声を掛けるフラン。だが蓮次から返される声は無い。だが、代わりに別の音が聞こえてくる。それは人がすすり泣くような声だった。フランはその声が、すぐに蓮次の声だという事が分かり、急いで近寄る。

「大丈夫？　何処か痛いの？」

何故か泣いている蓮次に、心配そうに声を掛けるフラン。それに対して蓮次はパチュリーから借りた一冊の本を手に持ち、読みながら涙を流していた。

「うぅ……。良い話だ……」

第17話「読書の秋」（後書き）

本の内容で、タイトルが判った人は是非感想をお願いします。かなり昔の本で、映画にもなっています

その映画すら、かなり前のやつだったりします

第１８話「教官、紅美鈴」（前書き）

どうも、揚ポテです
今回も短めですが、閲覧していってください

ちなみに、前回のパチュリーが読んでいた本は『スタンド・バイ・ミー』です

映画のテーマソングは未だに健在ですからね……にしても、感想でスタンド・バイ・ミーを知ってる人が多くてビックリしました

というわけで、いってらっしゃい（・ω・）ゞ

第１８話「教官、紅美鈴」

紅魔館の外にて、新人の従業員が集められた。

レミリアの指示によるもので、外に集められた者は、館の門番である紅美鈴を中心に円を描き、美鈴の方に体を向けている。

「今日、貴方達がここに集められたのは、他でもありません」

美鈴は、一度、左右に歩いて皆の方を見ると、拳をぎゅっと握りしめて力強く言葉を発する。

「貴方達にはこれより、新人としての訓練を行ってもらいます。お嬢様より、私はその訓練の担当をするように、命じられています。ですので、貴方達はこれより私の指示に従って、訓練をして頂きます。つまり……私がこの部隊の教官と言うわけだ！」

美鈴は何かに影響されたのだろう、教官という響きに興奮している。それを新人の従業員達は、唖然としながら見ている。

「ねぇ……本当にこの人で大丈夫かな？」

「さぁ……」

二人のメイド妖精が、美鈴の行動を見て、こそこそと話し始める。

だが、それを見ていた美鈴は、ギロリとその二人を見ると、手から気功のようなものを生成し、二人の間に向けて放った。

「ひっ…」

当ててきた訳では無いが、二人は美鈴の攻撃に、体を震わせる。

「今度、こそこそと会話をしていたら、一回休みは覚悟してください」

美鈴は笑顔でそう二人に話す。だが二人にとって、その笑顔は恐怖に近いものであり、上下の関係について思い知らされたといえるだろう。

「は、はい！！」

二人は震えた声を抑えながら、美鈴に返事をした。

「うむ、よろしい。それじゃあ早速始めるとしましょう」
「ちょっと待ってください」

その時、新人従業員のうちの一人が挙手をする。頭にニット帽を身に付けている少年、蓮次である。彼もここに来て半年も満たない為、新人という立場にいる。

「はい、蓮次さん。どうかしましたか？」
「ちょっと聞いていいですか」
「はい、どうぞ」
「今から訓練をするんですよね」
「はい」
「本当にするんですね？」
「何度言われても、私は判断を変える事はしません」
「でもさ……」

蓮次は一度、間を開けたあと、美鈴にこう言った。

「吹雪いているんだが……」

そう話してくる蓮次のニット帽には、既に多量の雪が吹雪によって白くなっている。白色のニット帽に僅かながら映る灰色の布が見える。

一方の美鈴の軍隊のような緑の帽子の上にも、雪にの積りにより、小さな山が出来ている状態だった。

季節は十二月の始め、幻想郷は外の世界から来る冬の前線により、吹雪に見回られていた。

本来ならば、これだけ環境が悪い中で外で訓練をするとは、あまり考えられないだろう。しかし、指揮を取る事に張り切っていた美鈴は、このまま訓練を行おう構えを示しており、それを止めれる者は、今現在、一人としていなかった。

「本当にやるんですか？」

「教官に二言は無いです。やりましょう」

「……わかりました」

美鈴はそう言うと、メイド妖精の方を向く。メイド妖精の方も黙って頷くと、美鈴は大きく息を吸うと、大きく声を出した。

「これより、訓練を始める。新人だからと言って、休ませる訳にはいきません。厳しくいきますよ」

「はい……」

吹雪によって、皆の返事が霞んで聞こえてくる。寒さで声が出ないというのも一つの原因である。

「体を暖める為にまずは走り込みを行います。湖の周りに沿って走ってください」

美鈴の言葉により、新人の従業員による訓練が吹雪の中行われた。紅魔館から湖の外に繋がれた橋を渡ると、十名の従業員は美鈴の後ろに付き、湖の周辺を走り始めた。

「いやー、走るのって爽快ですね。ずっと門番ばかりしているのも疲れますから、息抜きにもなります」

先頭に立つ美鈴は、吹雪をもろともせずに湖畔を駆ける。その姿からは、生き生きとした少女そのものだった。――だが、元気であるのは、美鈴ただ一人であり、後ろを運ぶ他の者はと言うと……。

「ひぃ、寒いです」

「これじゃあ、この吹雪だけで一回休みになっちゃいますよ……」

「も、もう走れません……」

あまりの理不尽さに、根を上げるものが多数、美鈴の驚異的な忍耐には誰一人として付いてきていなかった。

「蓮次さん……、どうにか美鈴さんに止めて貰えるように言ってくれません……か？」

一人のメイド妖精が、そう蓮次に声を掛ける。しかしその声は返ってこない。

「蓮次さん……？」

メイド妖精が、蓮次の方を向くとそこに蓮次の姿は無く、後ろに目線を置くと、そこには雪と同化する寸前の蓮次の姿があった。

＊＊＊＊

「白一色ね。今年も……」

館にある大部屋の窓から、レミリア湖畔を見つめている。小さく吐息をすれば、窓には吹き掛けた場所に白く霧のようなものが残る。レミリアはその窓にスカーレットラブと書いて、クスクスと笑う。

「来年は、波乱の一年になるような気がする」

「波乱の一年……ですか？」

レミリアの隣で、常に付き人のような仕事をするメイド長の咲夜が、言葉を返す。その声にレミリアは咲夜の方を向き、口を開く。

「ええ、運命がそう告げてる」

「運命……？」

暖炉から燃える火の音が、沈黙する二人の間にバチバチと音を立てている。

「騒がしくなる。もうじきね……」

レミリアが言ったその時である。――バンと音を立てて扉が開き、二人がその方に目をやると、そこには一人のメイド妖精が息を切らせながら、立っている。

「何事かしら？　ノックもしないで……」

「すいません。ですが、緊急時ですので……暖炉を使わせて貰ってもいいですか？」

「構わないけど、どうかしたの？」

「はい、実は……」

メイド妖精が、事情を話し始めようとした瞬間、「早く、暖炉に。」と言う声が聞こえ、言葉が切れる。

「美鈴？」

その声は、門番の美鈴のものだった。声がすると同時に美鈴を含む数名が、部屋に入ってくる。彼女は、真っ青な顔をした蓮次を背負い、他のメイド妖精が二人がかりで、凍り付いた仲間の手足を持ち、以下四名の従業員が暖炉に運び込まれた。

「美鈴。これは？」

「すみません。少し張り切り過ぎました。訓練になると思い、吹雪の中で走り込みをしようと思ったのですが……」

外からはビュービューと吹雪いており、窓がカタカタと小さく音を立てる。雪は力を増し、強い風を吹かせている。

大雪の中で走っていた美鈴は疲れが全く無いように見える。しかし、他六名のメイド妖精の息を切らし、寒さに震えている姿を見る

と相当、外の訓練が厳しい環境だったという事が、自ずと見えてくるだろう。

「訓練を延期するという選択肢は無かったの？」
「全く考えてませんでした」
「そう……なら仕方無いわね」
「良いんですか？」

美鈴のキッパリとした言いように、レミリアはそう返して椅子に座る。

咲夜はその会話を少し気にしていたが、館の日常茶飯事と判断し、能力で瞬間的に洗面器に湯を入れて、タオルを濡らすと蓮次と三名のメイド妖精の顔に被せた。

その一時間後には全員回復し、人間である蓮次にも、人体による損傷をパチュリーに調べて貰い、何処も問題が見られなかった為、そのまま四人は仕事に戻った。

三人のメイドは、あまりの吹雪に気力を失い、寒さによって苦しめられていた。蓮次に関しては「気が付いたら意識が無くなっていた」と言う。かなり危険な状況だったのかもしれない。

ちなみに美鈴はあの後、皆に「私は教官としての判断に背き、皆を危険な目に会わせてしまいました。申し訳ありません。」と謝罪の言葉を述べて、訓練の話題はこれ以降は無くなると思われていた。

だが実際は、その僅か三日後に訓練が再び行われて、吹雪の後、アイスバーンと化した雪が、美鈴を除く新人全員が苦しめられる事

となるのは、また別の話である。

第１９話「新年と手紙と」（前書き）

ふぅ……

そろそろ異変に進まなければ……

第19話「新年と手紙と」

どうだ蓮次、元気にしているか？
こちらは特に変わった事は無い。しいて言えば食事代が一人分浮いたぐらいか。とにかく元気でやっている。
幻想郷での生活はもう慣れたか？　こちらとは勝手が違うから、最初のうちは色々と戸惑う事が多いかもしれない。
だが、お前が幻想郷行って早四ヶ月だ。そろそろ生活にも慣れただろう。
とにかくそちらの生活に頑張って専念してくれ。疲れたからと言って、投げ出しちゃ駄目だからな。
あと、いくつか品を贈っておいたから目を通しておくといい。寒いかもしれないが、頑張って生きてくれ。
丹波勝義より

＊＊＊＊

「なんじゃそりゃぁ！！」　蓮次は一枚の手紙を読み終えた途端、それを地面に向けて力の限り叩きつけた。
手紙の送り主にはは丹波勝義と記載。つまりは蓮次の父親からの手紙である。

「何がどうなってるんだ！　まさか、親父も八雲紫とか言う奴のグルか？」

本来ならば、表の世界で行方不明になっている蓮次に、家族から手紙が届く筈など無い。

事の始まりは、館に届けられた一つの荷物である。

紅魔館の門に置かれていたのを、門を担当していた美鈴が見つけた。そこにあったのは、茶色のダンボールであり、危険物の可能性もあった為、レミリアに報告をした。

その後、ダンボールの上に貼られた紙の場所には、丹波蓮次へと書かれていた事に気がつき、蓮次への荷物と判明。蓮次は恐る恐る、ガムテープを剥がしていき、中身を開けると一番上にその手紙が置かれていた。

その荷物が、蓮次の父親からからの物である事に気づくには、あまり時間が掛からなかった。

「なんで、親父が俺の事情を知ってるんだよ……。第一どうやって」

父親の手紙の語句の中に、『幻想郷』と書かれた部分があり、手紙の中身を見ても、明らかに蓮次の状況を把握している内容である。

それこそ、仕組んだ本人であるかのように……。

「仕方無い……とにかく中身を確認しよう」

蓮次は一度、自分を落ち着かせ冷静になると、ダンボールに入った荷物を一つずつ出す。丁寧に荷物には一つ一つ、割れない為のプチプチカバーが覆われている。

蓮次がそのうちの一つを取りだすと、そこから先程とは別の紙が、地面に落ちる。

「なんだ？」

突然出てきたそれに、蓮次は手を伸ばして拾うと、そこには『贈り物の説明書』と書かれていて、数枚の紙がホッチキスで止められていた。

「……読んでみるか」

蓮次は、先程よりもやや慎重に、その説明書の一ページ目を捲った。

＊＊＊＊

取り合えず、ここには簡単な荷物について教えておく。

荷物はカバーで覆った物を四つに纏めてある。まずは、そのうちの赤い印を着けた荷物を出して欲しい。

その中身には、日用製品が入っている。確認してくれ。

＊＊＊＊

「成る程……」

蓮次は赤い印の入った荷物を取り出して、中身を調べるとそこには様々な品が入っている。

手動で電池要らずの懐中電灯や、ティッシュペーパーのセット五箱、マッチ棒や蝋燭、更には油までもが備わっていた。

「あれだな。こう言う事だけは、準備が良いんだな……」

密かに感心しながらも、蓮次は次の説明を読む。

＊＊＊＊

次は青い印の付いた雑誌程の、小さい荷物を開けてて欲しい。

その中には生活費と家計簿が入っている。自分で確りと金の管理が出来なければ、金は直ぐに無くなるからな。小まめに記載すると良い。

あと、序でに料理のレシピの本も置いておいたから、好きな時に使いなさい。

＊＊＊＊

「なんだこれ？」

封筒の中には、御札が入っている。しかしいつも見るような、御札とは訳が違い縦横両方に大きく、大黒天と書かれた一円札だった。

蓮次が更に説明を読んでいくと、『一円札は幻想郷での価値が千円程である。大正まで使われていた金をそこでは使う』と書かれていた。

「え、じゃあ野口さん使えないのか……」

蓮次がいつか使うと考えて、財布の中に忍ばせておいた四枚の千円札は、この世界では使用出来ない事を知りその瞬間、紙切れと化した。

「あ、だから神社に千円入れた時も、あまり効果が無かったのか……」

その時、蓮次は紅魔館の採用試験の朝、博麗神社の賽銭箱に一枚の野口英世を投げた事を思い出した。

「巫女さんから、御札が飛んでこない事を祈ろう……」

蓮次は若干の寒気に身を震わせながら、説明書の次のページを捲る。

＊＊＊＊

黄色の印のボックス型の荷物がある。

そこにはいつ、何が起きても良い様、非常食を箱に積めておいた。確認するといい。

＊＊＊＊

蓮次は書かれてある通りに、ダンボールの中にある、一番場所を

取っている非常食の入った箱を開ける。

「これは、カ□リーメイトじゃないか！」

中には非常食となる物、乾物系や缶詰、粉末状のスープやコップ、ペットボトルに入った水など、いざと言う時の物が多数入っていた。携帯の小さなコンロもあり、火には困らない。

だが、ここに来て蓮次は、ある事に気がつく。

「あれ？　今の俺は、普通に生活してるし、必要なくね？」

紅魔館で、働いている分、食事や寝床について困る部分は無い蓮次にとって、非常食は不必要に思える。

「あ、でもクビになった時の為には、必要か……」

だがそこは、念には念をという事で蓮次は自己解決させるに至った。

「さて、次で最後の荷物だよな……。他に何かを入れる必要なんてあるのかな？」

蓮次はダンボールを覗きこむ。そこにあるのは、カバーで覆った長い棒のようなものが残ってある。

「なんだ、こりゃ……」

中身のそれに、不思議に思った蓮次は、最後の説明に目を通した。

＊＊＊＊

いよいよ説明も最後となった。

次のカバーで覆い被せた細長い物がある。荷物の中でも一番大切な物があるから、取り出す時には十分注意してほしい。

＊＊＊＊

「……」

中身を見た途端に、蓮次は言葉が出なくなる。

細長い物の正体。それは丹波家の家宝なのだろう。日本刀が納められていたのだ。

「何を考えているんだよ……親父は」

鞘を抜くと、玩具では無く真剣である。もちろん殺傷能力だってあるだろう。

もし、表の世界でこの事が公に知れ渡れば勿論、銃刀法違反の罪に問われる。だが、幻想郷であるが故にに法は届かない。

恐らくは許されるとまではいかないが、持つことだけは禁止されて無いだろう。

「まぁ、いいか……あまり深くは考えないでおこう」

蓮次は刀をダンボールの中に戻すと、ベッドの下の空間にそれを仕舞った。そして何事も無かったかのように、白色の上下のパジャマから、黒いタキシードに着替える。その最中蓮次は、一つの疑問が出てくる。

「あれ、そう言えばこの荷物って誰が持ってきたんだ？」

蓮次はダンボールを仕舞ったベッドの方に一度、視線を送る。もし、父親が持ってきた物だとすると、基本的に蓮次を見捨てた事になる。そうでなくても荷物を贈ってきた時点で、放任させている事になる。

「まさか、親父に見捨てられたんじゃ無いだろな……俺」

やや不安な気持ちになりながらも、蓮次は黒いスーツに身を纏い、部屋の扉を開けた。

＊＊＊＊

蓮次は階段を登り、紅色の廊下を渡って館の三階、一番奥のレミリアの部屋に向かう。一先ず、荷物についてレミリアに聞こうという魂胆である。

蓮次は扉の前で一度止まり、コンコンと二回ノックをして「丹波蓮次です」と声を出す。

「入っていいわよ」

中からレミリアの声が聞こえると、蓮次は「失礼します」と言っ

て扉を開け部屋に入りる。部屋の一番奥には、椅子に座り本を読むレミリアの姿があった。

レミリアは本に付箋をして閉じると、蓮次の方を見る。

「今日は、何の御用かしら」

「すいません。少しばかり、時間をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「構わない」

蓮次はレミリアに、今朝届いた荷物について、詳しい情報を知るべく質問する。

「荷物？　ああ、今朝貴方宛に届いた荷物の事ね。あれなら美鈴が最初に見つけたから私も詳しくは知らないわ。美鈴なら何か知ってるかも……」

「そうですか。ありがとうございました」

蓮次はそう言い終えると、急ぐようにして部屋を去った。

「何なのかな？　あんなに慌てて……」

部屋から出ていった蓮次の方を、レミリアは一度気にしつつも付箋をしていたページを開き、再び読む。

＊＊＊＊

蓮次は荷物について、一番知っているであろう美鈴の場所を訪れるべく、館を抜け門の前に出る。

正午の美鈴は、うとうととしている事も暫しであるが、この季節までなると寒さのお陰か、集中して仕事をしている事が多い。
その為、今日は普通に仕事を行っていた。

「あれ、蓮次さんじゃないですか。お出掛けですか？」

門の大きな鉄の柵の様な扉とは別に設備された、従業員用の扉から出てきた蓮次に美鈴が声を掛ける。

「いえ、今日は美鈴さんに様がありまして」
「おや、私にですか？」

蓮次は、レミリアに質問した時と同じように美鈴に情報提供を呼び掛けた。門の仕事をしていた美鈴なら、誰かに会った可能性もある。

「……それで、門の前には誰かいませんでしたか？」
「いえ、誰も見ませんでした」

答えはあっさりと返ってきた。まるでその質問を待っていたかのような美鈴の返事に蓮次は、空振りしたかのように体勢を崩した。
「大丈夫ですか？」
「あ、ああ……大丈夫だ」

鼻を押さえながら立ち上がり、蓮次は苦笑いをする。そして念の為にと美鈴にもう一度、荷物の話をする。

「本当に誰も見てないのか？」
「はい。ダンボールは私が来たときは、既に置いてありましたから

……」

美鈴の言葉は本当らしく、彼女が来た時には既に荷物が置いてあり、それを館内に届けただけだと言う。

蓮次は結局、荷物の流通先がわからないまま、仕事に戻る事となった。

ただ、一つ分かった事、それは蓮次の父親が、幻想郷の存在を知っていたという事だ。

また、蓮次が幻想郷で暮らしているという名目で、荷物を送り届けてきた事が蓮次にとって一番の驚きだった。

「……親父、まさか、マジで捨てられた事は無いよな……」

父親の疑惑の仕事に身が入らなかった蓮次は、この後高値の壺を掃除中に割り、雑用の階級が下がったそうだ。

第２０話「赤い悪魔」（前書き）

またしても間隔があいてしまった……

いつも通りの長さです

第２０話「赤い悪魔」

赤い悪魔をご存知だろうか？

それは全身に返り血を浴びたような服とズボン、そして帽子。更には背中に背負われた無数の袋を持っている。

表情は白い髭により、はっきりと確認する事が出来ない。老人でありながら体は大きく、まるで魔神の如くとまで詠われている。

十二月の特定の日に、子供のいる家に忍び込み、謎の行動を起こして次の日になれば、子供達は一斉に叫ぶ事から十二月の赤い悪魔とまで呼ばれた。

赤い悪魔は、一人ではなく世界に飛び火しており、日々子供の姿を監視しているという。

「……これが、赤い悪魔に纏わるお話よ」

レミリアは得意気にそう部屋に集まった数名の館の住民に、そう言う。

長い一つの椅子に皆が座っており、メイド妖精達は体をブルブルと震わせ、美鈴は挙動不審になっている。逆にパチュリーの場合、その話を木にする事無く本を読んでいて、咲夜はいつも通り部屋の仕事をしている。

「で、どうだった蓮次」
「何故俺に振る……」

辺りを見渡していたレミリアは、長い椅子の扉に近いメイド妖精達が座る位置にいる蓮次に感想を聞く。

「いや、だって。蓮次が一番興味無さそうにしてたから……感想を聞きたいなと思ってね」
「いや、感想って言われてもな……。その赤い悪魔ってさ」

赤い悪魔心当たりがあるかの様に、蓮次は少し間を開けて話す。

「……サンタクロースじゃないのか？」

その言葉に、メイド妖精や美鈴が「なるほど」と声を揃える。どうやら、気付いてはいなかった様だ。
ただし、パチュリーと咲夜は、蓮次同様に気付いていたのか反応は特に無く、本を読んだり掃除をしたりしている。

「そう、その赤い悪魔。私と並んで赤を名乗るなんて、五百年早い。そうは思わない？　蓮次」
「だから、俺に振らないでください。第一、サンタに赤い悪魔なんて言う人、初めて聞いたぞ……」

蓮次は、レミリア些か戸惑い気味で言葉を返している。レミリアが蓮次をからかっているのか、それとも真剣にそれを話しているかは、本人以外はわからない。
だが大方真剣に語っているレミリアを見た感じであれば、後者が正しい。

「そして、太陽暦でいけば明日がその日、聖ブラッディディよ」
「キリストさんに怒られるぞ……」

太陽暦を用いれば、明日は二十四日であり、本来外の世界ならばクリスマスイブと呼ばれるキリスト生誕の一年前であった。

だが、ここでは太陽暦の他に、旧暦つまりは太陰暦が使われている場合がある。しかし、西洋圏であった紅魔館にとっては余り関係の無い話だろう。

「あ、そう言えば外ではもうクリスマスシーズンだったか……」
「ああ、まぁ……」

蓮次は染々とした感じで一人呟いた。クリスマスシーズンである外の世界に対して、幻想郷では霜月であり旧暦の表記上は十一月である。その為外から来た蓮次にとっては、寧ろ紅魔館で扱う太陽暦の方がしっくり来るだろう。

「それで、赤い悪魔についての話だけど」
「またその話ですか？」
「ええそうよ。私も色々と考えてね、一つ考えたの。どうすれば赤い悪魔を越えられるか……」

突然、サンタを越えたいという発言に、蓮次は若干苦い表情を浮かべる。

「」

レミリアがそう言うとメイド妖精と美鈴が一斉に、レミリアの方を見る。

パチュリーは小悪魔の運んできた紅茶の入ったカップを手にとって、「また始まった」と呟き紅茶を口に注ぐ。
咲夜の場合は、その発言を聞いて直ぐにレミリアの隣に立ち、何かしらの準備をしていた。

「あの……、お嬢様」

準備を終えたのか、隣にいた咲夜がレミリアに恐る恐る声をかけた。

「何かしら、咲夜」

「その、サンタクロースを捕獲すると言いましたね」
「ええ、赤い悪魔を捕まえると言ったわ」

レミリアは、サンタクロースを赤い悪魔と訂正してまで言い通す姿を見れば、それをかなり意識しているようにも見える。とにかく赤い悪魔でなければ、本人は駄目なようだ。

「捕獲って明日の夜ですか？」
「勿論、私自らそいつを捕まえる。そして私こそが真の赤い悪魔である事を証明して見せる」

かなり強情ではあるが、レミリアからはやる気が染み渡ってくるようである。その姿は無邪気な少女とも取れるだろう。

「私、門の仕事がありますのでこれで！」
「あ、俺外の様子を見てくるのでこれで……」

虫の知らせでも聞いたのか、机から立ち上がった美鈴と蓮次はペコペコと頭を下げながら、競歩で部屋の出口がある扉に向かった。

だが、それを見逃さまいとメイド長の咲夜は『ザ・ワールド』を用いて、時間を止める。

時間が動いた次の瞬間、扉の前には無数のナイフが刺さっており、扉の前にまで来ていた二人は、その扉を見た瞬間恐怖する。

「ひっ……」

「二人とも……、ちょっと表に来てくれる？」

「つ、通行料の飴を渡しますから……通してください」

蓮次は咲夜に、精製した飴を渡し逃れようとする。咲夜は渡された飴を口に運ぶと、「用件はそれだけかしら？」と蓮次に言った。

「なん……だと！」

「お嬢様。二人を借りていきます」

「……ええ」

咲夜の言葉にレミリアは、ただただ頷いた。

＊＊＊＊

咲夜は美鈴と蓮次を連れて紅い廊下に、最初の角を曲がると二人の方を見る。

「さて、早速二人に相談したいのだけど、時間はあるかしら？」

「わわ、私には門の仕事が……」

美鈴が話す前に、咲夜は人差し指を窓の方に向ける。窓の先には、ヒューヒューと音を立てながら吹雪いている。

「門番なんて、出来ないでしょ、美鈴？」

「……はい。そうでした」

美鈴をとの話を終えると、次に蓮次の方を見る。蓮次が先程口走った言葉、「外の様子を見てくる」つまりは美鈴が「門の仕事に戻る」と言った状況と全く同じである。

それをしっかりと覚えていたのだろう。咲夜は蓮次の顔をじっと見ており、蓮次の方はと言えば目を泳がせている。明らかに軍配は咲夜の方に上がっていた。

「外に用事なんてありませんでした……」

蓮次は結局、咲夜のじわじわと攻める沈黙を破る事は出来ず、断念したのである。

「それじゃあ早速だけど、二人に話があるからちょっと来てもらえるかしら」

咲夜はそう言うと、先程まであった筈の廊下が一瞬にして一室にと姿を変える。

「な、なんだ。さっきまで廊下にいたんじゃ……」

突然の変化に蓮次は驚いていたが、美鈴はそれほど驚いていない。

「これは、咲夜さんの能力です。蓮次さんは余りよく知らないから、無理もないです」
「まぁ、そういうこと」

咲夜には、館内を拡大または縮小する事が可能であり、その事を知らない蓮次は驚くのも無理は無かった。逆に咲夜との付き合いが長いと思われる美鈴は、それすら普通であり、余り驚かなかったのである。

これも、新人である蓮次とベテランである美鈴の、差とも言えるだろう。

「なんか、色々と終息が着かなくなってきてるんだが……」
「気にしたらお仕舞いです」

美鈴は、まるで何事も無かったかのような顔で蓮次の背中をバンバンと叩く。だが美鈴の力が強いのか背中を叩かれた蓮次は、両膝、両手を地につけて「ごほごほ」と吐くような仕草を見せる。

「だ、大丈夫ですか？」
「ああ、まぁ……」
「そろそろ本題に戻っていいかしら？」

話の流れを切られたせいか、咲夜は不機嫌そうな顔で二人を睨む。二人はその表情を見て、直ぐに姿勢を正した。

「お嬢様は、赤い悪魔。つまりはサンタクロースを捕獲したいと言った」

「で、でも咲夜さん。サンタクロースなんて実在しないんじゃないですか？」

美鈴がそう言うと咲夜は腕を組み、美鈴を指差す。

「そこなのよ。サンタクロースなんて、実際は出てこない。子供達の夢を与える為に、作られたものだと思う」

咲夜の言葉の通り、サンタは一応アイスランドに住んでいると言われている。しかし、実際世界各地をアイスランドから態々をトナカイで空を駆ける訳では無く、プレゼントを配る訳でも無い。

要はサンタとは、『子供が住んでいる各家に、一人は居る』ということだ。

だが、そんな会話を、首をかしげながら聞いている者が一人いた。

「……え、サンタってアイスランドから、世界をトナカイで駆けてるんじゃないのか？」

その言葉に、一瞬周りの空気が凍りついた様な静けさを迎える。その言葉を発したのは、他でも無い蓮次だった。

咲夜と美鈴は、二人顔を揃えて蓮次の方を見る。

「え、俺何か間違った事でも言ったか？」

「えっと……断っておくけど、サンタは実在してないからね」

咲夜がそう言うと蓮次は、衝撃的な場面にでも遭遇したかのような表情をして、一度窓の方を見てから、咲夜の方に再び視線を移す。

「……でも、アイスランドに行けば……」
「貴方って意外にピュアなのね……」

咲夜は蓮次の言葉にため息をついて、そう言葉を返した。

どうやら蓮次は、サンタを未だに信じているらしく、咲夜も説得するのに少しばかり時間が掛かった。そして十分の話し合いにより、漸く蓮次にサンタは『一応』架空であるという事を認知させた。

＊＊＊＊＊

咲夜は、二人にレミリアのサンタの件について、話を進める。

「お嬢様がああ言った以上、サンタを実際に捕獲するしか無いわ」
「確かに、相手はあのお嬢様ですからね……」

咲夜は長年、とは言っても十年近くではあるが、レミリアに付き添ってきた。美鈴に関して言えば更に長く仕えている。

蓮次の様な仕えて浅い人間の場合であっても、薄々理解出来る事。それはレミリアが、自由主義であるという事である。一見、平和そうに見える言葉ではあるが、従者の身からすればそれ故に苦労する場合もある。

「じゃあどうするんですか？　サンタは存在しないんだろ……」

少し気の抜けた声でそう話す蓮次。サンタは存在せず、プレゼントは身内が渡していたという事を知り、少しショックを受けていた。

「その通り、サンタなんて実在しない。それで一つ提案があるの…」

美鈴と蓮次は声を揃えて、「提案？」と言って頭を傾げる。咲夜はそれに頷くと、二人の顔を一度見てから口を開いた。

「誰かに、その赤い悪魔に変装してもらいえないかしら？」

第２１話「サンタ……」（前書き）

申し訳ない。今月はマジで色々とありました。

気がつけば、先週は一度も投稿してなかった。筆が進められなかったという理由もありますが……。

とにかくごめんなさい。一先ず更新します。

第２１話「サンタ……」

クリスマスパーティーが紅魔館の関係者の間で、執り行われる事になった。

時刻は夕刻を過ぎ、吸血鬼のベストコンディションとも言える夜を迎え、館内でのパーティーの準備も万端であった。

エントランスの中心には、男性の平均身長の四倍程の高さをしたクリスマスツリーが飾られている。

飾りは昼間に咲夜、美鈴、蓮次やその他のメイド妖精達によって作られたもので、大人数が協力した甲斐もあったのか、ツリーは皆が満足のいく姿に仕上がった。

そのツリーの姿を見てレミリアは「素晴らしい出来ね」と絶賛して、それを見上げている。

「そう言って頂けると、皆も喜びます」

隣にいる咲夜は、レミリアの賛美の言葉に嬉しそうな表情をし、近くにいたメイド妖精達にグッドサインをする。咲夜の手のサインを見たメイド妖精達は、ほっと胸を撫で下ろし安心したのだろう、各々が微笑む。

「さて、館の会場の方に行きましょう」

「はい。お嬢様」

レミリアの言葉で、周りで寛いでいたメイド妖精達も、少しずつ動きだし、館の中で最も広い部屋であるホールの方へ移動する。

＊＊＊＊

館の中でもホールは一番広く、大人数で行うパーティーなどに最適な場所である。五百人以上は収容出来るであろうそのスペースは、普段掃除がされているにも関わらず、殆ど使用する機械がなかった。その為、今回のパーティーでは必ず使用するべきである、と提案され採用された。

「いつ見てもここは広い。使わないと勿体無いわね」
「そうですね。折角ですから、月に一度くらいはここでパーティーなんてどうでしょうか？」
「そうね。これ程人数がいるんだし……」

レミリアが辺りを見渡していくと、そこに映るのは従者であるメイド達の楽しそうに会話する姿や、数多くある丸テーブルの一つに、椅子に腰掛け本を読むパチュリーの姿、慌てて逃げるメイド数名を、後ろから「あはは、食べちゃうぞー！」と言って追いかけるフランの姿がある。

だがここに来て、何かしらの違和感を感じたのか、レミリアはもう一度辺りを見渡す。

「誰か……足りなくない？」
「美鈴の事ですか？　彼女なら、先程ホールを出ていきました」
「いや、美鈴もそうなんだけど……蓮次はどうしたの？」

見渡していくうちに、ようやくその違和感に気づく。つい先程ま

で、咲夜達とツリーの飾りつけをしていた蓮次は、ホールにてその姿を確認する事が出来ない。

「蓮次でしたら、風邪を拗らせたのか、地下室へと戻りました」

「え、そうなの？　これからパーティーなのに」

蓮次が風邪で寝込んだ事に、驚いた表情をするレミリアであったが、直ぐに元の表情になり「まぁ風邪なら仕方無いか」と言い、会場のステージへと向かった。

ホールには、コンサートとライブのように大きくは無いが、ステージがあり司会進行をするのに丁度良い位置になっている。特にレミリアの様に『あまり身長の宜しくない』者でも、簡単に上がれる程の高さである。

レミリアはステージに乗り、親友や従者の姿を見て息を一度吸って声を出す。

「今日は、クリスマスパーティーです。今日は無礼講だから、皆じゃんじゃん楽しんで行ってちょうだい」

レミリアは会場にいる者全員に、行き届くような声で話す。だがレミリアの近くにいる従者咲夜を除く、メイド妖精達は殆ど話を聞こうとはせず、隣同士で会話を弾ませている。それどころかレミリアの言葉を気にも止めず、テーブルに並んだ料理に手を伸ばし、食べ始める者までいる。

「く……こいつら」

「お嬢様。こうなったら、私が一人ずつ処理しましょうか？」

レミリアが苛立ちながら、歯軋りをする姿を見て咲夜は、突然手元からナイフを出してレミリアに見せる。そのナイフは今すぐにでもメイド妖精達に向けて、投げつけられそうな状態であり、それを見たメイド妖精達は一斉に沈黙を始めた。

「物騒よ咲夜。……折角のクリスマスだし、無礼講という事で許す」
「そうですか。流石、お嬢様度量が広い」
「ええ、それに今人員を減らされたら困るからね。今日は大事な日だから」

「……赤い悪魔ですか？」

前回レミリアが言葉に出したサンタクロースの尊敬を表した？言葉である。世の中でサンタをそう表するのは、レミリア以外には存在しないだろう。

「そう。奴が現れた時に、皆で捕まえるように言ってあるから準備は万全よ。去年は出てこなかったけど、今年こそはくる」

何を根拠にそう言っているのかは咲夜にも見当がつかない。

既に館に赤い悪魔こと、サンタクロースが現れる事を前提に進んでおり館に入っていた所を、従者総掛かり捕獲して真の悪魔の称号を手にするという、謎の作戦が立てられている。周りの従者達は、その話に頷きながらも内心は、おふざけの一つとしか考えておらず、真面目に取り組もうとする者など、新参のメイド妖精を除いて他いない。

「お嬢様。少し席を外させていただきます」
「あら、何処へ行くの？」

「美鈴の様子が気になりまして……。先程から帰ってこないから」

美鈴がホールから姿を消して、三十分以上は経過している。トイレにしては幾らなんでも遅すぎる時間である。

「そう。余り時間は掛けないでね。今日はパーティーなんだし」

「はい、心得ております」

咲夜は、レミリアに一度お辞儀をするとステージを降りて、扉の方へ行きホールを出る。扉を閉めた咲夜は周りを確認すると、周りを気にしつつその場から消えた。

＊＊＊＊

咲夜がホールを出る一分程前の事である。

フランドールは、ホール内を走りながらメイド妖精達を追い掛けて遊んでいた。その為、遊び終えた後はメイド妖精のうち、誰一人として口が聞けなかった。

暇になったフランは「折角だから蓮次の部屋に行ってみようかな？」と言って、ホールを出て蓮次が寝込んでいると思われる、地下室へと向かう。

階段を降りて地下室にたどり着いたフランは、廊下を歩き幾つもある扉の中で、他と同じ形をした普通の扉の前で止まる。その扉にはローマ字で『ｒｅｎｊｉ』と書かれた表札が紐で吊るしてある。これが蓮次の部屋である。

「蓮次。大丈夫？」

フランはそう扉の前で声を掛ける。しかし、蓮次の声は返ってはこない。不思議に思ったフランはもう一度「蓮次」と声を掛けるもやはり言葉は返されない。

「寝てるのかな？」

念のために様子を確認する為、フランは部屋のドアノブに手を掛ける。するとドアノブは鍵がされていなかった為か扉が開いた。

「失礼するよ」

フランはそのまま中に入る。すると部屋の片隅にあるベッドの上に、毛布が覆い被されている。

「なんだ……。寝てるのかな？」

フランはベッドに近づくと毛布を揺すり、「蓮次。気分はどう？」と声を掛ける。すると揺すり掛けていた毛布が、捲れてバサリとベッドから落ちた。

「あれ？」

だが毛布の中には蓮次の姿は無く、幾つもの枕が置いてあるのみだった。

＊＊＊＊

咲夜は姿を消した後、館のとある一室にへと入った。勿論、姿が消えたように見せた時間停止を用いての移動である。ある意味それは空間移動にも近い部分があるだろう。

「失礼するわ。どう、準備の方は出来てる？」

咲夜が入った一室には、先程ホールから席を外していた美鈴と赤い帽子、赤い服に真ん丸とした体に口元から胸の辺りまで延びた白い髭を生やした老人がおり、髭だけでは無くもみ上げまでもが白かった。

その姿は世に有名な運び屋、サンタクロースそのものである。

「中々、良い感じに仕上がってるじゃない。これは全部美鈴が？」

「はい。全てと言う訳じゃないですが、服装は私が揃えました。後は蓮次さんに飾り付けを任せました」

「へぇ……」

咲夜は次に、サンタクロースの格好をした男に顔を向ける。

「気分はどう？　蓮次」

「ああ、正直最悪だ。忠実に再現するとは言え、大量のスポンジを服の中に忍ばせておいた為か、暑いし重い。……おまけに髭を付ける材料が無かったから、自分で綿飴を生成して張り付けている。出来るだけ溶けないように多目にな。だから顔をベタベタだ」

サンタクロースの格好をしていたのは、丹波蓮次そのものである。額からは少しではあるが汗が流れており、その格好は相当蒸れているに違いない。そう感じたのか、咲夜はハンカチを取り出して蓮次の顔を拭いた。

「ありがとうございます」
「構わないわ。相当暑そうだし、少し窓を開けましょうか」
「お願いします」

蓮次にそう言われ咲夜は、窓辺に向かうとロックを解いて開く。外は雪により、全体が白一色に染まっているが今は日が暮れて、うっすらと映るのみである。

「しかし、本当に意味あるのかな？　別にサンタクロースが現れなかったら、それはそれで済む話だと思うんだけど……」
「ははは、確かにそうですね」　蓮次の言葉に美鈴は納得したかのように、そう言う。その一方咲夜はと言うと二人のやり取りに、溜め息をつく。

「何も判ってないわね二人とも。美鈴、貴方はいつからここに勤めてると思ってるの」
「は、はぁ……」
「この際だから蓮次。貴方にも言っておくけど、この館の主はあくまでレミリアお嬢様。主が暇をしていれば、それをどうにかするのも従者の勤めなのよ」

咲夜の言葉に蓮次は「成る程」と言ってその話を真剣に耳に入れた。レミリアの従者として一番の理解者は、十六夜咲夜以外には有り得ない。
そんな意気込みが、蓮次と美鈴に犇々（ひしひし）と伝わっていくようだった。

＊＊＊＊

サンタクロース作戦。

とは言っても、ただ単にホールの窓からサンタの格好をした蓮次が通りすぎて、ホール内にいるメイド妖精にその姿を見せ「あ、サンタだ」と言わせた所で蓮次サンタは走りながら、立ち去るという単純な作戦である。

要はレミリア自身にサンタクロースが現れた事を、認知させれば後はどうにかなるだろうと言う、少し強引な計画である。あと、ホール窓の周辺にいるメイド妖精は、全員が作戦の内容を教えており、尚作戦が進行しやすいという事だ。

「これで、良いのかな?」

蓮次は鏡でもう一度姿を確認する。少し溶けかかった白髭を模した綿飴に、もう一度量を足して補うと、全身が重くなった体を蓮次はのしのしと動かす。

「あー、綿飴がベタベタするな」

蓮次は綿飴が取れない程度に顔を擦り、扉の方に向かい部屋を出て廊下へと出る。

これから外に出て、ホールの窓から自分が映るようにする訳であるが、蓮次自身には一つ疑問があった。

「これ、体のバランスが悪くないか?」

蓮次の身長は其ほど高いわけでは無く、またズボンや服には大量のスポンジを忍ばせているのに対し、顔自体には綿飴以外これと言

ったメイクを施していない。その為か体から見てそのサンタの顔は、尚更細く見える。

「だ、大丈夫だよな。これ……」

不安要素を抱えながらも蓮次は、廊下を歩き入り口を目指そうとしていた。メイド妖精は皆、会場の方にいる為廊下で遭遇する事は無い。

「はぁ、でも……折角だからパーティーに参加したかったな」

今、会場で楽しく食事を取る皆の姿を想像したのか、蓮次は自然と口から涎を一滴溢す。

「……おっと、辛抱辛抱。それに後から食事を作ってくれるって咲夜さんも言ってたしな……」

蓮次はそれを楽しみにしながら、浮かれ気分で廊下を歩いていた。しかし、ここにきて予想外の出来事が起こる。

それは丁度、地下一階へと続く階段を横切ろうとする時であった。

「何処に行ったんだろう蓮次」

地下室から一人の少女が階段を登って、蓮次サンタの一歩手前に現れた。それは先程蓮次の様子見をしに、地下室に向かったフランだった。

第２２話「本当のサンタ」（前書き）

今回は長い。

長ったらしいと思う方も多いかな？とにかく更新しました。どうぞ！

第２２話「本当のサンタ」

フランドールは困惑していた。

蓮次が体調を崩して寝込んでいると考えていたフランは、会場を抜け出して一人蓮次の部屋へと訪れた。

しかし、ベッドは裳抜けの殻。蓮次の姿はそこには無かった。

「何処に行っちゃったんだろう。まさか脱走したとか？」

フランは試しに窓の方を見る。だが、この窓は基本的に外に抜けるような構造をしておらず、日が部屋に行き届く為だけに作られた窓である。人にはベストとは言えないが住めない事は無い。

実際に室内には本が何冊か置かれており、少なくとも不便はしていないだろう。

「うーん……。じゃあ蓮次はこの部屋にいないのかな？　私は、会場にいるから態々私の部屋に行く理由は無いし。とにかく放っておいたら危ないかも……」

フランは部屋を隈無く探した後、蓮次が居ないことを確認し今度は別の部屋も探し回る。最後は、フラン自身の部屋にも立ち寄り散策するも、結局蓮次の姿を見つける事は出来なかった。

「……はぁ、戻ろう」

会場にでも向かったのだろうと思い、フランはゴミ箱の中を確認

し階段を登り、ホールに戻ろうと一階の廊下に出た。

＊＊＊＊

サンタの格好をした蓮次は、目の前の光景に小さく「うっ」と呟き立ち止まる。何故なら本来そこに出会う筈の無い少女が階段から現れたからである。

蓮次の本来の目的として誰にも気付かれずに館のホールの外に行き、サンタが現れたと皆に認識させる必要がある。それでレミリアにサンタが現れたという事で満足させる事が、目的であった。

万が一追われるような事があっても、咲夜の力を借りれば直ぐに逃走を謀ることも可能である。そう成らない為にも一部のメイドに協力して貰っている、言わば『ドッキリ大成功』のようなものだ。

だが、もしそれまでにこの企画に参加していない者に、蓮次の姿を見られた場合の為の対処法までは考えていなかった。「全員が会場入りすれば、済むだけの話である」

と企画した張本人である咲夜は述べていたからだ。

ましてや、今蓮次の目の前にいるのは例のごとく、館随一の妹様である。もし彼女にばれてしまえば咲夜、美鈴と協力するメイド妖精の作戦は泡と化す。

そして猶予も与えぬうちに、フランはサンタの格好をした蓮次の方を見た。

「……」

「メリークリスマス。よゐこにしていたかな？」

蓮次は目があった少女に、そう声を掛ける。一方で少女は蓮次の顔にずっと視線を当てている。

「……何やってるの蓮次？」

フランのその言葉にサンタの格好をした少年は、固まるかのように停止する。どうやら既に正体がバレていたようだ。

「やっぱり気づいてたか」「いやだって、どうみても蓮次でしょ。部屋には居なかったし何やってたの？」

「じ、実はな……」

蓮次は質問を投げ掛けてきたフランに、今までの経緯を説明した。今回何故、自分がサンタの姿になっていたのか、そしてこれに関係していた人物についても話した。

「なる程ね。だから二人もさっきホールを抜けていたのか……」

「まぁ、そう言うことだ。俺も正直、ノリ気じゃなかったがかのメイド長様からのお言葉とあっては、逆らう訳にもいかない」

蓮次は少々大袈裟に、フランに語っている。だがサンタの格好をする前は「自分自身がサンタになれる」などと浮かれいた。だが実際にサンタの服装になると、イメージと違っていた為かやる気が一気に低下していた。

「へぇ、それじゃあ蓮次はこれから外に出て御姉様に、サンタが現れた事を示しに行くんだね」
「まぁ……そうだ」
「でもさ……」

フランは近くの窓に向けて、指差し口を開く。

「外、吹雪いてるよ」
「あ、本当だ畜生」

その光景を見た蓮次は、呆然とその場に立ち尽くしていた。この時、蓮次はサンタクロースという生き物が、どれ程大変な仕事を達成してきているのかを把握した。

＊＊＊＊

「大丈夫ですかね蓮次さん。外も吹雪いてきてますし……」

ホールに戻った美鈴は、ホールの端にある席に座り、吹雪いている光景を窓から眺めている。

「……蓮次さんも大変な仕事を任されましたね」

近くに座るメイド妖精の一人が、そう話してくる。美鈴と同じテーブルには、四名のメイド妖精が座っており、五人で一つの丸テーブルを共有する形になっている。パーティーなどの食事席を思い浮かべてもらえば、解りやすいだろう。

ちなみに、美鈴の周りにいるメイド達は皆、蓮次サンタの事情を咲夜から聞いている。

「しかしメイド長も、もう少しましな方法は無かったのかな？」
「確かに、単純すぎますよね。この作戦……」

同席する二人のメイド妖精が、作戦に少々疑問を感じながらそう話している。だが、そう話しているうちに何処からともなく、シュッと音がしたかと思うと、何かがテーブルの上に刺さる。

それは銀色に輝く十六夜咲夜のナイフであった。

「ひっ……」

会話をしていた二人も、周りに座っていた美鈴等も、その光景を青ざめた顔で見つめていた。

「咲夜、どうしたの？」
「何もありません、お嬢様。パーティを楽しみましょう」

咲夜は薄い笑顔を見せながら、心配そうに見つめるレミリアに、そう答えた。

＊＊＊＊

館の外は、吹雪により屋根の大半が紅色である事を忘れさせる程に、降り積もっている。周りの庭でさえ白銀によりその姿を失いつつあった。

風のビュービューと吹く音は、その吹雪の全てを物語っている。

ガチャと音がしたと思えば、表の扉が開き中からコスプレ即ち似非サンタが現れる。

「やっぱり、吹雪いてるな……」

「嫌なら止めた方が良いんじゃないの？　今なら引き返せるよ蓮次」

「いや、後が怖いし……」

フランの言葉に蓮次は、ボソッと言った。それを聞いたフランは蓮次の顔に、手の甲を当てる。

「頑張って蓮次。無理はしないでね」

「ああ、行ってくる……」

フランに勇気を貰って少し元気が沸いたのか、蓮次は顔を両手でパンパンと叩いて、一歩一歩前進する。

「……せめて、空が飛べたらこんな思いはしなくて良いんだろうな」

蓮次は館にいる全員が空を飛べる事を、思い出しながら雪の上を歩いてホールを目指し足を進める。その間も雪は蓮次の体を覆っていき、その度に雪を祓いひたすら重い足を前にやる。顔面にも雪は積もっていき、蓮次はやがて祓うのが面倒になったのかその作業を止め、ただただ歩き続けた。

「カイロぐらい張っておいたらよかったな……」

そう後悔しつつも蓮次は、ホール近くの角にまで差し掛かろうと

していた。

＊＊＊＊

メイド達が一斉に大声を上げる。それも窓を指差しながら……。
レミリアと咲夜、その他のメイドは窓辺に集中する。――そこには吹雪の中、赤色の服を纏い白雪を浴びた一人の男が窓を横切ろうとしている。

事情を知らないメイド達は、それを見て「雪男だ」「インディ」だと叫び、慌て混乱模様になる。

「咲夜、これは不味いわね。まさか、こんな時期に侵入者が出るとは思わなかった」
「お、お嬢様？」
「あの生物を至急排除しなさい」

ここに来てレミリアは咲夜にとって、予想外な言葉を口にする。捕獲ならまだしも排除と来たから驚いたものである。

「しかし、あれは其れほど危険には見えませんが……お嬢様の言っていたサンタクロースでは？」

何とかフォローしようと咲夜はレミリアに、サンタクロースの可能性を訴える。

「何を暢気な事を言ってるの、貴方らしくない。第一、あんな不格好なサンタが居るわけ無いでしょ。サンタなら全体的に丸い筈よ。

もし危険人物だったら手遅れになる、全軍あの者を攻撃せよ」

レミリアの声と共に冷静を取り戻し、武装解除をしたメイド達が一斉に窓から飛び出し、逃走する男を追走を始める。

「さぁ、私達も向かうわよ」

レミリアはそう咲夜に言うと、何処からともなく槍を出現させ手に握ると、メイド達の後を追った。

レミリアが向かった後、ホールに残る数名のメイドと美鈴は、咲夜の元へと駆け寄る。この出来事に事情を知るメイド達は焦りを募らせている。

「不味いことになったわね。まさか、本当に攻撃を仕掛ける事になるなんて……」

「どうするんですか咲夜さん。このままだと、蓮次さんが危ういですよ」

美鈴が咲夜に言ったその時である。

「何が危ういのかしら?」

一人の声が聞こえ、集まった一同はその方に目を向ける。そこには、本を片手に持つ少女パチュリーと付き人である小悪魔が立っていた。

「パ、パチュリー様」

「詳しく話して貰えると嬉しいんだけど……」

パチュリーの言葉を聞いて咲夜は、二人に今回の件について全てを話した。その話にパチュリーも小悪魔も、頷きながらそれを聞いていた。

「なるほど、つまりあれは蓮次であり今回はレミィの為のサプライズとして、サンタの格好をしていたと……」

「……はい、その通りでございます」

「面倒な事になったわね。一先ずレミィを追わなきゃ」

レミリアと事情を知らないメイド達は、蓮次を侵入者と見なして攻撃するに違いない。そうなってしまえば人間である蓮次は、一網打尽にされるのは確定している。特にキャリアを積立てたばかりである為、堪え忍ぶ事も儘ならないだろう。

「さぁ、レミリアにバレないように回収しますか」

「パチュリー様？」

「サプライズは終わってないなら、今はそれを成功させましょう。今回の事は黙っておくから」

「ありがとうございます」

それを聞いて、咲夜を筆頭に美鈴と他のメイド達は、パチュリーに頭を下げた。

＊＊＊＊

「やばくないか？」

蓮次は庭を掛けながら後ろを振り返る。メイドだけでも十以上、

並びに館の主のレミリアまでもが親の仇とも言わんばかりの勢いで追ってくる。おまけにレミリア等は空を飛ぶのに対し蓮次は歩行、更には積雪により速度の減少が著しい。

幾ら吹雪で飛行能力が低下するとは言え、歩行の蓮次では捕まるのも時間の問題である。また、正体を開かず方法もあるが処罰を受ける可能性もある。その為か蓮次は必死に逃げ続けていた。

「止まりなさい不審者」

だがそんな蓮次に一人のメイド妖精が立ちはだかる。片手にはナイフが握られており、不審者扱いされている蓮次に敵意を剥き出しにする。

「ごめんなさい、先輩！」
「えっ、その声は？」

蓮次が声を出すと同時に、メイドの溝に拳が入れられる。その一撃により、メイド妖精はバタリとその場で気を失った。それと同時に蓮次に罪悪感を募らせながら「ごめんなさい」と気絶するメイドに再度謝罪して走った。

「ここじゃ体力が持たない。仕方無い……」

蓮次はそう言うと、先程通った館の入り口目指して全力で走り、そのまま吸い込まれるようにして館の中へと入っていった。

「来ると思っていたぞ不審者め、覚悟しろ」

だが館の入り口は既に他のメイド妖精の部隊、その数およそ三十

が蓮次を包囲していた。おまけに外から蓮次を追うメイドも合流し、数は更に膨れ上がる。

その光景は、四面楚歌そのものである。かつての味方の大半は敵である状態である。

「甘く見たわね侵入者。よりによってサンタクロースの格好をして現れるなんて、私に対する挑発かしら？」

蓮次の背後からその声が聞こえる。それは、怒りを露（あらわ）にする館のお嬢様の姿である。ピリピリとしたレミリアの苛立ちが蓮次にも伝わってくるようである。――もしここで、レミリアに「違います」など言えば、蓮次は確実に声で気づかれてしまうだろう。その為、言葉すら命取りである。

「くそ……どうしたものか。このままじゃ危険だし……あれ？」

小声で独り言を言う蓮次だが、辺りを見渡しな時に一人、蓮次から目を背けたメイドがいる。そのメイド、実は今回の件に荷担していた者であり、成り行きに任せてこの場にいた。

蓮次は気がつかれないように、小言でメイドに会話をする。

――どうにかしてくれ、このままじゃ俺は危険だ、助けてくれ

――何を言ってるか判りません。私は無関係です。人違いじゃありませんか？

メイドは最後に小さく「ごめんなさい」と頭を下げ、再び目を背

け蓮次の方は見向きもしなくなった。

「見捨てやがった……」

蓮次はそのメイドが救済策すら取らない所を見た限り、完全に放置された事を悟った。またメイドの包囲網に隙間は無く、どう足掻いても逃げ場は見当たらなかった。それどころか武装したメイドが相手である為、下手に行動すれば蓮次はその場で攻撃される事も十分に考えられる。

「あーあ、このまま自首いしようかな？　でも騒ぎを起こしておいて、自首なんかしたら只じゃ済まないだろうな。でも今よりはマシかもしれないし……」

「何を一人でぶつぶつと言ってるのよ。覚悟は出来てる？　パーティを荒らした邪魔者」

パーティを荒らされた侵入者として扱うレミリアにとって、目の前の男は邪魔者以外の何者でも無かった。

「あれ、俺何か悪いことしたっけ？」

蓮次はレミリアの罵声に小さく涙が溢れる。勿論、ただレミリアにサプライズを起こそうとしていた為、悪さを働いた訳では無い。ただし結果としてこの状況に陥っただけである。

「……よし、これ以上は耐えられれん。自首しよう」

蓮次が自分の正体を明かす為に、綿飴で出来た白髭を剥がそうとしたその時である。

「レミィ大変よ」
「何よパチェ。今は取り込み中で忙しいのよ、後にして」
「赤い悪魔が現れたとしても？」
その言葉にレミリアは、目の色を変えてパチュリーの方を見る。
「詳しく聞かせてもらおうかしら？　メイドの部隊は侵入者を捕らえておきなさい」
パチュリーの話に興味を持ったレミリアは、パチュリーに呼ばれ別の場所へと誘われた。
そして、レミリアが離れると侵入者を確保しようとしたメイド達は、一斉に先程いた侵入者の方を見る。
「な、嘘……」
「馬鹿な！」
メイド達は騒然とする。何故ならそこに、先程までいた侵入者の姿が消えてしまっていたからである。代わりに一通の紙が落ちており、大きな文字で『メリークリスマス』と書かれているのみだった。
「奴はまだ近くにいる筈だ、捜し出せ！」
指揮を取っているであろう一部隊のメイドが、声を上げてそう言うと包囲網を張っていたメイド達は一斉に侵入者確保の為に散らばった。
＊＊＊＊

「……何事？」

突然の場面変化に蓮次は驚く。先程までメイドに包囲されていた状況とは違い、紅色の小さな個室に現在いて小型のランプが蓮次を照らしている。

「驚いた？」
「うん？」

蓮次が声のする方に顔を向けると、そこにはメイド長の十六夜咲夜が立っている。

「俺はどうなったんだ？　さっきまではメイドに包囲されていたんだが……」
「勿論、私の能力を使ってここまで引っ張って来たわ」
「……相変わらず便利な能力ですね。そう言えばメイド達はどうなったんだ？」
「彼女達なら、今もサンタを探している。お嬢様ならパチュリー様のお陰でどうにか場を去ってもらえたから、貴方を助ける事が出来た」

咲夜は蓮次の救出に消極的であった。何故なら主君に逆らうといった点もあり、主に尽くす気持ちが強い咲夜にとって、どんな些細な事であっても無視する訳にはいかなかったからである。

「もしかして、レミリア嬢がその場にいたら、助けなかったとか？」
「ええ、場合によってはね。でも流石にその時は、私が理由を話していたわ。だから、一応私の面子を守ってくれた点については、感

謝してる」

そう言うと咲夜は、ランプを手に取り個室から出る為、ドアノブを握り扉を開いた。

「さぁ、ホール戻りましょうか。あまり時間が過ぎればお嬢様に怪しまれる」

「……七面鳥？」

「勿論、あるわよ」

それを聞いた蓮次は、今日の出来事を終えて安心したのか、腹が鳴り始める。

「腹が減りました……」

「早く戻りましょう。ただし、何があっても知らない素振りをしなさい。お嬢様に怪しまれないようにね」

「……了解」

それを聞いて蓮次は音を立てないように、恐る恐る紅色の扉を閉めた。

その後、蓮次は一旦部屋に戻り咲夜は急ぎサンタの現場であるエントランスホールへと戻った。

エントランスホールには、メイド妖精がサンタ騒動を受け、捜索を続けていたが既に諦めムードが漂っていた。その後、レミリアは捜索を中断しメイドを集めてパーティ会場に戻った。

蓮次もまた、少し時間を開けてから会場入りして、レミリアに「体調が楽になりました」と言って残りの時間、パーティを楽しんだ。

また事情を知るフランドールは蓮次本人から、今日起こった出来事を聞いた。フランドールはそんな蓮次に「ドンマイ」と声を掛けて、慰めていたそうだ。

結局、クリスマスでのサンタ作戦は大失敗に終わったのである。それぱかりか、聖なる夜に変質者が現れるという噂が、のちに幻想郷一帯に広まる事は言うまでもなかった。

＊＊＊＊

深夜過ぎ。

夜間が黄金の時間である紅魔館も、パーティ後の為か寝静まっている。メイド達も今日ばかりは疲れたのか大半は寝床に着き、残された残業組もレミリアの言葉により、就寝に着いた。

誰もが眠りに着いた館の主であるレミリアは、一人廊下を歩いている。そしてエントランスホールの階段で腰掛ける。

「そろそろ姿を見せてもらえないかしら？」

レミリアの言葉に、入り口の扉が小さく音を立てて、風の音と共に何者かが館に入る。

黒いスーツにサングラスを身に付けているが、髪はあまり長くは無い。また黒いスーツは所々、粉雪が付着している。

男はサングラスを外し、レミリアの方に顔を向ける。

レミリアは人間より、暗闇の中での視力に優れており、相手の姿を確認するのも容易い。立ち上がり階段を降りると、男のいる方へ

向かい声を出す。

「吹雪の中、ご苦労様。必ず来ると思っていたわ」
「歓迎ありがとう。君がここの主かな？」
「そうよ、館の主レミリア・スカーレット。よろしくサンタクロースさん」

その言葉に男は驚いた素振りを見せ、紐で自分自身の体に括り付けてある長方形のボックスを紐を緩くして取り出す。

「いや、参った。そこまで見抜かれていたとは……」「人はある時期を迎えれば『誰もが』サンタになる。貴方もその一人で良いかしら？」
「ああ、違いない。紹介が遅れたようだ。私は丹波勝義、ある息子のサンタ役として現れた」

丹波勝義。以前に蓮次が読んだ手紙の送り主であり、ある息子とは勿論、蓮次の事である。

「どうやってここに来たか……巫女の力でも借りたの？」

幻想郷は外の世界から隔離された場所であり、通常なら外に最も近い博麗神社を通るのが、通常の方法である。ただし蓮次のような特別な例もある。

「いや、ある御方の力を少し貸していただいてね……場所も案内してもらったよ」
「ある御方……ね。まぁ大体検討はつく。多分蓮次も同じ方法でこの場所に来たのでしょ……八雲紫の手によって」

幻想郷の世界。そこには管理を任されている者が何人かいる。そのうちの一人、妖怪の賢者と敬称される女性がいる。八雲紫と呼ばれる女性は名の有る古参の妖怪であり、蓮次も彼女に誘われ又は半ば強引にこの世界に連れて来られた。

「その通りと言えばその通りだ。それより、蓮次の部屋に案内してもらえるか？」

「良いわ。こっちよ」

＊＊＊＊＊

レミリアの案内の元、蓮次の父勝義は廊下を渡り、地下室へと続く階段を降りると地下の奥にある、蓮次の部屋へと進む。人間である勝義は、吸血鬼と比べて暗闇の中での場所が把握しにくい為、自前の懐中電灯を持ちながらレミリアの後ろに着いてきている。

「おや、この部屋は？」

「そこには、我が妹フランドールが住んでる」

「へぇ随分とハイカラな家だなここは……」

「嫌みにも聞こえるんだけど？」

そう言って少し睨むレミリアに不味い感じたのか、勝義は「すまない」と軽く謝った。

「蓮次の部屋はここよ」

「へぇ、ここが……」

勝義の目の前には、表札にローマ字で『ｒｅｎｊｉ』と書かれた薄紅色の扉がある。

「部屋の鍵は……閉めてないようね」

「それじゃあ、そっとお邪魔するか」

そっと扉を開けて、二人に部屋に入る。蓮次に気付かれない程度の小さな懐中電灯を使い、辺りを照らすとベッドの上に寝ている蓮次の姿を見つける。

「……ぐっすり眠ってるな。しかし、思っていた以上に良い部屋だ。こいつには勿体無いぐらいに……」

勝義は寝息を立てる蓮次の、はだけている毛布をゆっくりと元に戻して、背負っていた長方形のリボンが乗せられた蓮次へのプレゼントを、ベッドの横に置いた。

「彼を、連れて帰らないの？」

レミリアが唐突に質問を投げ掛ける。レミリアは「蓮次を家に連れて帰らなくて平気なの？」と付け加えて勝義に言う。

すると勝義は一度蓮次の方を見て、レミリアの方に顔を向ける。

「こいつがここにいたら、迷惑だったかな？」

「いや、そう言う訳じゃ無いけど……親として子供を、こんな場所に置いて大丈夫かを聞いたかったのよ」

「いや、別に」

即答だった。あまりの即答っぷりにレミリアは呆気に取られ、体をよろめかせる。まるで勝義は、蓮次に対する思い入れが無いかの

ような発言である。

「あれか？　一人を養うのに、金がいるとか言う話をしてるのか？」
「違う！　馬鹿にしてるの貴方？」

勝義の空回りの質問が、レミリアを更に苛立たせる。これが男の作戦なのか、それともただの天然なのか今のレミリアには判らない。

「あまり大声を出すと、蓮次が起きるかもしれない。移動しよう」
「……わかった」

レミリアはもう一度蓮次の方を見るが、深い眠りに着いている為目を覚ます確率は少ない。しかし、万が一という事もあり二人は、部屋を出て音を立てずに扉を閉めると、地下室を上がりエントランスホールへと続く廊下に向かった。

その間、適当に館の設備等を勝義に話すレミリアだったがエントランスまで後少しの所で、ある質問を持ち掛ける。

「ねぇ、もう一度聞いても良いかしら。貴方は蓮次を連れて帰る気は無いの？」

先程、即答した質問を再び持ちかけるレミリア。どうしても納得いかない部分があったのだろう。真剣な眼差しが勝義を見つめる。

「そうだな。まぁあいつも上手くやってるみたいだし、そちらに迷惑が掛かって無ければ、問題ないと思うが……」
「別に迷惑は掛かって無いかな？」
「そうか、それを聞いて安心した。要らないとか言われたら、連れて帰らなければならないからな……」

その言葉にレミリアは反応する。それはまるで、蓮次を元居た世界に返す事に部が悪いと思える台詞とも読み取れる。

「なら、一言聞かせてもらえないかしら……」

「なんだい？」

「貴方にとって、丹波蓮次とは何なの？」

この男にとって、蓮次とは如何なる存在なのか、もしかすれば『不用』とも言われる可能性も無い訳では無い。

「勿論、大事な息子さ。仮にも源氏の血を引いてる……いや、そんな一族は日本中何処にもいるかな？　ここ幻想郷にもね」

「源氏？　まぁいいわ。それだけ聞ければ十分」

話をしている内に、エントランスホールの玄関までまで二人は来ている。

「今日は泊まって明日帰る方法もあるわよ。部屋は幾らでもあるし……」

「いや、流石に私まで厄介になる訳にはいかないよ……明日には普通に仕事だからね」

そう言うと勝義はレミリアの方を向き、膝をついた。突然の勝義の行動に唖然するレミリアであったが、この先更に彼女を驚かせる出来事が起きる。

勝義がレミリアに対して頭を垂れたのである。土下座とも言えるこの行動に、驚く間も無く勝義が言う。

「息子を宜しく頼む。ああ見えて真面目な奴だ、図々しいようだが

これからも面倒見てやってくれ……」
「いや、あの……えっと？」

身長が百三十程のレミリアに対して、百七十以上の大の大人が土下座をする。年齢はレミリアが数十倍上ある。だが見た目からすれば、シュールな光景ではないだろうか。

レミリア自身はどう言えば良いのか判らなかったが、勝義にゆっくりと近づき声を出す。

「分かった。だから顔を上げなさい勝義」

レミリアがそう言った瞬間、勝義は体勢を立て直してレミリアの前に立つ。

「いやぁ、そう言ってもらえて助かるね、よろしく頼むよ」

言葉を聞いた途端、勝義の言葉は急変、ハハハと笑いながら、先ほどまでの誠意を一切感じさせない軽そうな男に戻っていた。

「頼むよレミリア君。蓮次の血は、好きに使ってくれても構わないからね」

そう言って何度もレミリアの肩をポンポンと叩く。勿論、これにレミリアは沸々と怒りが高揚しつつある事は言うまでも無い。流石に表情からもでも、その怒りは読み取れるようで身の危険を感じた勝義は手を止める。

「いい加減にしないと、痛い目見るわよ……」
「済まない、つい何時もの癖で許してくれお嬢様」

この男には多くの意味で癖がある。レミリアの蓮次の父に対する一番の印象であった。そのまま勝義は館の扉を出て、レミリアはそれを見えなくなるまで見送った。

次いでレミリアは箱を勝義から預かっていた。そこには「館の生活に役立ててほしい」と砂金が小型の箱に積まれていた。

「ここまでするか？　まぁ息子を大事に思っている気持ちが、分かっただけでもよしとしよう」

どっと疲れが出たのかレミリアは目を細くし、欠伸をかく。

「寝よ……なんか疲れた」

箱を片手に抱いてレミリアは、冷えきった足を動かし自分の部屋へ歩きだす。

「……蓮次の血か。ちょっとぐらい貰ってもいいかも」

寝惚けてか本心か、その言葉の意図は知るよしも無い。その時に、口許から小さな光が発せられた事を知るものはレミリア以外には居ない。

ただ次の日に、蓮次の「サンタはやっぱりいるじゃん」という言葉に、レミリアは彼の目の前で牙を向けたという。

第２２話「本当のサンタ」（後書き）

御指摘の方がありましたら、是非お願いします。どんな些細な事でも構いません。

番外編「蓮次ダイアリー」（前書き）

短いです。

特にこれといった進展はありませんが、時間は過ぎていきます。

そろそろ異変に移らないと……

番外編「蓮次ダイアリー」

紅魔館使用人日記帳。

レミリアお嬢様より、日々の生活を振り返る為にも日記を書けと進められ、ここに記す。

内容は俺がその日に起きた出来事を記す。また毎日書く必要は無いらしい。好きな時に好きなだけ書けとお嬢様は仰っていた。

とにかく書いていこうと思う。

―蓮次の日記―

睦月（旧暦一月）

［一日］

今日は旧暦でいう正月らしい。お嬢様の話によると、博麗神社には『いつもより』客足が延びており、これは異変だとお嬢様は感じたそうだ。その言葉のせいで霊夢に叩かれたのか、頬を擦りながら戻ってきた。

ちなみに以前、サンタから貰った望遠鏡で夜を眺めるのは自分の習慣である。

［二日］

幻想郷各地では凧揚げが行われていた。久々に日本の風情を体感したと思ったら、今度は館内のホールにて全員に御節料理が振る舞われていた。

お嬢様は和食も好みらしく、御飯を食べている時もたまに見かけるが、まさか洋館で御節が食えるとは思ってもいなかった。

また実家の黒豆が出てきた事には一番驚いた。

あと親父から初めての手紙と段ボールが送られてきた。はっきり言ってここまでして、何故顔を見せないのか謎である。

それよりも親父が幻想郷を知っていた事が一番の驚きであった。

［三日］

少女魔理沙襲来。本を五冊程度盗まれる。

［六日］

メイド募集中の広告紙を作成。何処かに新聞社みたいな組織が有るらしく、そこに掲載するようだ。

どんな相手かは知らないが、数名の天狗が情報をかき集めて文々。新聞と呼ばれているそうだ。

そこまで人材がいるのかとお嬢様に聞くと、妖精ではこなせる仕事が限られてくるので、より多くの人材が出来れば人間の方からも日

雇いという形で雇いたいそうだ。

最近、仕事が増えたような気がしなくも無い。

［九日］

ゴキカブリの出現。ヒャッハー汚物は消毒だ、という声が何処からともなく聞こえた。

［十三日］

人里に向かい買い出しに出掛けた。商店街のような、店の立ち並ぶ場所で頼まれた買い物を済ませる。

小遣いをお嬢様から頂き、そのお金で帰りに茶屋で舌鼓を打った。

人里には妖怪が現れる事もあるらしく、その多くは人々と会話を楽しみ、酒を呑み交わす者も少なからずいるそうだ。［十五日］

パチェさんから新しく本を借りる。魔法使いの集う英国の魔法学校を舞台に、とある有名な少年とその仲間が活躍するあの本である。

映画の方を観た事はあるが、原版を読むのは初めての事である。

［十八日］

体が弛んできたので、修行を始める事にした。門の入り口で美鈴さ

んに頼み、体を動かす程度に特訓をして欲しいとお願いした。

だが美鈴さんは暇で、全力で体を動かしたかったらしく、途中から動きが凄まじかった。勿論、本当に拳を当ててくる事は無かったが、その勢いはあった。

だが動くうちに体が慣れたのか、少し速く行動出来るようになった。

俺もまだまだ捨てたものじゃない。

［十九日］

筋肉痛。

［二十日］

休憩時間、バルコニーから外を眺めると氷で覆われた湖にぽつぽつと人の姿を見かける。

どうやら釣りを楽しんでいるらしく、その光景を見ると釣りをしたくなった。

如月（旧暦二月）

［三日］

今年は寒い日が続いている。特に雪が降る日も最近は多く、このまま春が来ないのではと不安に思う。

そう言えば里では除雪作業を行うのだろうか。

夜は寒さに耐えかね、夜寝るまでは比較的設備の良いフランの部屋で暖を取らせてもらっている。

暖炉が設置されている事が此れほどまでに羨ましく思えた事は無い。

［七日］

小悪魔さん抜きの図書館の整備。

［八日］

美鈴さんに代わって門番を任される。この日に限って妖精の来訪者が多く、戦いを挑まれる。

特に氷の妖精からは、氷の連続技を浴びせられた。

だが、それで普通に生活できているあたり、修行の成果だと感じる事ができる。

［九日］

風邪にかかった。

ベッドで一日を過ごした。

［十三日］

時間合間に散歩をしていると、鳥が何匹か倒れているのを発見した。
獣に襲われた形跡もなく、村の人に話を伺うと最近鳥の間で伝染病が流行っていると教えてもらった。

人間への感染のケースは今の所無いらしい。

［十六日］

大寒波の再来。このまま本当に春は来ないのかと思える程に吹雪いた。

咲夜さんも、このままでは館の燃料やその他の財源が尽きるかもと嘆いていて、割と危険な状態である事が判る。

あと館付近にいた毛玉がなついてきたので、お嬢様に飼っていいですかと聞くと、自分で世話をするならと言う事でペットとして飼い始めた。

正直、何を食べて生きているのか検討もつかないので、非常食を渡すと喜んで食べた。

名前はクリスティーヌである。

［十七日］

クリスティーヌ脱走。

＊＊＊＊

「もっと日記らしく書いたらどう？」
「うぅ、クリスティーヌぅ……」

部屋を訪れた咲夜が蓮次の日記を見て、そう評価する。だが一方の蓮次はと言うと、ペットの毛玉に逃げられたのが余程ショックだったのか、目に涙を浮かべながら嘆く。

「泣くな、みっともない」
「はっ、こんな寒い日だ。きっと凍えている筈……」
「軽く洗脳されてない？　蓮次」

何を言っても駄目だと考えた咲夜は、蓮次をしばらく放っておく事にした。啜り泣く声は地下中に響いたとこの後フランドールが咲夜に話していた。

また一部のメイドからは毛玉が気味悪がられていた為、中には胸を撫で下ろす者もいた。

番外編「蓮次ダイアリー」（後書き）

そう言えば幻想郷の通貨は、明治の時の通貨を使用しているのだろうか？

それとも現代の紙幣で物を買っている？

誰か知ってる人はいませんかね……自分は一応明治の通貨のままにしてますが……

第２３話「音沙汰無し」（前書き）

お久しぶりです……二週間以上更新を停止してた芋です。
まずは読んでくれている皆様に謝罪します。御免なさい……

そしてようやく更新さぁ！！

二週間ぶりの割には長さは普通。今回はあの方が登場します。

ではどうぞ

第２３話「音沙汰無し」

今年の幻想郷の季節の巡りは、例年に比べ明らかに遅れていた。

現在は卯月、外の暦であれば五月を迎えていた。にも関わらず、桜の開花に見込みは無く、それ以前に幻想郷全土は銀世界に支配され、溶ければまた雪が降るのサイクルが完成しつつあった。

人里では冬の長期化により、田畑にも影響し兼ねない状況であり、人々にも多大な被害を及ぼしている。それとは裏腹に、里の子供達は無邪気に雪と戯れ、村の周辺に幾多ものかまくらを作り楽しんでいた。大人にとっての悩みの種である雪も、子供達からすれば一種の遊びの材料に過ぎないのである。

そして雪はここ紅魔館でも被害を及ぼし、住民を悩ませていた。

＊＊＊＊

「さくやぁ、冬はまだ明けないの？」

館の奥の部屋にて、レミリアはテーブルに伏して弱々しい声で隣に立つ咲夜に言う。いつもの元気な『お嬢様』らしさはそこには無く、幼い少女がそこに座っている。

「はい、今年は冬が長くて私達も困り果てています。通常ならばこの時期、桜の開花を見る事が出来る筈なのですが……」

例年ならば、紅魔館周辺に淡い桃色の桜が開花し、この部屋の窓からでもその姿を拝むことが出来た。だが未だに降り続く雪によって、桜の木は眠るかのようにその姿を見せない。

「寂しい季節……、しかも寒くて仕方が無いわ」

「……そうですね」

二人は、温度差で曇った窓ガラスに自然と視線が移る。窓辺の先には、未だ降り続く雪の姿がうっすらと映っている。春風は未だ乗っては来ない。

＊＊＊＊

集落から外れ、一帯が木で覆われた場所、魔法の森。

ここに現在、黒のタキシードを着た男が歩いている。物騒にも鞘に納めた刀を右の腰に付けており、その足を前に進めている。館の使用人蓮次である。

蓮次は以前に父親が送りつけた段ボールの中に収納されていた刀が気掛かりとなり、とある場所にそれを見せに行こうとしていた。

話は少し遡り、ある晩に蓮次が半分眠りかけていた時の事、突然顔を叩かれ目が覚めるとそこには咲夜が立っていた。何事と思い蓮次が聞くと咲夜は、「夜道の散策はどうかしら?」と蓮次に言った。

よく判らないまま蓮次は咲夜に同行し、魔法の森の中のある建物内に入った。香霖堂と呼ばれる建物で中には眼鏡を掛けた人当たり

の良さそうな店主が椅子に座っていた。

店主の名は森近霖之助、香霖堂で商売をしており、その近くには『幻想郷ではあまり見掛けない』、逆を言えば『蓮次の世界ではよく見掛けた物』が置いてあった。

実は以前に当主のレミリアと咲夜はここを訪れており、蓮次もその話を耳にした。森の奥で商売する物好きが居ると館でも噂になったのである。咲夜は一人歩きも考えたが、この日に限ってうとうととしていた蓮次を誘った。

突然の訪問者に霖之助は戸惑う事は無く、寧ろ歓迎ムードが漂っていた。話は弾み、蓮次は普段は話さない外の事を霖之助に語り、隣にいた咲夜もそれを聞いていた。

特に人間の移動手段である車や時速三百キロを超える新幹線、空飛ぶ鉄の乗り物の話を蓮次が話すと霖之助だけでは無く、咲夜も興味津々に聞いていた。

会話の途中で霖之助は、未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能力が備わっている事を蓮次は知った。咲夜と共に館に戻った蓮次は以前段ボールで送られた謎の刀を後日、香霖堂に持っていく事にした。

そして現在に至る訳であるが、蓮次には一つ悩みがあった。

「……寒い！　今何月だと思ってるんだ」

蓮次の悩みと言うよりは、全体的な悩みと言った方が近い。春風では無く、冬場特有の風が吹くばかりでありタキシード姿の蓮次に

は、少々ばかりきついものがある。

蓮次は香霖堂に足取りを急がせた。

＊＊＊＊

「いらっしゃい」

香霖堂に着いた蓮次を一番に出迎えたのは、勿論ここの店主である霖之助である。霖之助は片手に本を持ち読書をしていた。客が来た事で読書を中断し、扉の方を見る。

「おや君か、以前は世話になった。……今回は以前とは違った格好だね」

以前訪れた時の蓮次は、ゴツゴツの茶色のコートを着ていたが、今回はタキシードを着ている。だがそれよりも霖之助の目に映ったのが、黒い鞘でる。普通なら驚く光景であるが、霖之助はその刀に興味を示しているようであった。

「突然訪問してすみません」

「いやいや、突然の訪問には慣れている身だからね、気にするのは君ぐらいだよ……」

この一言で、霖之助という男が苦労人であるという事が浮き彫りに出てくる。アポ無しの訪問は当たり前という事だろう。

「そうですか……」

「それじゃあ、用件を聞こうかな？」
「あ、はい。霖之助さんの力を借りたくて、ちょっと調べて欲しい物がありまして」
「腰のその刀かい？　いいよ、此方にも興味をそそる部分がある」
「それじゃあ、お願いします」

霖之助の言葉を聞き、蓮次は腰から外した鞘付きの刀をそっと渡した。霖之助は刀を手に持つと、様々な角度からそれを観察し始める。

「ちょっと鞘を抜かせてもらうよ」
「どうぞ」

シャっと音を立てて鞘から鮮やかな銀の刃が姿を見せる。霖之助は刀を感心しながら見詰め、再び観察を続けた。

「中々、見事な形をした刀だね。切れ味も抜群だろう……って何で距離を離しているんだ」
「いや、念の為に……」
「信用してないな、僕は残酷主義者なんかじゃないよ」

霖之助は、苦笑いをして無害である事を主張して鞘に刀を戻すと蓮次も元の位置に戻り、霖之助の結果を待つ。

「どうでした？」
「うーん、一言で言えば『名刀の模造品』かな？」
「模造品……」

その言葉に蓮次は気落ちした。名刀の模造品、つまりは偽物という事であり、てっきり家宝だと思い込んでた蓮次にとっては、残念

な報告だった。

「でも、単なる模造品では無い。質も良いしこの刀の歴史も長い」
「えっ」
「どうやら、この刀にも名前がある」
「あるんですか？　この刀にも名前が」
「うん、鞘の端部分に小さく『吉兆』て書かれてある」
「……本当だ。気がつきませんでした」

霖之助に指差され、蓮次は初めてそれに気がつく。黒色の鞘の端に小さく刻まれた『吉兆』、あえて金色を用いる事で文字を見易くしている。

「そ、それじゃあ模造品というのは？」
「ああ、それについての説明もしておこう。この刀は平安時代に使われた一本の刀、『髭切』を真似て作られたようだ……」
「髭切？」
「そう、鬼切や小烏など名前を代えて源氏や多くの一族に使われた伝説の刀の名前だよ。渡り刀としても有名さ……」

淡々と語る霖之助の言葉に一瞬睡魔に襲われそうになるが、流石に失礼だと思った蓮次は欠伸を抑えて目尻から小さく涙を流す。

「えっと、つまり？」
「この刀は髭切をベースにしているが、中身は全く別の物と言う事だ。ただし質が良い刀というのは確かだよ」

霖之助はそれを伝えて蓮次に刀を返還すると、近くに置いてあった茶碗に入った御茶を飲み干した。

＊＊＊＊

刀の鑑定を終えた蓮次は、香霖堂に売られてある商品を見て回る。蓮次自身、特に何かを購入する訳では無いだろう。だが立ち並ぶ品々を目にすれば、人々は誰しも自然に拝見したくなるものである。

「へぇ、こんな物まで置いてあるのか」

蓮次が手に取った物は、デジタル式の万歩計であった。丸型で電源を押すと歩数が表示される簡単な仕組みであり、手軽に使用出来るようになっている。

蓮次は霖之助に、「一応商品であるから丁寧に扱ってくれ」と念を押されていた為、万歩計をそっと元の位置に戻す。

「君が冷やかしだけの客では無い事を期待してるよ」
「はい？」

商品を拝見する蓮次をちらほらと目で追っていた霖之助は、ぼそりとそう呟いたが蓮次にはそれが聞き取れて無かったようだ。

「いや、何でも無い……。好きに見ていってくれ」

霖之助のその一言に蓮次は、ただ疑問を浮かべるのみであった。更に店内の品を見ていく蓮次は、霖之助が座る机の上に置かれたある物に目がいく。シンプルにデザインされた写真立てがそこにはあり、その中には一枚のモノクロ仕様の写真が飾られている。

写真に写るのは、眼鏡を掛けた椅子に腰掛ける男とその男の膝に

乗り、笑顔で愉しげな少女の姿であった。

「この写真は……」

「ああ、この写真か……これは僕が随分前に撮って貰った写真さ、一緒に写っているのは魔理沙という名前の子さ」

「……魔理沙か」

蓮次はその少女を見て、何処か納得した表情を浮かべる。

「おや、知っているのかい？」

「まぁ多少は……館の常連だ」

館に来ては盗み弾幕ごっこで勝負となれば止められない少女であり、本が無くなれば一番に疑われるのは魔理沙である。実際犯人の大半が魔理沙でありその確率はほぼ百に等しい。

蓮次も止めようとするが魔理沙の素早さは、館でも引けを取らない。身長差があれど身軽な魔理沙には殆んど追いついた事が無い。

「まぁ、不良少女が第一印象だな」

「……ははは、違いない。魔理沙は何処に出向いても問題児だからね」

思わず苦笑いをしてそう話す霖之助。霖之助自身も、魔理沙については困らされているようだ。

「……はぁ、環境が魔理沙をああしてしまったのかもね」

霖之助はそう呟き写真立てを持ち、何処か哀しげな表情を浮かべていた。

蓮次は商品を観ていき珍しい商品に触れるなか、最終的に先程興味を示した万歩計を購入し、香霖堂を後にした。

購入の際に霖之助は、「何故歩数なんて測る必要があるんだろうね？」と消極的な発言をするが、蓮次は「さぁ？」とだけ答えそれを懐中に入れていた。

そのまま蓮次は、未だ冷たい春の道を、氷雪の音をザクザクと鳴らしながら館の帰路を歩いていた。

「あ、そう言えば何で魔理沙が写真に写っているのか聞くのを忘れてたな……」

季節は卯月。春の気配を感じさせず時間は過ぎる。そしてこの時、既に新たな異変が始まりを迎えていた。

＊＊＊＊

幻想郷の遥か上空。普通ならば何一つ無い空があるその場所に、この世とあの世の境目が存在する。そこに張られた結界、そこを越えれば霊界がありその奥に白玉楼と呼ばれる地域、また屋敷が存在する。

そして、その地域一帯には幻想郷に未だ姿を見せない桜の姿があった。

第２４話「冬の妖怪」（前書き）

今回から春雪異変です。
不定期更新ですが、よろしくお願いします。

第２４話「冬の妖怪」

蓮次は香霖堂での用を済ませ紅魔館への道のりを歩いていた。

「はぁ、寒い……夏場の氷の張った湖を半年ぐらい前に見た時は驚いたが、まさかこうも寒い日が続くとはな、とにかく館に戻って暖を取りたい」

蓮次はその言葉と同時にペースを上げて走り出す。この寒さの中であっては、走らずには要られないのか蓮次は全速力で道を掛ける。

「あ！　あんたは……」

「ん？」

走る蓮次に突然声を掛けて来たのは、青髪で赤いリボンを着け背中に透明の羽根のような物が浮いた妖精の少女であった。

以前に蓮次を別の意味で苦しめた少女、チルノである。

「さ、寒い！」

「以前何処かであった？」

「き、気のせいだ。俺は寒いから失礼させてもらう、さらば」

チルノから発せられる冷気は、既に寒さに凍える蓮次を更に苦しめるものである。寒さ対策にマフラー、コート、手袋を装備している蓮次であるが、その冷気にはあまり効果を発揮していないようだ。

「待て、何で逃げるのよ」

「知るか、自分の心に聞いてみろ畜生！」

蓮次はチルノから逃れるべく、一目散に走る。途中まで追っていたチルノも、蓮次の追うのが飽きたのか何処かに消えていた。
蓮次は再び紅魔館への帰路を目指した。

「寒い……」

蓮次はチルノの冷気により更に寒さが増したのか、体を小刻みに震わせる。顔面は汗が冷気で凍っており、鼻からは鼻水が露になっていた。

「なんで俺は、あいつに合う度に追われなきゃならんのだ」

蓮次はチルノとの掛け合いに不満が漏れる。と言うのも蓮次は幻想郷に訪れた時にチルノに会って以来、今回を含め三度目の襲撃を受けていた。
ちなみに、これを襲撃と見ているのは蓮次のみでありチルノ自身はそうは思わないだろう。

「俺は妖精というのが、もっとこう力を貸してくれたり回復してくれる生き物かと思っていたぞ……。だが実際は攻撃してくる奴までいるし……」
「それは、カルチャーショックの類いかな？」

何処からともなく聞こえたその声に、蓮次は驚きつつもその方を向く。

するとそこには、薄い紫の髪に白いヒラヒラの袖と胴体部が青紫の服と同じく青紫のスカートを、そして白い帽子を身に付けた女性が蓮次を見ていた。

「……どちら様で？」

蓮次に再び凍えるような寒さが訪れる。その冷気はまるで、その少女が発しているようにも見える。

その姿はまるで、寒い冬に出てくる雪女に酷似している。

「誰と言われてもね……まぁ貴方の凍えの原因の一つかな？」

「ああ、そうかい。なら俺は帰らしてもらうぞ」

蓮次はそう言って再び館に向かって走り去ろうとする。――だがその方を向いた先に、少女は先回りをしていた。

「まぁまぁ、慌てない慌てない」

「……何かに用ですか？」

「今年は寒い日が続いている。そうは思わない？」「さぁ？　去年のこの時期には俺、ここには住んでなかったし……」

「そう、今年は桜の開花が見られないそうだから、私も充実させて貰ってる」

その少女の言葉の意味に疑問を感じたのか、蓮次は不思議そうな顔で少女に言葉を投げ掛ける。

「桜が嫌いなのか？」

「いいえ」

「春が嫌いなのか？」

「いいえ、どちらでも無い。ただ……」

少女は一度間を置いて空を仰ぎ、再び蓮次の方を見て「もし春が来ない原因の一つに、私が関係しているとすればどうかしら？」と今度は蓮次を睨むように言った。

その言葉と少女の目付きに蓮次は一度、後退して視線を少女の姿一点に絞る。

「それじゃあ、これ以上の言葉は要らないね。後は貴方のポケットに入ったそれで決めましょう」

少女が指差した先は蓮次の右のポケットであり、そこには蓮次が創作を続けたスペルカードが収納されている。

「弾幕ごっこ？」

「ええそうよ。私はレティ・ホワイトロック、冬の妖怪。よろしく」

「丹波蓮次だ、まぁある館で雑用をしている」

双方が名乗り終えると、今度は互いにスペルカードを取り出す。弾幕ごっこの合図代わりに近いのかもしれない。

「それじゃあ、始めましょうか？」

蓮次とレティと名乗る少女は、その言葉と同時に動き出した。

「いくわよ」

レティは浮遊しながら弾幕を繰り出し、蓮次を狙う。対して蓮次は地上から弾幕で応戦して、それを防ごうと試みた。

「なんか、量が多くないっすか？」

「あなたの弾幕が薄いだけよ」

「そうですか……」

密度の多さ弾幕の数、共にレティの方が上回っており開始早々蓮次が押される展開になる。また弾幕の見栄えや美についてもレティが上手である。

「やっべ、こっち来た」

押された蓮次は何発か被弾して、体が一瞬よろめくも体勢を立て直し反撃に移る。

「『キャンディセルフス』」

蓮次は反撃と同時にスペル宣言を行い、多彩な飴を弾幕として出現させる。ただの飴では無く蓮次が発想した弾幕用の飴であり、普通の飴より大きく威力も少しはある。

蓮次を纏うように現れたその飴が、レティに向かって飛び掛かるかの如く攻撃を始めた。

「ちょっと遅いかな？」

だがレティはその攻撃をギリギリの所で避け、そのまま蓮次に接近する。

「げ……」

「隙見つけた、『リンカリングゴールド』」

蓮次の目の前でスペル宣言を行うと、円のようなものを描き平行に動く弾幕を放つ。

瞬時に対応ができない蓮次は、そのまま直撃を受け体が自然と後ろへ下がる。激痛を伴う程の痛みでは無いにしろ、服の一部が衝撃により破れる。

「しゃ、洒落にならん……」

レティの動きに少しばかり驚きを隠せずにいた蓮次だが、次のレティの行動に更に驚かされる事となる。

「はい、私の方が上手でしかも好成績」

「好成績？　これ、評価とかあるのか……」

そう疑問に感じる蓮次の言葉にレティは答えず、蓮次の背後へと回る。そして次の瞬間蓮次が手に持っていたスペルカードを、サッと取り上げた。

レティ・ホワイトロック、魔符『キャンディセルフス』を取得。

「俺のカードが……」

レティの行動に蓮次は驚く以上に、混乱していた。突然スペルカードを奪われ頭が追いつかないとでも言おうか、突然の事で対応が出来ないでいた。

「おい、何をするんだ。それは俺のスペカだ、返してくれないか？」

ようやく我に返った蓮次は、レティに向かって強く返還を要求する。

だがレティはというと、剥奪したスペルカードを見るなり悪戯っぽい笑みを浮かべ、蓮次の方を見る。

「このスペルカード、返して欲しければ私に納得の勝負をする事ね。そうじゃないと私が貰っちゃうわよ」

そう言って奪ったスペルカードをヒラヒラと扇ぎ蓮次に見せつける。その行動から見て挑発しているのは明らかである。
レティの挑発が効いたのか蓮次は、一気にレティとの距離を詰め一直線に飴の弾幕をレティに叩き込もうとする。

「ほら、こっちよ」
「……しまった！！」

だが挑発に乗り苛立つ相手を返り討つ事はレティにとって、容易い事であり背後を取られた蓮次はレティの格好の標的と化していた。

「はい、もう一本」
「うおっ！」

間一髪で背後からの追撃を回避する蓮次であるが、レティはそのまま攻撃を続けてくる。
何としてでもスペルカードを取り戻したい蓮次は、そのままレティの方を向き放つ弾幕を相殺させ、レティが左手に持つそのカードに手を伸ばした。

「あら……」
「返して貰うぞ？」

そう言って蓮次は奪い返ししっかりと右手で持ち、スペルカードを確認する。だがそこに書いていたのは『スカ』の二文字のみだった。

「……」
「残念、本物はこっちよ」

レティはいつの間に偽物とすり替えていたらしく、蓮次が取り戻したと思われたそれは、ただの紙であり本物はまだレティが持っていた。

蓮次は一瞬の喜びから一気に下落し、『スカ』と書かれた紙を「畜生」と声を上げて破り捨てた。

第２５話「一瞬の勝負、悪戯」（前書き）

前回はレティさんの無双でしたが、今回蓮次の巻き返しがあるのか……

実は無いんだな（えっ

今回は蓮次の変わりにあの方がやってくれます

では、ごゆっくりぃぃ！！

第２５話「一瞬の勝負、悪戯」

「『ソルト＆シュガー』」

蓮次はスペルカードを宣言して、白色の飴を媒介してレティに向けて放つ。

「あら、中々やるわね……でもまだまだ遅いよ」

レティは蓮次の弾幕をこれまた意図も容易く回避し、蓮次のスタミナが切れそうな所を見計らい隙を突き、体勢を崩させた。

「いて……」

「どう、まだ続ける？」

レティに奪われたスペルカードを取り戻そうと弾幕ごっこを挑んだ蓮次ではあったが、未だにそれを実現できずにいた。それどころか空中戦のレティに対して地上の蓮次では、些か不利な面もあった。

「それとも、もう諦める？」

「……」

蓮次はある事を考えていた。ここで取り戻す事を諦めても能力自体消える訳では無く、単に技名を奪われただけであり筆か何かでもう一度書けばまた使える。

つまり替えは幾らでもある為、ここで執着する必要が蓮次には無いという事だ。

「よし、諦……」

「待ちなさい！」

何かを言う前に、誰かの声が蓮次の言葉を征す。その声は蓮次にとって聞き覚えのある声であった。

「まさか、諦めるなんて考えてないでしょうね蓮次」

「……いえ、滅相もない」

蓮次は何かに怖れるかのように、首を左右に強く振る。声の主は銀髪の少女、紅魔館のメイド長である十六夜咲夜が蓮次の隣に立っていた。

「全く、中々帰ってこないと思ったらこんな所で油を売っていたの」

「いや、だってあの人にスペルカード取られたし……」

蓮次はレティを指差してそう言う。咲夜はレティの方を見詰めると目を細くし蓮次より前に立つ。

「どうやら、私の部下がお世話になったようね」

「あら、ひょっとして貴方がこの子の上司？」

「まぁ一応そうなる」

レティと咲夜はそう言葉を交わすと自然にスペルカードを抜き取る。

「蓮次、ちょっとそこで待ってなさい、私があいつを仕留めてくるから」

「はい、お願いしやす姐さん」

「姐さんって、あなたね……」

自分が戦う必要の無くなった事で安堵を得た蓮次が、調子良く咲

夜をおだてる。その姿にレティから冷たい眼差しが蓮次に向くが、全くもって目を合わせようとはしなかった。

「相手は私でしょ、余所見をしないでもらいたいわ」
「……ああ、そうだった私はレティホワイトロック、よろしくメイドさん」
「私は紅魔館在住、十六夜咲夜……自己紹介はこんなものでいいわね、それじゃあ……」

会話をしていた咲夜は突然と姿を消えた。その出来事にレティが自分の目を疑う間も無く、レティの眼下に銀色の髪が映った。

＊＊＊＊

勝負は一瞬で着いた。
蓮次がその戦闘を拝む事無くして咲夜の技、『殺人ドール』によってレティはあえなくノックアウトとなり、咲夜が勝利した。
その光景に蓮次は唖然とした表情で見つめていた。苦戦した相手をこうも呆気なく倒されてしまい、蓮次も言葉が出なかった。

「はい終わり、これから私達は向かう場所があるから、スペルカードを返して頂戴」
「わ、判った……はい」

先程までの元気は何処へレティからは笑顔が無くなっていた。蓮次と似たような気持ちで、一瞬で倒された事に半信半疑とも言えるような状態である。

「それじゃあ行こうか蓮次」
「……へ、行くって何処へ？」
「博麗神社。彼処へ行けば何か分かると思って、ほら今年は春が全く来ないってお嬢様が嘆いてたから……とにかく急ぐわよ」

咲夜はそう言うと蓮次の襟部分を強く引っ張る。体が服と一緒に引っ張られる為、首を絞められた蓮次は苦しそうにする。
そんな蓮次にお構い無しと咲夜はそのまま引き摺り、森の中へと二人は消えていった。

「……何事？」

二人の様子にレティは、ただただそう言うしかなかった。

「まぁいいや、帰ろう」

我に帰ったレティは機嫌を取り戻し、静かに空を見詰める。

「あーあ、もうずくこの季節も終わるなぁ……」　レティは染々とそう言い、冬の道を一人歩き始める。
冬の妖怪であるレティは冬のみの行動が大半であり、それ故に春を迎えれば自然とその姿を消す。

「おや？」

レティがポケットに手を入れ、ふと何かに触れる感触があるのに気がつく。
そこには、身に覚えの無い袋で包まれた飴玉が五つばかり入っていた。レティはそれを見て誰がポケット容れたのか、直ぐに特定する事が出来た。

「あいつか……いつの間に」

レティはそう言うと、二人が姿を消した森の方を見て、掌のほんの小さな部分を占める一粒の飴を口に含んだ。

「あまっ……」

レティはそう小さく言葉に出すと、残された小さな冬を一人歩き始めた。

＊＊＊＊

レティに勝利した咲夜とスペルカードを取り戻して貰った蓮次は、咲夜の言葉通り博麗神社を目指し歩いていた。

「なぁ、咲夜さん。一つ聞いて良いですか？」
「なに？　急いでいるんだから手短に言って頂戴」
「みんな、どうやって空を飛んでいるんだ？　霊夢にはその力があるって聞いたから、なんとか納得出来たんだけどさっき戦ったレティにしても咲夜さんにしても、浮遊しつつ戦闘してたからさ」
「ああ、その事ね」

咲夜はそれを聞いて、腕を組み何かを蓮次に言おうとするが、一度頭を傾けて今度は右手で頭を押さえる。

「魔力か何かじゃない？」
「なんで疑問系なんですか？」

「考えた事もなかったから、お嬢様も妹様もパチュリー様も、小悪魔や美鈴もメイド達だって普通に飛んでるし……」
「ああ……確かに、俺もここに来て十ヶ月ぐらいになるけど、半分忘れかけてたからな……」

蓮次はそれを言われて周囲の人間、いや大半は妖怪であるが館内の住人は誰もがでは宙に浮く事を思い出した。
最初は妖怪だから空を飛べるという根拠も無い理由で受け流していたが、霊夢はともかく魔理沙や咲夜と言った人間側にもいる事を知り、もしかしたら自分にも空が飛べるのではと最近になって蓮次は考えていたのである。

「まぁ、とにかく強く念じてみたら飛べたりするんじゃない？」
「なる程……」

蓮次は空が飛べる期待感に胸を踊らせつつ、ふと薄暗く冬独特の重い空を見上げる。

「……ん？」
「どうしたの？」
「今、一瞬だけ桃色が……いや気のせいか」

蓮次はそう一言漏らすともう一度前を向いた。その姿に不思議そうな表情をする咲夜ではあったが、すぐに前を向き目的を目指した。

神社に向けて足を進める二人であったが、寒さの為か蓮次の方に異変が起きる。歩く度に少し足を止めてくるのである。
その異変を一番に感じ取った咲夜は、蓮次に声を掛けた。

「もしかして、トイレ？」

「……はい、どうやらこの寒さが効いたみたいで……」
「神社までまだ少しあるわよ、我慢できる？」
「……いや、ちょっと無理かも」

蓮次の顔は真っ青で、小さく足踏みをしている。咲夜は小さく溜息をつくと少し躊躇いつつもこう質問した。

「それで、どっち？」
「……小です」
「そう……そこの森に行ってきなさい、待ってるから」
「はい」

咲夜に許可を貰った蓮次は、少しずつ前を押さえながら木々の間を潜り抜ける。
咲夜は、そんな蓮次を見て「大丈夫かしら」と呟き、両手を顔に近づけると息を吹きかけた。

＊＊＊＊

幻想郷上空、結界と現世の向こう側にある世界。

その奥にある一つの屋敷と周辺にある庭園と屋敷への道、その道を一人歩く女性がいる。
女性の道の周りには、未だ幻想郷では開花の無い桜が並ぶようにして咲き誇っており、その一つ一つが濃い桃色をしており、紅色に近いその桜は道を鮮やかにする。

「今年も綺麗な桜が咲いた事……」

桜の並木と同じ程に濃い桃色の髪に、季節に合わせた桜を描いた青白い着物、頭には帽子と一緒に添えられた三角頭巾があり、そこには『の』の字が描かれている。

その女性は、並木を歩き一本の巨大な木の前で足を止めた。

周りの並木より遥かに大きな姿をした木ではあるが、枝を晒すばかりでそこからは花を咲かすどころか、葉の一つも無い状態であった。

「さて……いつになったら姿を見せてくれるのかしら？　――西行妖（かし）」

女性は楽しそうにそう言い、西行妖と呼ばれる木を見つめている。

それに反応するかのように白い魂達が踊るようにして、西行妖の周りを取り巻いており、まるで何かを誘うかのようだった。

「早く、会えるといいわね」

＊＊＊＊

「おー寒い寒い……」

咲夜と一時的に離れた蓮次は、近くにあった木の場所で用を足していた。

「しかしあれだな……」

ここに来て蓮次は別の問題を抱えていた。彼自身も場所の選択を間違えたと後悔しているだろう。

「ここって妖精の通行量が多かったんですね」

蓮次が用を足す直ぐ後ろには、多くの妖精達が通過するメインストリートだった。

通過する妖精の中には蓮次の姿をじっと見つめる者や、けらけらと笑う者、中にはわざわざ蓮次の正面に姿を見せる者までいた。

「うわ……はやく戻りてぇ……」

羞恥にかられた蓮次は急ぎ用を足し、咲夜の所に戻ろうとした。

「ん……？」

そんな蓮次の目の前に、一匹の妖精が立ち止まり蓮次の方を見る。不思議に思った蓮次であったが、次の瞬間その妖精は蓮次目掛けて口から水を吐いた。

「うお、いきなり何しやがる！」

妖精は笑いながら蓮次をからかう。そんな妖精に怒りが籠る蓮次だが時間もそれほど無い為、妖精を一度睨みつけた後、急ぎ咲夜の待つ場所まで走った。

館に住むメイド妖精のイメージが蓮次には強かった為、妖精が本来悪戯好きである事を蓮次は忘れていたのである。

「おかえり、どう間に合った？」
「ああ、まぁどうに……」
「……ご愁傷さま」
「へ？」

蓮次が間に合ったという前に、咲夜からそんな一言が返ってくる。
咲夜は何故か蓮次から目を避けて、少し距離を置く。

「どうしたんですか？」

咲夜が蓮次の下に目をやった為、蓮次もそれに合わせて下に視線をやる。
「あ…」
蓮次はようやくその理由に気がつく。
何故なら、先程の妖精が吐いた水が蓮次の急所近くに濡れていたからである。咲夜がご愁傷さまと言った事も、少し距離を置かれているのもこれが原因であった。

「さ、咲夜さんこれは違うんだ！」
「仕方ないわよね。間に合わなかったんだし……皆まで言わなくていい」
「ちょっと！　目を背けないでください」

完全に蓮次は咲夜に誤解されていた。何について誤解されているかは、だいたい予想がつくだろう。

「館のみんなには黙っておくから、私達だけの秘密にしておくわ」
「なにその嬉しくない秘密の共有、誤解ですって！！」

蓮次はその後、必死に事情を咲夜に説明し、どうにか誤解を解いたが濡れている事に変わりは無く、残りの神社までの道を蓮次は下半身の凍りつくような寒さに耐えながら進んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6499v/

東方飴人録

2011年12月10日02時48分発行